

仙人西遺跡

1997

財団法人 水沢市埋蔵文化財調査センター



カツ一図版1 仙人町駅舎新築工事



カラー図版2 SD101出土漆器



カラー図版3 SD101出土漆器

序 文

仙人西遺跡は、国道4号線バイパス工事にともなう建設省の開発地区であり、平成7年度、8年度の2年間にわたっての発掘調査がありました。尚、今年度の調査遺跡は、仙人西遺跡、東袖ノ目遺跡、林前I遺跡、杉の堂遺跡、胆沢城跡、の5遺跡であります。が、とくにも仙人西遺跡では、縄文、弥生、古代、中世、近世にわたって埋蔵遺物が発掘されております。これらの出土物を第19回岩手県埋蔵文化財展に於いて展示速報いたしました。ところで、この調査にあたり建設省岩手県工事事務所の埋蔵文化財保護に対する心からなるご理解により調査期間を延長し十分調査研究できましたこと、さらに、貴重な遺跡、埋蔵文化財を報告書としてまとめ記録保存できますことに深く感謝申し上げます。

仙人西遺跡は、水沢市の北東、北上川の西岸、江刺市との境界にある小高い丘陵に位置し、遺跡の主体は、15世紀ごろとおもわれる薬研堀が巡らされた方形居館跡であることが判明しました。ここからの出土遺物は15世紀代のものが多く、これらの遺物は県内はもとより、東北地方でも出土例が極めて少なく僅かに花巻市笹間館跡から土器片数点と福島県長沼町の南古館遺跡（方形居館跡）からの「かわらけ」ぐらいなものとされております。のことから仙人西遺跡出土遺物は、今後15世紀代における基準資料として貴重な価値が含まれているものと考えられます。

この報告書が何らかのかたちで今後の調査研究に役立てばと存じおります。更に、多くの一般の方々にも活用され一層の埋蔵文化財に対する愛護と理解をいただければ幸いります。

最後になりましたが、2年間の発掘調査にあたり多大なるご支援、ご協力いただきました建設省、関係工事会社各位、調査研究にあたりご指導、ご助言をいただきました岩手県文化課、岩手県埋蔵文化財センター、平泉郷土館、水沢市教育委員会、その他多くの関係機関の方々や地域の皆様に心からお礼申し上げます。

平成9年3月

水沢市埋蔵文化財調査センター

所長 及川由己

例　　言

- 1、本書は岩手県水沢市佐倉河字仙人地内に所在する仙人西遺跡の発掘調査報告書である。
- 2、調査は、国道4号水沢東バイパス改築工事に伴う事前調査として実施されたものであり、水沢市の委託により、水沢市教育委員会の指導のもとに財団法人水沢市文化振興財團水沢市埋蔵文化財調査センターが行った。
- 3、仙人西遺跡の調査対象面積は4,400m²であり、調査面積は4,400m²である。
- 4、発掘調査は、伊藤博幸、池田明郎、千田政博が担当した。
- 5、本書の作成は、遺構の実測、縮尺及びトレイス等は青木綾子、千田サノ子、渡辺弘子が行い、写真、執筆、編集は伊藤、池田、千田が行った。なお、V章は伊藤が執筆した。
- 6、室内整理にあたり、次の方々から御協力及び御指導を受けた。(敬称略)
佐藤嘉広(岩手県教育委員会文化課)、飯村均(福島県文化センター)、山口博之(山形県埋蔵文化財センター)、高橋與右衛門・松本建連・羽柴直人・杉沢昭太郎(岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財センター)、本沢慎輔・及川司・八重樫忠郎・菅原計二(平泉町文化財センター)、千葉周秋(金ヶ崎町教育委員会)、井上雅孝(滝沢村教育委員会)、橋口定志(豊島区教育委員会)、前川佳代(古代学研究所)、服部敬史(八王子市郷土資料館)、福田健司(東京都埋蔵文化財センター)
- 7、本書で使用した土層図の注記に関しては、「新版標準土色帳」(1994)を参考にした。
- 8、本書に掲載の遺跡周辺地形図は、水沢市都市計画図(縮尺2,500分の1)を原寸のまま使用し、スケールを付していない。また、断面図のレベルは42.7mで、異なる場合は数値を付している。
- 9、座標は公共座標第X系を使用し、磁北は座標南北軸に対しN 7° 20' Wである。また、遺構平面図の原図は空中写真測量によるS=1/20図を基本に作成した。
- 10、本書で使用する遺構表示略記号は、下記による。
S A : 柱例、柱穴　　S B : 掘立柱建物　　S D : 堀・溝　　S E : 井戸　　S I : 積穴住居
S K : 土壠　　S X : その他不明遺構

目 次

序 文	
例 言	
I. 調査の概要	1
II. 遺跡の位置と環境	1
III. 遺 構	6
1. 東地区	6
(1) 堀 跡	6
(2) 井戸跡	6
(3) 土壇跡	6
(4) 溝 跡	12
(5) ピット群	12
2. 西地区	12
(1) 堀 跡	12
(2) 掘立柱建物跡	16
(3) 柱列跡	24
(4) 竪穴住居跡	25
(5) 井戸跡	32
(6) 土壇跡	32
(7) 溝 跡	44
(8) その他の遺構	48
(9) ピット群	51
(10) 近世墓	51
IV. 遺 物	52
1. 中・近世	52
(1) 中国産陶磁器	52
(2) 国産陶磁器	53
(3) 土師器及び瓦質土器	53
(4) 漆 器	55
(5) 木製品	57
(6) 金属製品	58
2. 古 代	58
3. 繩文・弥生時代	66
V.まとめ	67
1. 遺構と遺物	67
(1) 堀 跡	67
(2) 掘立柱建物跡	68
(3) 柱列跡	68
(4) 竪穴住居跡	68

(5) 井戸跡	69
(6) 土壙跡	70
(7) 溝 跡	70
(8) 近世墓	70
(9) その他の遺構	71
2. 堀立柱建物の成立と展開	71
(1) 1 期	71
(2) 2 期	71
3. 仙人西遺跡発見の方形居館をめぐる二、三の問題	73
(1) 遺構期区分と変遷	73
(2) 遺跡の性格について	73
(3) 歴史的性格に関する考察——城館ネットワーク論	74

報告書抄録

写真図版目次

卷頭カラー図版 1 仙人西遺跡全景写真	
2 S D101出土陶磁器	
3 S D101出土漆器	

図版 1 遺跡全景	77
2 発掘区西地区東半部全景	78
3 発掘区西区全景	79
4 東地区溝跡 S D172完掘状況／同埋土砂面状況	80
5 東地区溝跡 S D172カゴ状編物出土状況／同漆器出土状況	81
6 東地区井戸跡 S E173／同埋土断面状況	82
7 東地区土壤跡 S K201／東地区溝跡 S D175	83
8 西地区堀跡 S D101と東辺仕切り遺構／同と検出遺構全景	84
9 堀跡 S D101北辺部／同北辺部中央埋土断面状況	85
10 堀跡 S D101北辺隅付近全景／同北西隅近景	86
11 堀跡 S D101西辺部埋土断面と西仕切り遺構／同北東隅全景	87
12 堀跡 S D101北東隅埋土断面／同東辺部東仕切り遺構	88
13 堀跡 S D101東辺部／同東辺部埋土断面と階段状遺構	89
14 堀跡 S D101出土草履／同出土柄杓	90
15 堀跡 S D101出土古錢／同近 景	91
16 西地区堀跡 S D115埋土断面／建物跡 S B197・205・溝跡 S D122・123	92
17 建物跡 S B206・溝跡 S D122・豎穴住居跡 S I 125・柱列跡 S A251・252 建物跡 S B165全景	93
18 建物跡 S B165／建物跡 S B233・234・S X144・土壤跡 S K146	94
19 建物跡 S B232柱掘り方(P7)立割り状況／建物跡 S B233柱掘り方(P5)立割り状況	95
20 豊穴住居跡 S I 120／豎穴住居跡 S I 125貯藏穴	96

21	豎穴住居跡S I 150検出状況／同完掘状況	97
22	豎穴住居跡S I 160／同貯藏穴	98
23	豎穴住居跡S I 213／豎穴住居跡S I 215	99
24	豎穴住居跡S I 215と土壤跡S K121・192・236／豎穴住居跡S I 215炉跡	100
25	土壤跡S K121／土壤跡S K133	101
26	土壤跡S K136／土壤跡S K137	102
27	土壤跡S K138／土壤跡S K139	103
28	土壤跡S K140／土壤跡S K141	104
29	土壤跡S K143／土壤跡S K145	105
30	土壤跡S K146／土壤跡S K158	106
31	土壤跡S K166／土壤跡S K167	107
32	土壤跡S K183／土壤跡S K190	108
33	土壤跡S K194／土壤跡S K195	109
34	土壤跡S K196／土壤跡S K221とS K219	110
35	溝跡S D102／溝跡S D102・103	111
36	溝跡S D159／小豎穴S X144	112
37	S X238／土器埋設遺構S X208	113
38	S X248／陥し穴状遺構S X250と土壤跡S K145	114
39	近世墓（1～5号墓）遠景／同完掘状況	115
40	近世墓（2号墓棺柩）／同棺内	116
41	仙人西遺跡出土陶磁器	117
42	仙人西遺跡出土土師器・瓦質土器	118
43	仙人西遺跡出土漆器・木製品	119
44	仙人西遺跡出土木製品	120
45	仙人西遺跡出土木製品	121
46	仙人西遺跡出土木製品・金属製品	122
47	仙人西遺跡出土中国錢	123
48	仙人西遺跡出土中国錢	124
49	仙人西遺跡出土中国錢	125
50	仙人西遺跡出土古錢	126
51	仙人西遺跡出土土師器	127
52	仙人西遺跡出土繩文・弥生土器	128
53	仙人西遺跡S K121出土弥生土器	129
54	仙人西遺跡S X144出土繩文土器	130
55	仙人西遺跡S K184出土繩文土器	131

I、調査の概要

発掘調査は、下記の日程で行った。

[平成7年度]

調査対象面積：2,200m²

調査実施面積：1,800m²

現場作業：平成7年10月12日～12月23日、平成8年3月1日～3月23日

室内整理作業：平成7年12月26日～平成8年3月31日

[平成8年度]

調査対象面積：2,600m²

調査実施面積：2,600m²

現場作業：平成8年4月2日～8月31日

室内整理作業：平成8年9月1日～平成9年3月30日

本書では両年度あわせて報告を行う。調査区は農道を境に東側を東地区、西側を西地区と称する。

東地区は平成8年度、西地区は平成7年度及び8年度の調査地区に該当する。東地区的標高は40.9～41.1m、西地区的標高は42.3～42.5mである。

II、遺跡の位置と環境

仙人西遺跡は水沢市の北東端、東北本線JR水沢駅から北北東約2.5kmにある。

遺跡のある胆沢平野は、北西を胆沢川が、南西を衣川（北股川）が、東を北上川が限り、胆沢町若柳の市野々を扇頂部にして、東方に約20kmの半径をもって、北上川に及ぶ広大な胆沢扇状地と、北上川の氾濫平野からなる。胆沢川扇状地は南の高位から北の低位へ順に、一首坂、胆沢、水沢の三段丘に分けられ、仙人西遺跡はこの低位面である水沢段丘上位面の縁辺部付近にある。北側段丘崖の下は北上川旧河道となっている。一帯の標高は41～43mである。

仙人西遺跡周辺には多くの遺跡があり、すぐ南東方には仙人東遺跡^Ⅰと沢田遺跡^Ⅱが隣接する。仙人東遺跡からは、北上川旧河道の岸から西に伸びる幅2.5mのバラス舗装した道路跡が長さ40mにわたって発見されている。沢田遺跡は縄文時代中期末を中心とする遺跡だが、平安時代の堅穴住居跡も3棟見つかっている。北西方に目を向けると、水沢段丘上位面の段丘縁辺部を利用した館跡、白井坂I遺跡^Ⅲがあり、掘跡、土塁跡、柵列跡、門跡、掘立柱建物跡が見つかっている。ここからは中世陶磁器が約250点ほど出土している。同じ立地の中に、自然地形を利用した堀を持つ中世城館跡、白井坂II遺跡^Ⅳがある。

1) 川村均・村上拓「仙人東遺跡」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成5年度分）』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第209集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、1994年）P.P. 71～76.

2) 村上拓・杉沢昭太郎「沢田・仙人東遺跡」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成6年度分）』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第229集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、1995年）P.P. 19～24

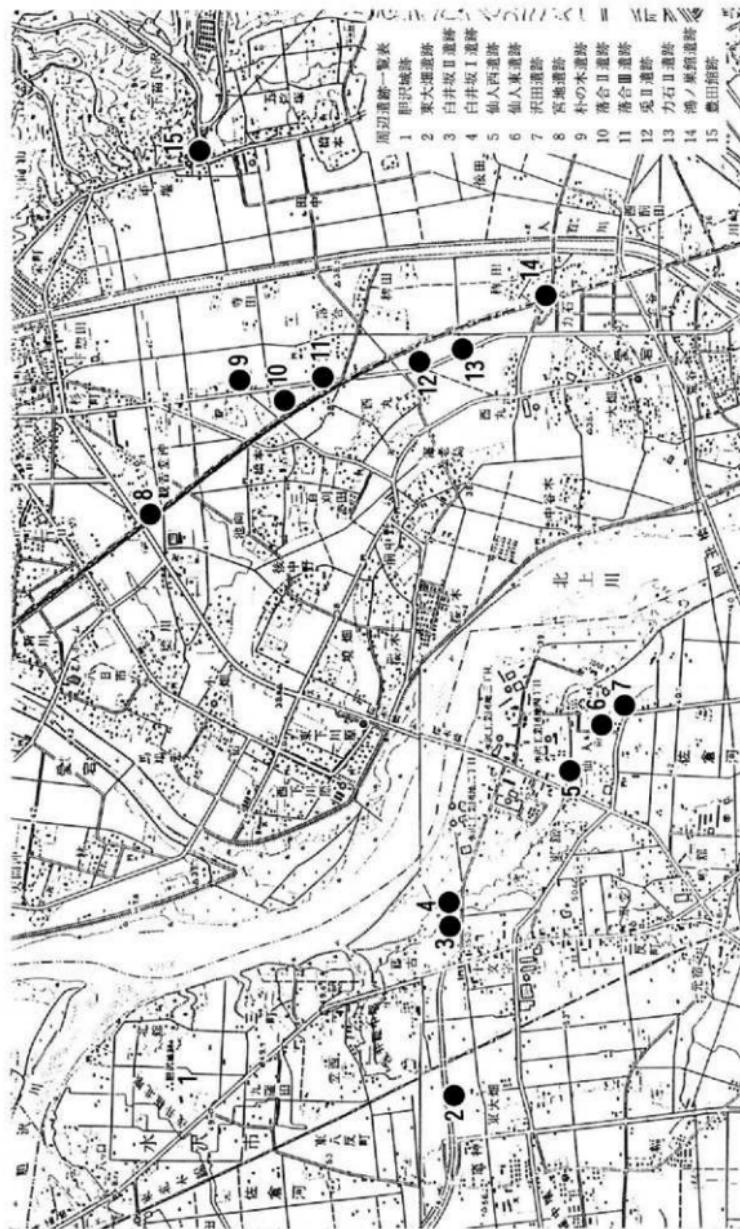
3) 村上拓・川村均「沢田遺跡」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成5年度分）』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第209集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、1994年）P.P. 65～70.

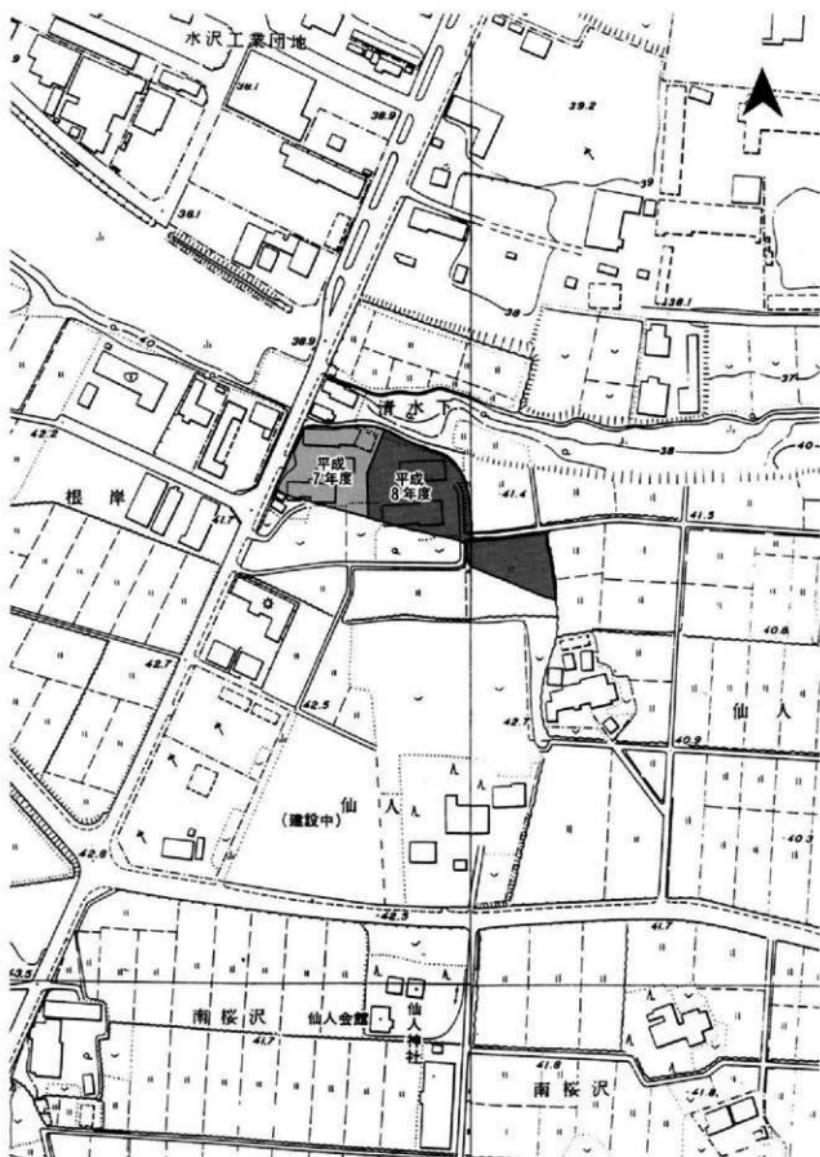
4) 村上拓・杉沢昭太郎「沢田・仙人東遺跡」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成6年度分）』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第229集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、1995年）P.P. 19～24.

5) 川村均・佐々木務・柳田磨「白井坂I遺跡」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成4年度分）』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第195集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、1993年）P.P. 81～86.

6) 杉沢昭太郎・村上拓「白井坂I遺跡」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成6年度分）』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第229集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、1995年）P.P. 9～14.

第1図 連絡位置図 (1:25,000)





第2図 遺跡周辺地形図 (1:2,500)発掘区アミ部分

跡が隣接している。

白井坂Ⅱ遺跡の西方0.8kmには平安時代の集落跡である東大畠遺跡がある。ここから真北に1km行くと胆沢城跡がある。仙人西遺跡から胆沢城跡までの距離は北西方2kmである。

一方、北上川を隔てた対岸、現在の江刺市愛宕地区には、北上川が形成した微高地が数多く残っている。当地区的遺跡は、いずれもこれら微高地上に立地しており、過去において、数度にわたる河川の氾濫を受けていることも明らかにされている。

当地区的遺跡について、仙人西遺跡の北東2.5kmには8世紀末～10世紀中葉までの集落跡宮地遺跡があり、豊穴住居跡が25棟、井戸跡2基などが発見されている。宮地遺跡の南東には朴ノ木遺跡⁷があり、豊穴住居跡が25棟、井戸跡2基などが見つかっている。東西に長い小さな微高地上にあって、平安時代前半期の住居跡5棟、溝跡などが見つかっている。その南側の微高地上には落合Ⅱ遺跡⁸、落合Ⅲ遺跡⁹がある。落合Ⅱ遺跡では微高地北側の低位冲積面の旧河道と推定される部分から大量の平安時代前半の土器が出土し注目された。また「差良紫豆二斗八升」と記した木簡も共伴して出土している。落合Ⅲ遺跡は周辺のなかでは比較的大きく東西に長い微高地上にある集落跡である。主体は平安時代初期に属する豊穴住居跡16棟、溝跡5条だが、中世の遺物とともに中世により近いと思われる井戸跡9基も発見されている。

落合Ⅲ遺跡の南方には兎Ⅱ遺跡¹⁰と力石Ⅱ遺跡¹¹が同一微高地上に隣接している。兎Ⅱ遺跡は奈良時代末～平安時代前半の豊穴住居跡4棟が発見されているが、力石Ⅱ遺跡からは平安時代初期に属する豊穴住居跡29棟、溝跡11条などを見つかり、大集落であったことがわかっている。また、鉄鏃等の武器を中心とした鉄製品83点、石帶2点、砥石、土錘、フイゴの羽口等、出土遺物も豊かな点がこの遺跡の特徴である。

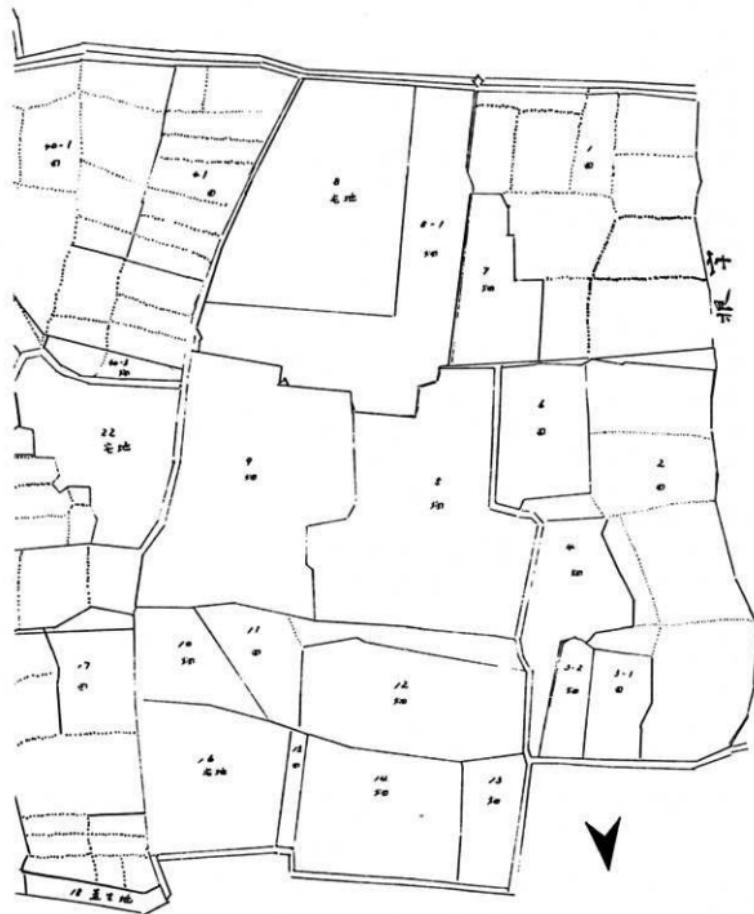
力石Ⅱ遺跡から南へ500mほどで鴻ノ巣館遺跡¹²がある。10棟の豊穴住居跡が発見されており、時期は力石Ⅱ遺跡と同期と考えられている。

以上、北上川東岸の微高地上の遺跡は、平安時代初頭に成立するものが多く、平安期初期からの急激な集落増大の背景が問わなければならぬ。愛宕地区の遺跡群の東には、南流して北上川に注ぐ人首川があり、この一帯の低位面からも仏器の縁軸陶器の出土がみられ、さらに遺跡の分布が拡大していく可能性がある。なお、この人首川を臨む東丘陵端部に11世紀末～12世紀初頭の清衡館と伝承さ

-
- 4) 杉沢昭太郎・村上拓「白井坂Ⅱ遺跡」『岩手県埋蔵文化財調査略報(平成6年度分)』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第229集(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、1995年) P.P. 15～18.
 - 5) 潤川司男・中川重紀「東大畠遺跡」『金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書－Ⅲ－』岩手県埋文センター文化財調査報告書第44集(財)岩手県埋蔵文化財センター、1979年) P.P. 31～180.
 - 6) 1974年から水沢市教育委員会により継続的に調査が行われている。
 - 7) 佐々木勝ほか「宮地遺跡」『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書－Ⅳ－』岩手県文化財調査報告書第48集(岩手県教育委員会、1980年) P.P. 1～346.
 - 8) 高橋信雄・山口丁紀「朴ノ木遺跡」『主要地方道一関・北上線関連遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第8集(財)岩手県埋蔵文化財センター、1979年) P.P. 205～349.
 - 9) 朴沢正耕「落合Ⅱ遺跡」『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書－Ⅵ－』岩手県文化財調査報告書第50集(岩手県教育委員会、1980年) P.P. 223～374.
 - 10) 高橋信雄・三浦謙一・山口丁紀「落合Ⅲ遺跡」『主要地方道一関・北上線関連遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第8集(財)岩手県埋蔵文化財センター、1979年) P.P. 153～204.
 - 11) 高橋信雄・山口丁紀「兎Ⅱ遺跡」『主要地方道一関・北上線関連遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第8集(財)岩手県埋蔵文化財センター、1979年) P.P. 123～152.
 - 12) 高橋信雄・三浦謙一・山口丁紀「力石Ⅱ遺跡」『主要地方道一関・北上線関連遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第8集(財)岩手県埋蔵文化財センター、1979年) P.P. 15～121.
 - 13) 鈴木隆英・高藤孝「鴻ノ巣館遺跡」『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書－V－』岩手県文化財調査報告書第49集(岩手県教育委員会、1980年) P.P. 11～162.

れる豊田館跡がある。仙人西遺跡からは北東方3.7kmの位置にあたる。

今回の発掘調査はこれらの成果を踏まえて実施したものである。現状は宅地と水田、荒蕪地である。



第3図 岩手縣陸中國臥澤郡下河原村字仙人五番繪図（原図を2分の1にしてトレース）

III、遺構

1、東地区

調査区の現状は水田であるが、聞き取り調査によれば北側には戦後間もない頃まで屋敷が構えられていたという。また、西側は開田のため削平が著しい。

発掘調査で発見した遺構には、堀跡1、井戸跡2、土壤跡7、溝跡3、ピット多数がある。以下、主な遺構について述べる。

(1) 堀跡

堀跡SD172 (第5・6図 図版4・5)

調査区西端から発見された堀跡で、西地区を方形に巡る堀跡SD101の東辺部である。遺構は、東半部が地山面まで削平されているため堀底部のみの検出だが、西半部は残存しており堀跡の西岸部が検出されている。堀底部は幅1.1mあり平坦で、検出部分の深さは1.0mある。西岸は堀底より外反しながら、中腹部で屈曲し、再び外反しながら立ち上がる。埋土は大別して3層に分けられ、1層が若干黄褐色土ブロックを含む黒褐色土、2層が若干黄褐色土ブロックと炭化物を含む黒褐色土で、3層が若干炭化物を含む黒色土である。2層から磁器片、曲物、植物種子、3層から漆器椀、曲物、底板、木製品が出土している。

(2) 井戸跡

井戸跡SE171 (第7図)

調査区北側から発見された井戸跡で、円筒形を呈する石組みの井戸側施設をもつ。規模は東西0.7m×南北0.7mある。埋土はプラスチック片の混ざる暗褐色土で、石組みが崩落する危険性があり、下層は未調査である。出土遺物はない。近・現代の井戸跡であろう。

井戸跡SE173 (第8図 図版6)

調査区東端から発見された井戸跡で、東側の一部が調査区外にある。平面は円形で規模は南北2.3m、深さ1.4mある。壁面は丁寧に掘削され、底部よりほぼ垂直に経ち上がりながら上端で緩やかに傾斜しながら内湾する。埋土は5層に分かれ、1層が若干の黄褐色土ブロックと炭化物を含む黒褐色土、2層が黒色土、3層が炭化物10%含む黒褐色土、4層が若干黄褐色土粒含む黒褐色土、5層が青灰色土のグライ層で、3層と4層の間に灰白色火山灰が入る。出土遺物は非クロロ土師器壺破片、クロロ土師器杯・壺破片がある。

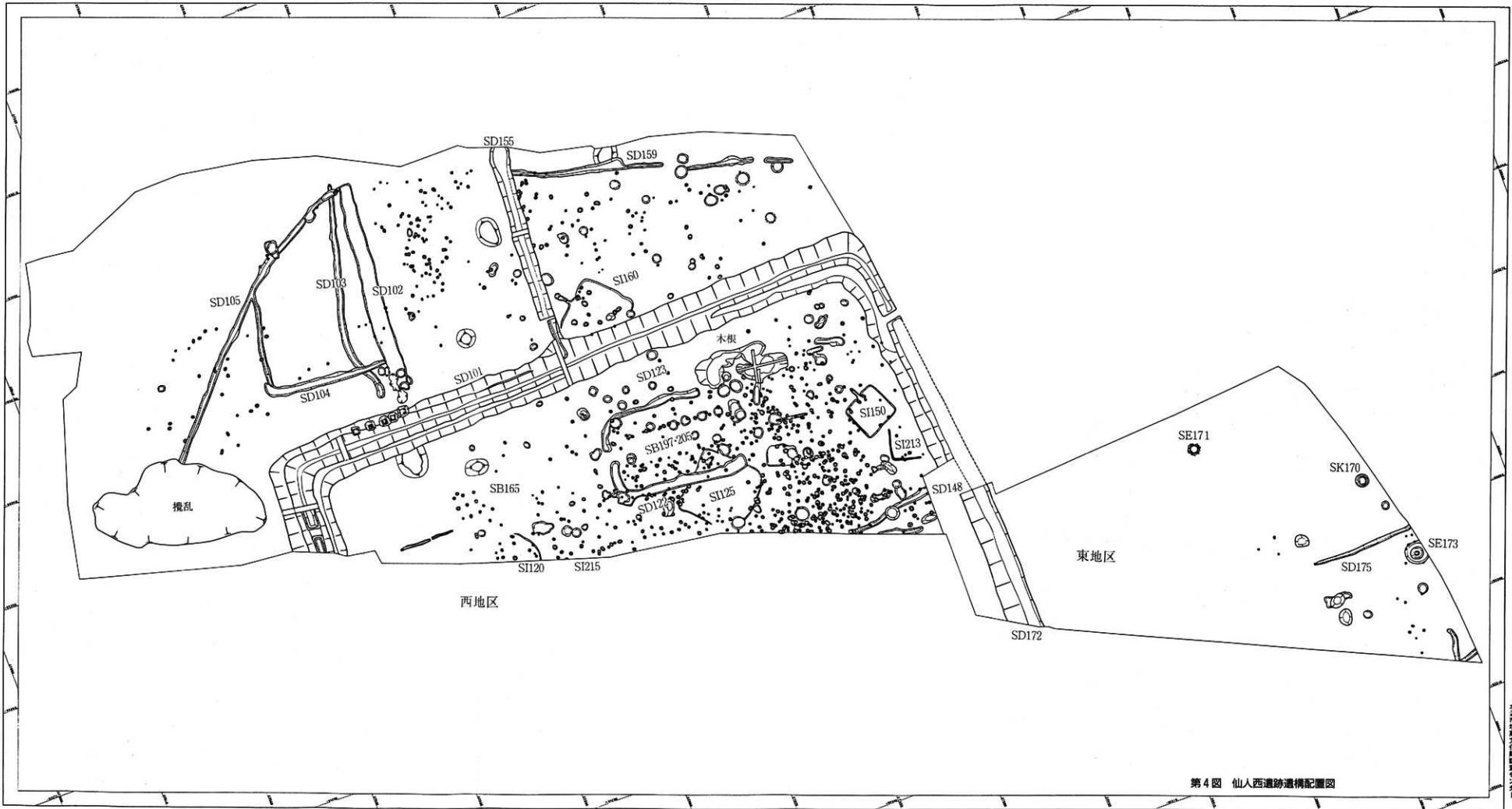
(3) 土壙跡

土壙跡SK170 (第9図)

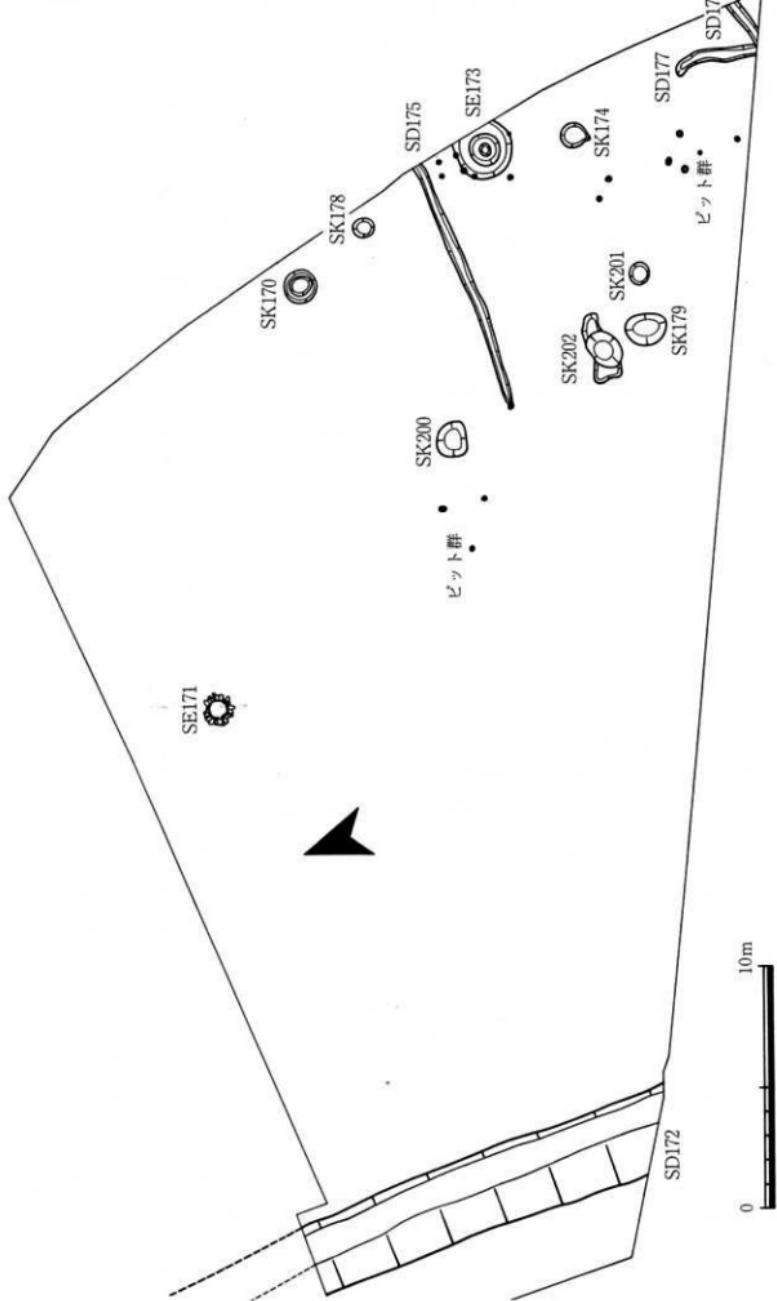
調査区中央の東端にあり、平面は円形で規模は東西1.35m×南北1.35m、深さ0.7mある。壁面は丁寧に掘削され、底部よりほぼ垂直に立ち上がり、上端で外反する。埋土は5層に分かれ、1層が黄褐色ブロック10%、炭化物2%含む黒褐色土、2層が黄褐色土ブロック50%、若干の砾を含む黒褐色土、3層は若干黄褐色土ブロックを含み2層より黒い。4層は黄褐色土ブロック30%含む黒褐色土、5層は3層よりやや明るい黒褐色土である。出土遺物は須恵器壺破片がある。

土壙跡SK174 (第10図)

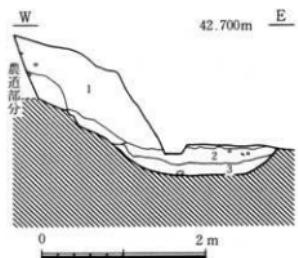
SE173の南約2mにあり、平面は梢円形で規模は東西0.9m×南北1.0m、深さ0.15mある。壁は底部より外傾しながら真っ直ぐ立ち上がる。埋土は単層で、黒褐色土に黄褐色土ブロック50%、若干炭化物ブロックを含む。出土遺物はない。



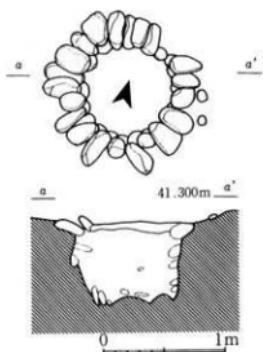
第4図 仙人西遺跡遺構配置図



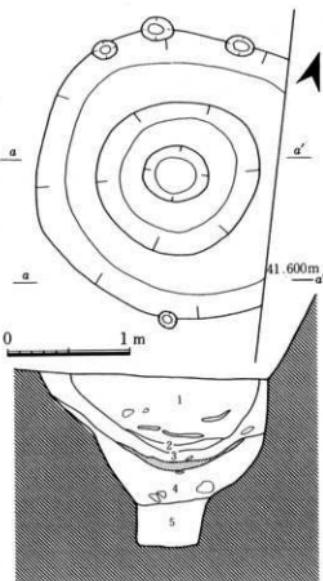
第5図 仙人西遺跡東地区遺構配置図



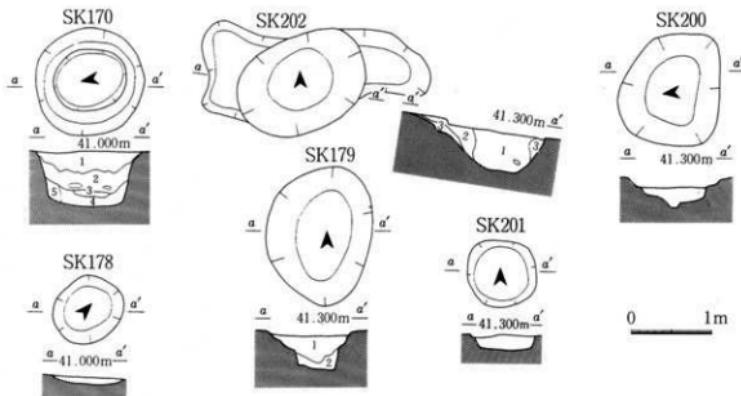
第6図 堀跡SD172北端部東西断面図



第7図 井戸跡SE171



第8図 井戸跡SE173



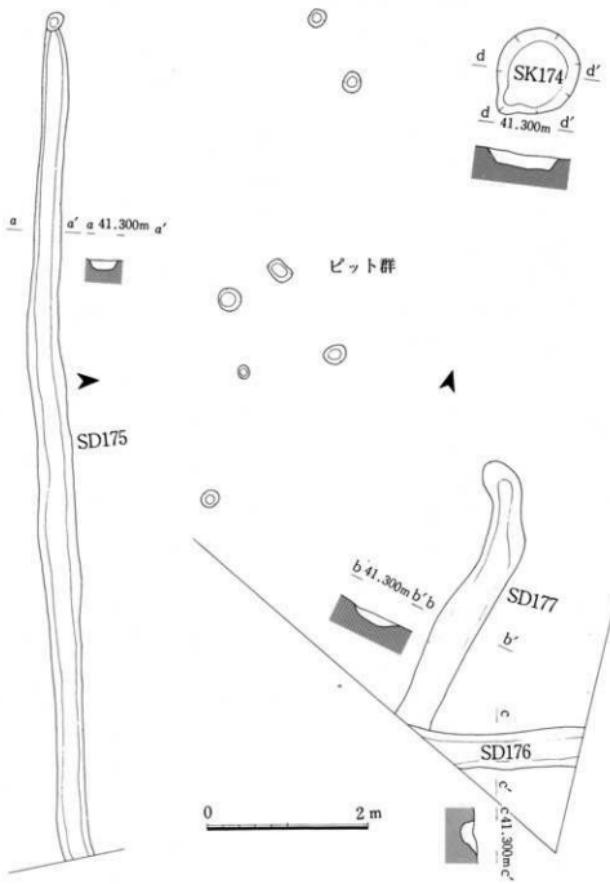
第9図 土壌跡SK170・178・179・200・201・202

土壤跡SK178（第9図）

SK170の南約2mにあり、平面は円形で規模は東西0.8m×南北0.9m、深さ0.1mある。壁は底部より緩やかに内湾して立ち上がる。埋土は単層で、黒色土に黄褐色土ブロック5%含む。出土遺物はない。

土壤跡SK179（第9図）

SK173の西約10mにあり、平面は梢円形で規模は東西1.3m×南北1.7m、深さ0.5mある。壁は凹凸があり、壁は底部より垂直に立ち、中腹部で外側に折れて緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分かれ、1層が若干黄褐色土ブロックと炭化物を含む黒色土、2層が若干黄褐色土ブロック含む暗褐色土である。出土遺物はない。



第10図 土壌跡SK174・溝跡SD175・176・177

土壤跡SK200 (第9図)

S K170の西約6mにあり、平面は不整形で規模は東西1.4m×南北1.3m、深さ0.4mある。壁は壁面の凹凸に沿いながら掘り鉢状に立ち上がる。埋土は単層で、黄褐色土ブロックを5%含む黒褐色土である。出土遺物はない。

土壤跡SK201 (第9図 図版7)

S K179の東約1.5mにあり、平面は円形で規模は直径0.85m、深さ0.2mある。壁は丁寧に掘削され、平坦な底部からほぼ垂直に立ち上がる。埋土は単層で、若干黄褐色土ブロック、焼土ブロック、炭化物を含む黒色土である。出土遺物は縄文土器破片がある。

土壤跡SK202 (第9図)

S K179の北にあり、平面は不整形で規模は東西1.65m×南北1.2m、深さ0.5mある。壁は平坦な底部から内湾しながら立ち上がり、上端で外反する。埋土は3層で、1層が若干黄褐色土ブロック、炭化物含む黒褐色土、2層が黒色土、3層が黄褐色土ブロック層である。出土遺物はない。

(4) 溝跡

溝跡SD175 (第10図 図版7)

東西に延びる溝跡でS K178・200の南1.5mにあり、東側は調査区外に延び、西端をピットに切られる。断面はU字形で、検出部の規模は全長10.3m、幅0.3~0.45m、深さ0.2mあり、西側に向かって次第に浅くなる。壁、底部は丁寧に掘削される。埋土は単層で、黄褐色土ブロックを50%含む黒褐色土である。出土遺物はない。

溝跡SD176 (第10図)

調査区の南東隅から発見された東西に延びる溝跡で、SD177を切る。東西両端ともに調査区外へ延びる。断面はU字形で、検出部の規模は全長2.3m、幅0.4~0.5m、深さ0.2mある。壁、底部とともに丁寧に掘削され、底部は若干窪みがみられるがほぼ平坦である。埋土は単層で、若干黄褐色土ブロック、炭化物を含む黒褐色土である。出土遺物はない。

溝跡SD177 (第10図)

SD176の北側にある南北に延びる溝で、SD176に切られる。南側は調査区外へ延びる。底部にはやや凹凸がみられ、壁は底部より緩やかに内湾しながら立つ。検出部の規模は全長3.8m、幅0.4~0.55m、深さ0.15mある。埋土は単層で、若干黄褐色土ブロック、炭化物を含む黒褐色土である。出土遺物はない。

(5) ピット群 (第10図)

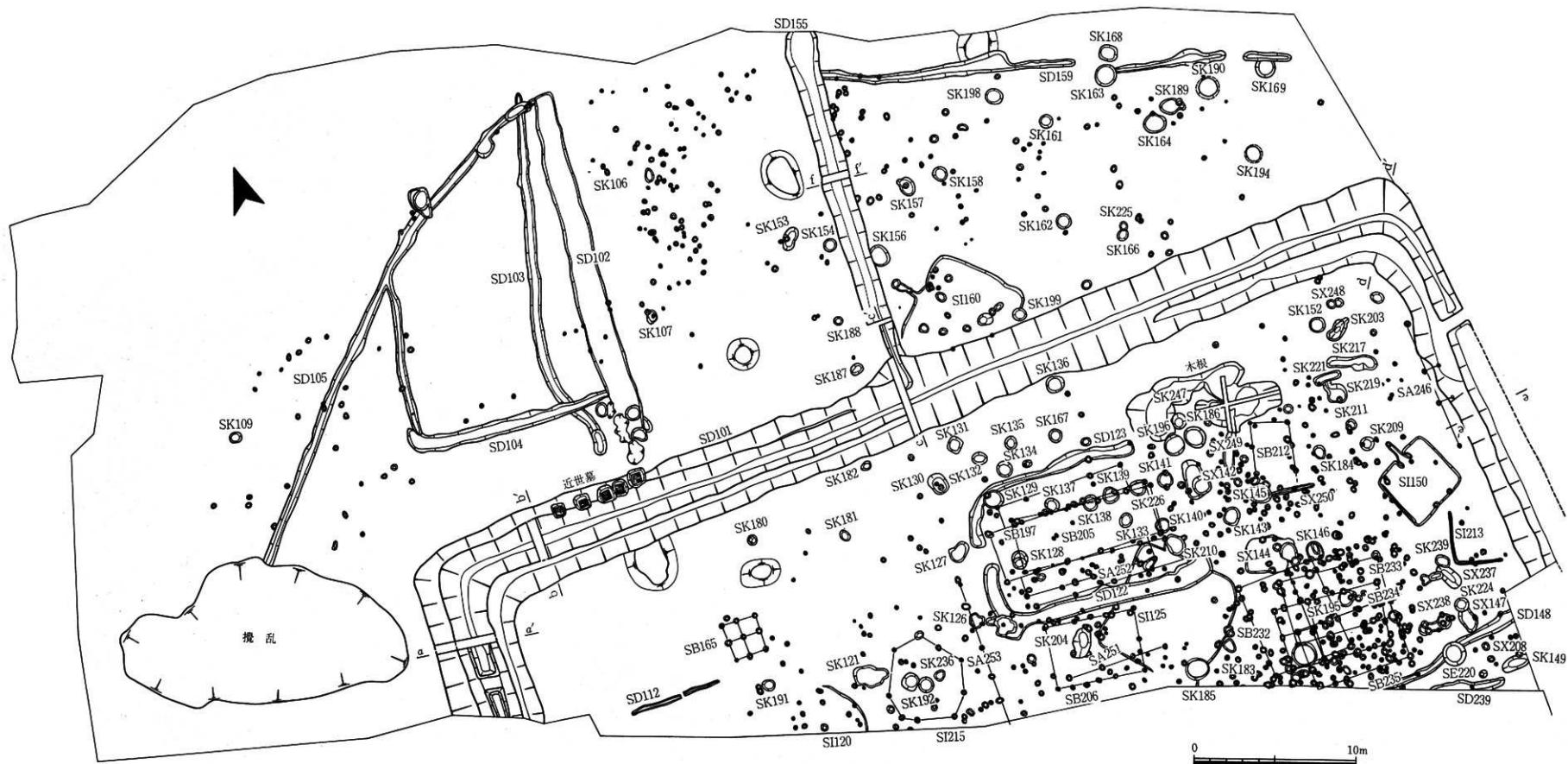
調査区の南東及びSK200の西側から集中して見つかっている。平面はほとんどが円形で規模は直径0.2~0.3m、深さ0.1~0.2mある。埋土は若干黄褐色土ブロックを含む黒褐色土である。柱列や建物跡にはならず、遺物もない。

2、西地区

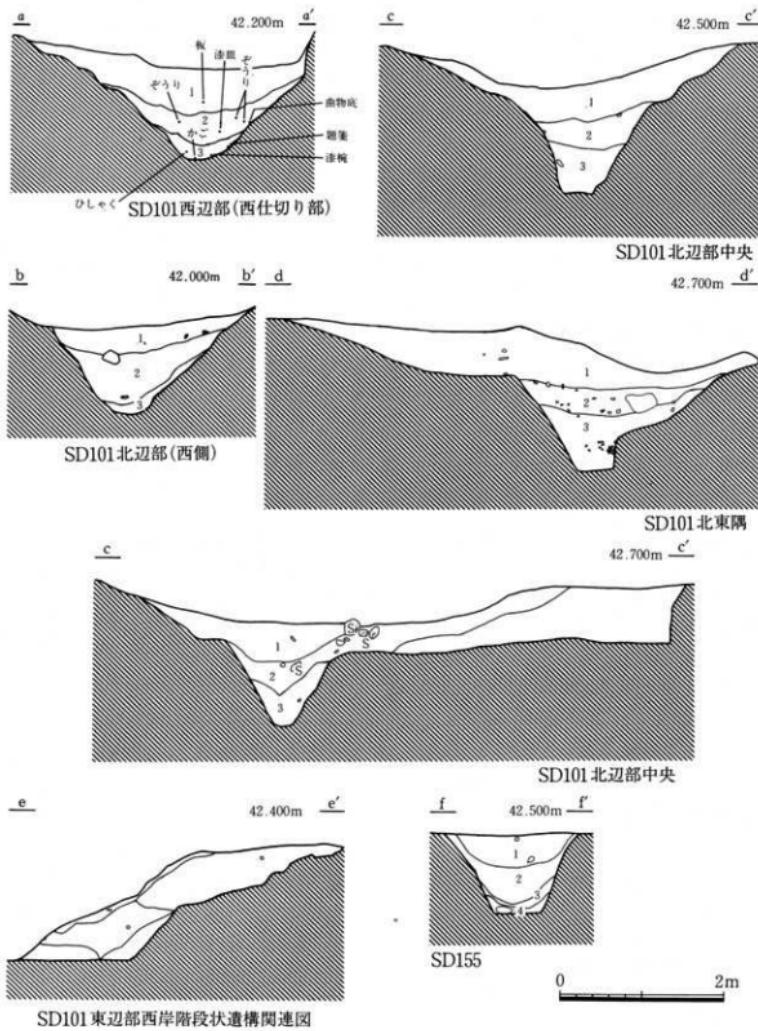
調査区の現状は畠地であるが、西側にはコンクリート会社の施設があった。近年まで堀跡の部分は小水路として水が通っていたとのことである。

発掘調査で発見した遺構には、堀跡2、掘立柱建物跡9、柱列跡4、竪穴住居跡6、井戸跡1、土塙跡70、溝跡10、近世墓5、不明遺構7、土器埋設遺構1、陥し穴状遺構1、ピット多数がある。以下、主な遺構について述べる。

(1) 堀 跡



第11図 仙人西遺跡西地区遺構配置図



第12図 堀跡SD101・155断面集成図

堀跡SD101 (第11・12図 図版2・3・8~15)

調査区の中央を東西にはしり、調査区の東端と北西隅にある擾乱堀跡の東側で南方に向って直角に折れる堀跡で、S I 160を切る。東辺は調査区東地区へ延び、西辺は調査区外南へ延びる。堀跡の断面はV字型の薬研堀または箱薬研状を呈し、東辺の仕切り遺構以南は浅くなり底部の広い箱堀となる。また、北辺は疊層を約1m掘り込んで造られている。堀跡外側の岸は堀底より急傾斜で立ち上がるが、内側の岸は底部より約1m立ち上がったところで屈曲し、幅0.2~0.6mの平坦部を造る。検出部の規模は、堀跡中心部の計測値で北辺長が約62.1m、東辺長が約43m、西辺長が約8.5mで、幅が3.5~5.1m、深さが1.6~1.9mある。堀の走向は、北辺部南岸上端で磁北に対しE $5^{\circ}20' S$ である。また、北辺と直交する地点から東辺は約7m、西辺は約6mの地点に仕切り遺構がある。仕切り遺構の規模は、東辺部が東西1.4m×南北0.8m、深さは北側0.7m、南側0.3m、西辺部が東西1.2m×南北0.8m、深さは北側0.6m、南側0.5mで、東西仕切り遺構ともに南側の堀底が浅くなっている。堀跡埋土は大別して3層に分かれ、1層が小礫20%含む黒褐色土または暗褐色土、2層が炭化物含む黒褐色土で、西辺は一部褐灰色土、北辺は小礫を多く含む。3層は黄灰色土または褐灰色土のグライ層で、北辺の最下層は暗青灰色土である。遺物は主に2・3層から出土しており、土師器、陶磁器、漆器椀、さし銭、筆塔婆、柄杓、曲物、底板、下駄、草履、種子、木製品などがある。

堀跡SD155 (第11・12図 図版2・3・16)

S D101北辺のほぼ中央から北に真っ直ぐ延びて段丘崖を貫く堀で、S I 160を切る。断面は底部の平坦な箱堀形をなす。S D101との掘削時期の先後関係は不明だが、S D155の方が先に埋没している。壁は丁寧に掘削され底部よりやや外反しながら立ち上がる。規模は全長約23m、幅1.6~1.7m、深さ0.7~1.0mある。堀の走向は、東岸上端で磁北に対しN $10^{\circ}50' E$ である。深さは段丘崖へ向うほど深くなる。埋土は4層に分かれ、1層が黒褐色土ブロック20%、黄褐色土ブロック10%、中疊20%含む褐色~暗褐色土、2層が黒褐色土、3層が黄褐色土、4層が中疊50%含む灰黃褐色土である。出土遺物は非ロクロ土師器壺破片がある。

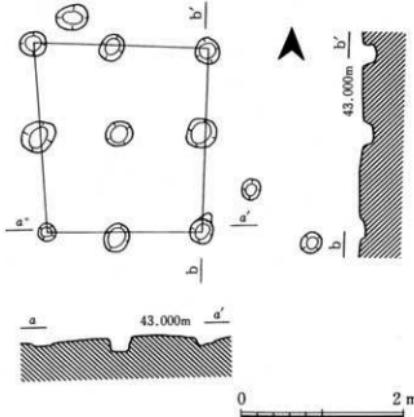
(2) 挖立柱建物跡

掘立柱建物跡SB165(第13図 図版17・

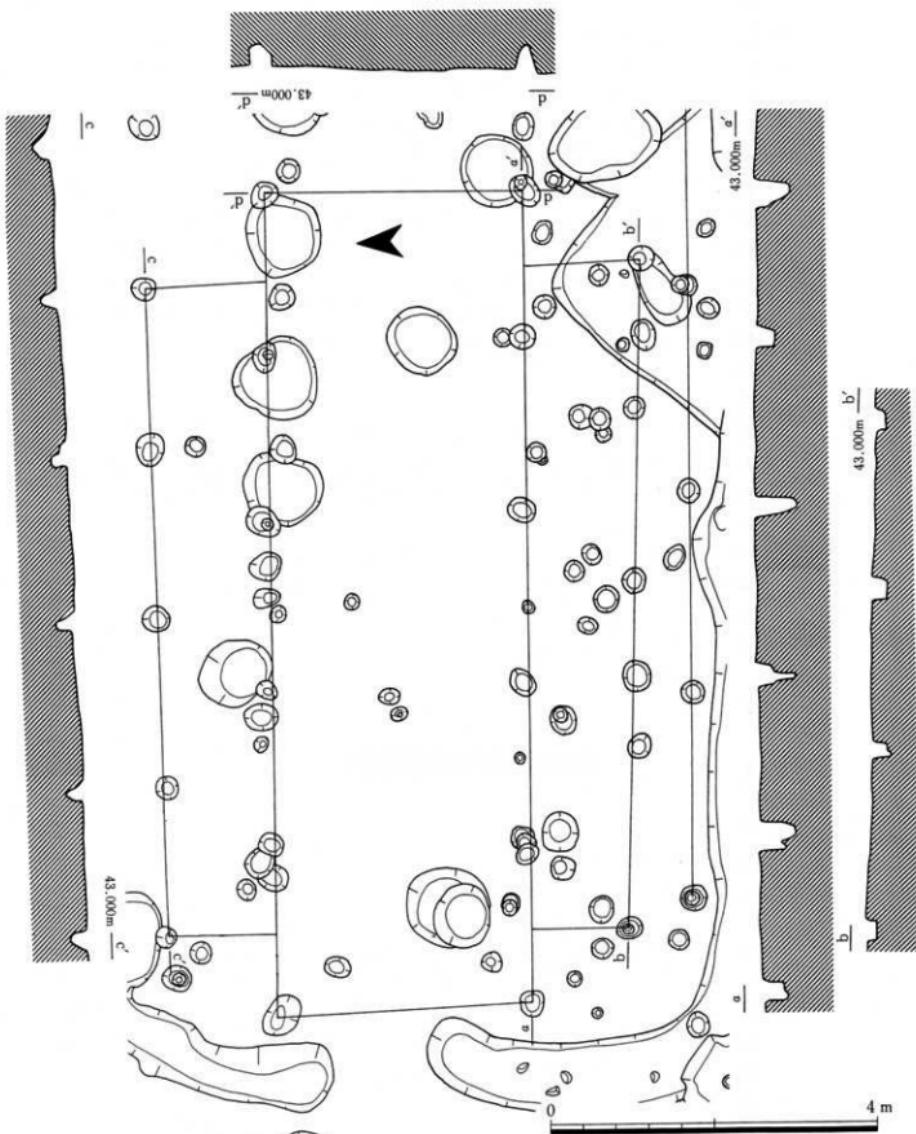
18)

調査区中央の西側にある東西2間(2.01m)×南北2間(2.17m)の総柱の建物跡である。建物方位は磁北に対し梁行が南側でE $7^{\circ}55' S$ 、桁行が東側でN $8^{\circ}30' E$ 傾く。桁行西側の中柱がビットに切られるほかは重複関係は認められない。

柱間寸法は梁行南側柱で東から1.06m、0.95m、桁行東側柱で北から1.00m、1.17mである。柱穴は直径21~32cmの円形で、深さは4~19cmである。柱痕跡は直径10cm前後である。柱穴埋土は黄褐色土ブロック10%含む黒褐色土である。出土遺物は柱穴から縄文後期の貼瘞土器破片、土師器破片がある。



第13図 掘立柱建物跡SB165



第14図 挖立柱建物跡SB197

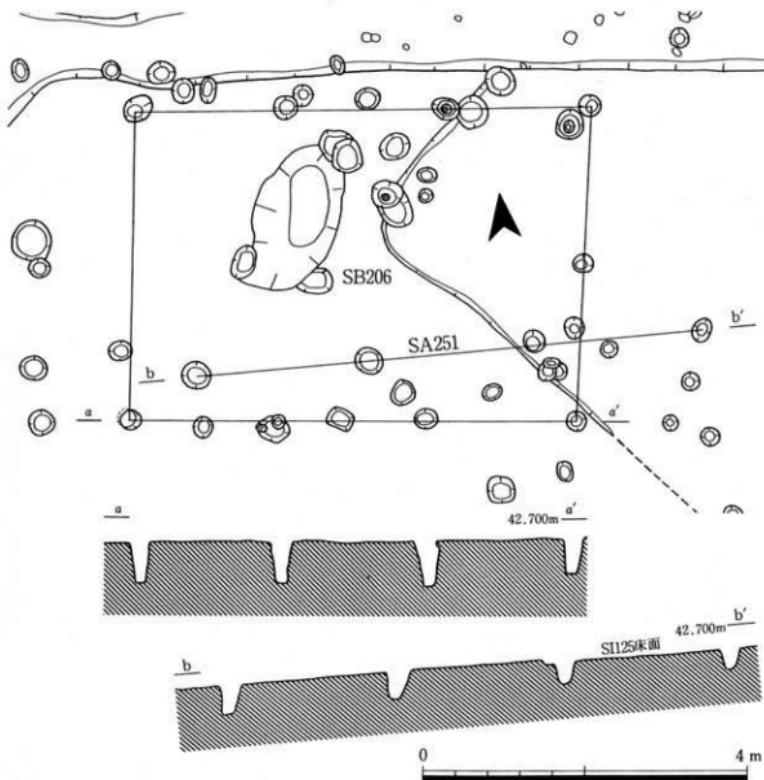
掘立柱建物跡SB197 (第14図 図版2・8・16)

調査区中央の南東にある東西5間(9.90m)×南北1間(3.13m)の建物跡で、SB205、SK139、140、226を切る。身舎の南北に東西4間(南側8.10m、北側7.90m)の土廂が取り付く。身舎の方位は磁北に対し桁行が南側でE 9°45'S、梁行が西側でN 9°00'E傾く。

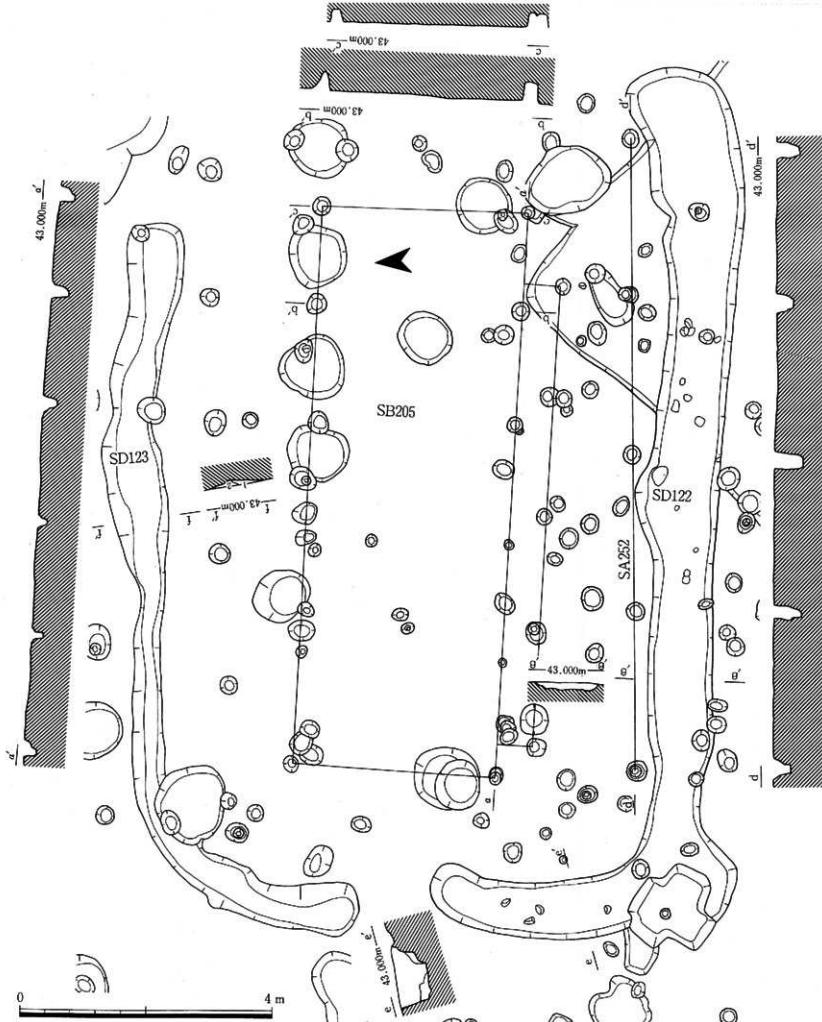
柱間寸法は桁行南側柱で東から1.74m、2.08m、2.15m、1.95m、1.98mである。柱穴は直径23~44cmの円形で、深さは25~62cmだが大半は40cm以上である。柱痕跡は直径10~14cmである。柱穴埋土は黄褐色土ブロック10%、若干炭化物含む黒褐色土である。

身舎から南北側に側柱からの出約1.4m(北側)、1.3m(南側)の土廂の4間の柱列は、身舎の柱位置から半間ずれて配置される。方位は磁北に対し南柱列がE 11°30'S、北柱列がE 8°5'S傾く。

柱間寸法は南側柱列で東から、1.82m、2.15m、1.91m、2.25m、北側柱列で東から1.94m、2.04m、2.11m、1.85mである。柱穴は直径26~40cmの円形で、深さは20~56cmだが、大半は20cm前後である。柱痕跡は10~13cmである。柱穴埋土は黄褐色ブロック10%含む黒褐色土である。出土遺物は柱穴から非クロロ土師器壺破片、須恵器壺破片がある。



第15図 掘立柱建物跡SB206・柱列跡SA251



第16図 据立柱建物跡SB205・柱
列跡SA252・溝跡SD122-123

掘立柱建物跡SB205 (第16図 図版2・8・16)

S B197に重複して発見された東西5間(8.82m)×南北1間(3.30m)の建物跡で、SB205が古い。建物方位は磁北に対し桁行が南側でE13°45'S、梁行が東側でN13°50'E傾く。

柱間寸法は桁行南側柱で東から1.49m、1.80m、1.87m、1.80m、1.86mである。柱穴は直径12~35cmの円形で、深さは8~57cmだが大半は20cm前後である。柱痕跡は直径9~14cmである。柱穴埋土は黄褐色土ブロック10%、若干炭化物含む黒褐色土である。身舎の南側に側柱からの出0.57mの土瘤が取り付く。柱間は4間(7.3m)で、身舎の柱位置から半間ずれる配置である。出土遺物は柱穴から非クロロ土器壺破片がある。

掘立柱建物跡SB206 (第15図 図版2・17)

S B197、205の南にある東西3間(5.41m)×南北1間(3.80m)の建物跡で、SI125を切る。建物方位は磁北に対し桁行が南側でE16°05'S、梁行が東側でN18°10'E傾く。

柱間寸法は桁行南側柱で東から1.85m、1.80m、1.76mである。柱穴は直径26~36cmの円形で、深さは39~58cmである。柱痕跡は直径10~15cmである。柱穴埋土は黄褐色土ブロック10%、若干炭化物含む黒褐色土である。出土遺物はない。

掘立柱建物跡SB212 (第17図 図版2)

S B197から約7m東にある東西1間(2.33m)×南北2間(2.90m)以上の建物跡で、SK145、SX250を切る。建物方位は磁北に対し梁行が北側でE27°15'S、桁行が東側でN21°50'E傾く。

柱間寸法は桁行東側柱で北から1.34m、1.55mである。柱穴は直径18~25cmの円形で、深さは12~41cmである。柱痕跡は直径5~7cmである。柱穴埋土は黄褐色土ブロック10%、若干炭化物含む暗褐色土である。出土遺物はない。

掘立柱建物跡SB232 (第18図 図版2・19)

S B212の南に連なる東西1間(3.14m)

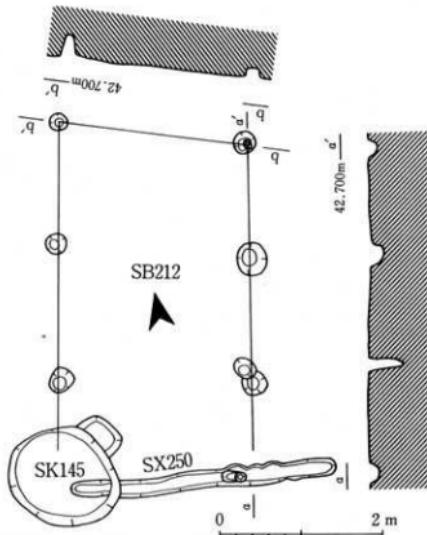
×南北3間(5.93m)、東に1間(1.7m)

の廂の付く建物跡で、SB234、SK146を切る。身舎の方位は磁北に対し梁行が南側でE6°30'S、桁行が西側でN3°20'E傾く。

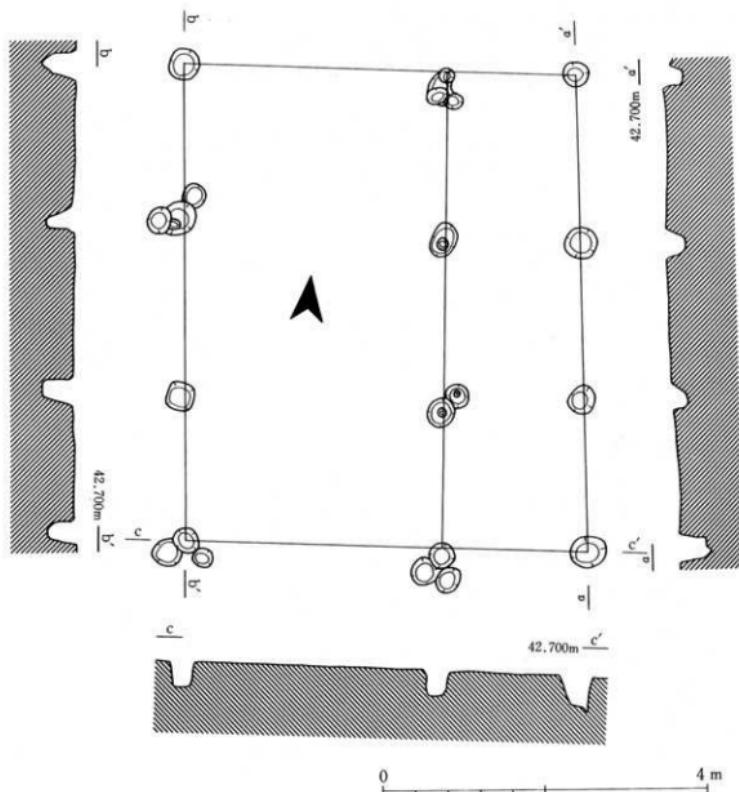
柱間寸法は桁行西側柱で北から1.99m、2.06m、1.88mである。柱穴は直径27~38cmの円形で、深さは31~46cmである。柱痕跡は直径10~12cmである。柱穴埋土は黄褐色土ブロック20%、若干炭化物含む黒褐色土である。

廂部は南北3間(5.84m)あり、磁北に対しN3°30'E傾く。

柱間寸法は北から2.06m、1.92m、1.86mである。柱穴は直径27~43cmの円形で、深さは24~43cmである。柱痕跡は直径11cmである。柱穴埋土は黄褐色土ブロック20~30%、若干炭化物含む黒褐色土~暗褐色土



第17図 掘立柱建物跡SB212



第18図 捜立柱建物跡SB232

である。出土遺物は柱穴から土師器壺破片がある。

掘立柱建物跡SB233（第19図 図版2・18・19）

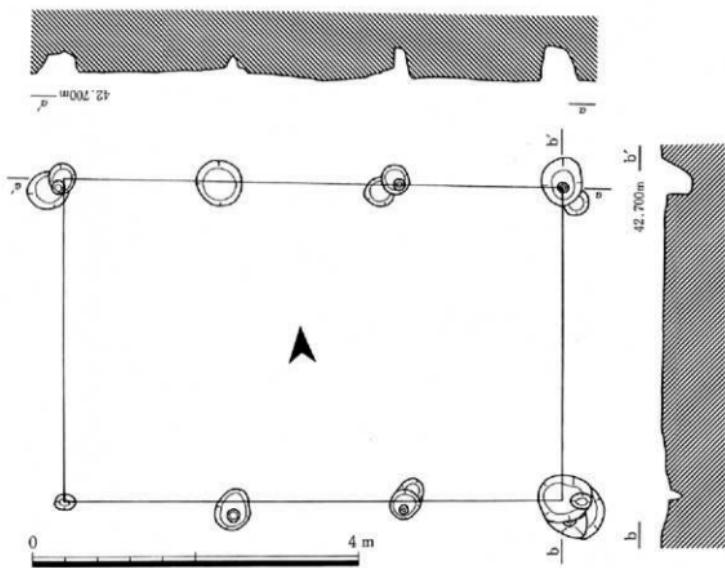
S B232の東に重なる東西3間（6.04m）×南北1間（3.98m）の建物跡で、S B232、現代井戸跡に切られる。建物方位は磁北に対し桁行が北側でE $10^{\circ} 30'$ S、梁行が東側でN $8^{\circ} 25'E$ 傾く。

柱間寸法は桁行北側柱で東から2.0m、2.11m、1.93mである。柱穴は直径35~52cmの円形で、深さは21~44cmだが大半は30cm前後である。柱痕跡は直径10~23cmである。柱穴埋土は黄褐色土ブロック10%、若干炭化物含む黒褐色土である。出土遺物は柱穴から非ロクロ土師器壺破片がある。

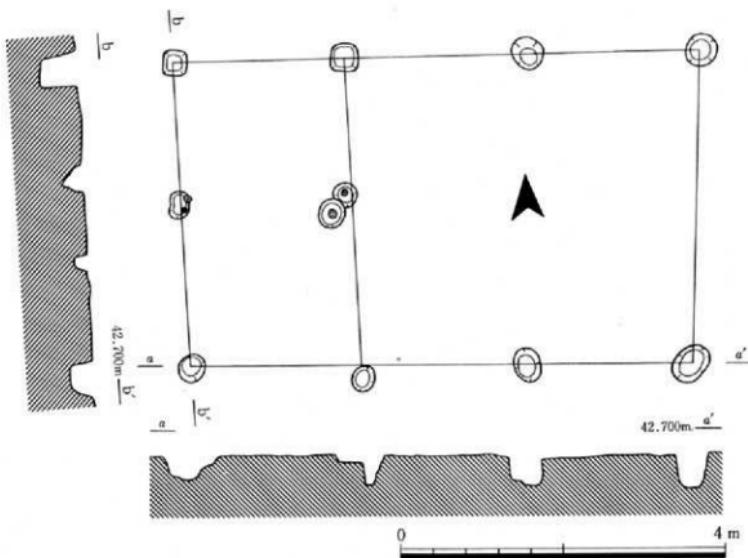
掘立柱建物跡SB234（第20図 図版2・18）

S B233のやや南に重なる東西3間（6.45m）×南北2間（3.80m）の建物跡で、S B232に切られる。梁行東側柱は1間で、南北桁行西側第2柱を結ぶ梁行の間に中柱がある。建物方位は磁北に対し桁行が北側でE $11^{\circ} 20'S$ 、梁行が西側でN $15^{\circ} 05'E$ 傾く。

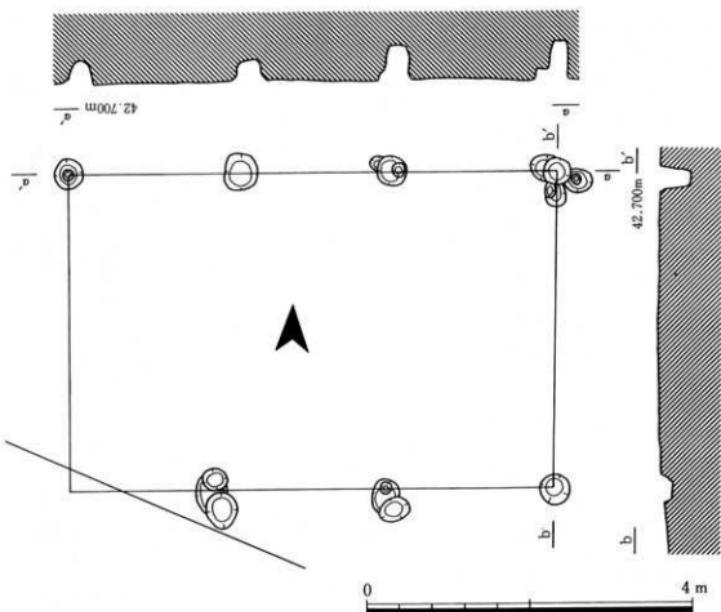
柱間寸法は桁行北側柱で東から2.10m、2.26m、2.09m、梁行西側柱で北から1.71m、2.00mであ



第19図 挖立柱建物跡SB233



第20図 挖立柱建物跡SB234



第21図 掘立柱建物跡SB235

る。柱穴は南北桁行が直径41~45cmの円形で、深さは28~42cmある。西側第1柱と第2柱の梁行中柱は直径30cmの円形で、深さは12cmである。柱痕跡は確認されていない。柱穴埋土は黄褐色土ブロック20%、若干炭化物含む黒褐色土である。出土遺物は柱穴から土師器壺破片がある。

掘立柱建物跡SB235（第21図 図版2）

S B234の南に重なる東西3間（5.89m）×南北1間（3.80m）の建物跡である。建物方位は磁北に対し桁行が北側でE 6° 00' S、梁行が東側でN 7° 45' E傾く。

柱間寸法は桁行北側柱で東から1.96m、1.86m、2.07mである。柱穴は直径31~42cmの円形で、深さは10~47cmだが大半は30cm前後である。柱痕跡は直径10~12cmである。柱穴埋土は黄褐色土ブロック30%含む黒褐色土である。出土遺物はない。

（3）柱列跡

柱列跡SA246（第11・22図 図版2・3・13）

調査区東端中央付近から、堀跡S D101東辺部の堀西岸上端に沿う形で発見された南北方向（8.08m）の柱列跡である。方位は磁北に対しN 4° 20' E傾く。

柱間寸法は、北から3.09m、2.12m、2.87mと中央の間がもっとも狭い。中央間からは堀岸に向かって張り出るように、東へ1間（0.90m）の柱穴が南北（2.12m）に対し掘削されている。張り出し部分の堀西岸は、幅約2mの4段の緩い階段状となって堀岸中位に続く。柱列柱穴の規模は、直径23~39cmの円形で、深さは8~31cmである。柱痕跡は直径9cmである。柱穴埋土は黄褐色土ブロック20%を含む黒褐色土である。出土遺物は土師器壺破片がある。

柱列跡SA251 (第15)

図 図版2・17)

S B 206の南側に重なる東西3間(6.22m)の柱列跡である。方位は磁北に対しE 9° 20' S傾く。柱間寸法は東から2.05m、2.13m、2.04mである。柱穴は直径27~32cmの円形で、深さは29~39cmである。柱痕跡は確認されていない。柱穴埋土は黄褐色土ブロック10~30%、若干炭化物含む黒褐色土である。出土遺物はない。

柱列跡SA252 (第16)

図 図版2・17)

S B 197の南側にある東西4間(9.86m)の柱列跡である。方位は磁北に対しE 9° 50' S傾く。柱間寸法は東から2.40m、2.52m、2.47m、2.47mである。柱穴は直径27~32cmの円形で、深さは27~51cmである。柱痕跡は直径10~14cmである。柱穴埋土は黄褐色土

ブロック30%、若干炭化物含む黒褐色土である。出土遺物はない。

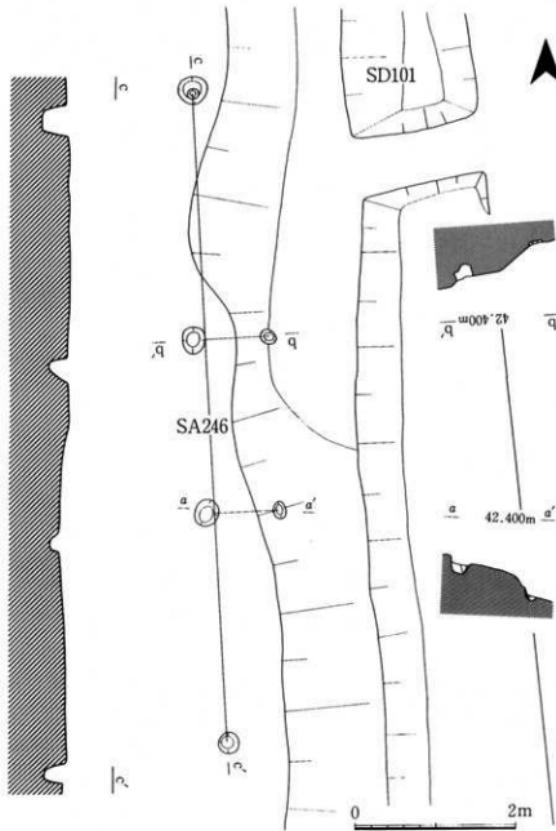
柱列跡SA253 (第23図 図版20)

S A 251の西端柱穴から西4.4mにある南北5間(9m以上)以上の南北方向の柱列跡である。方位はS A 251に直交する。柱間寸法は、北から1.7m、2.7m、1.85m、1.55mで、寸法にバラつきが認められる。柱穴は直径25~40cmの円形で、深さは20~30cmである。柱痕跡は確認されない。柱穴埋土は黄褐色土ブロック10%、礫20~30%、若干炭化物含む黒褐色土である。出土遺物はない。

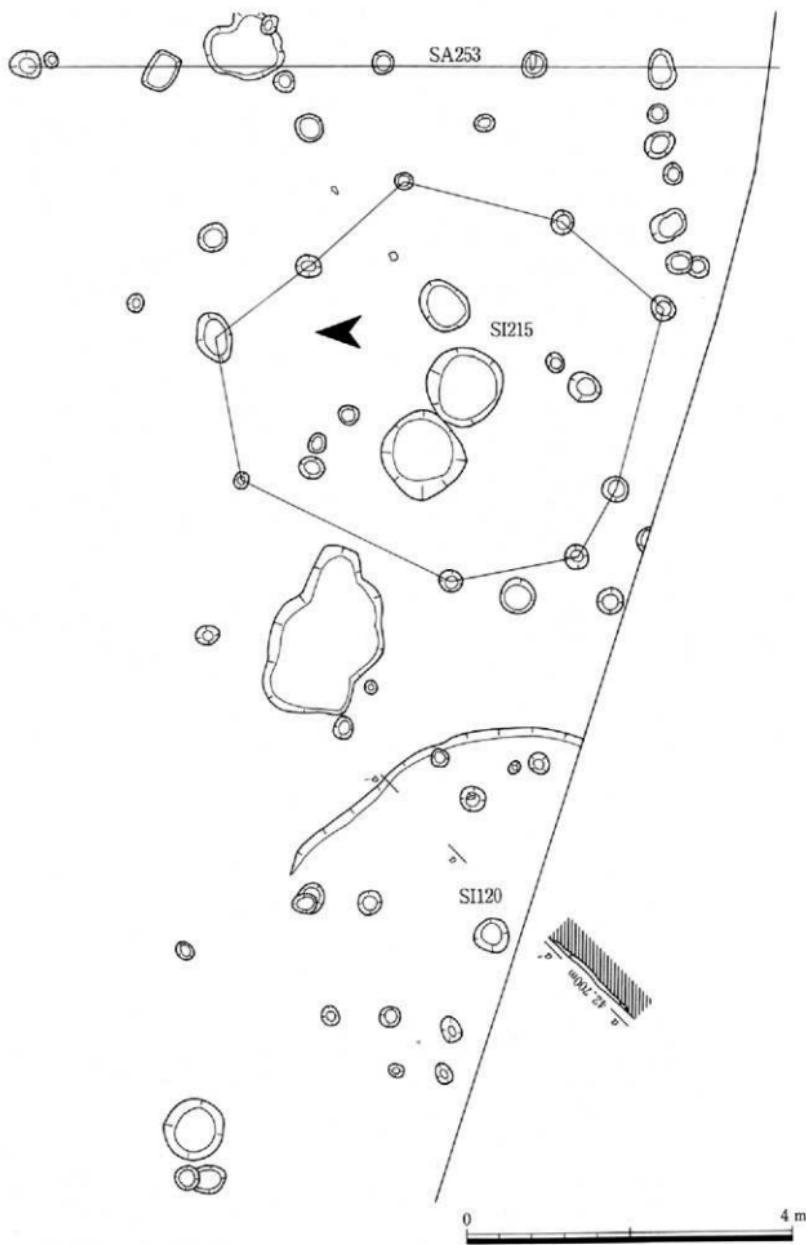
(4) 壺穴住居跡

堅穴住居跡SI120 (第23図 図版20)

調査区中央の南端から発見された堅穴住居跡で、住居跡の南側は調査区外に延びる。平面は円形で、規模は南壁より遺構の北端まで3.4mある。西側は削平されておりプランを確認することができなかつた。壁高は約4cmで、壁に垂直に立ち上がる。他の遺構との重複関係は認められない。炉跡や焼土痕



第22図 柱列跡SA246



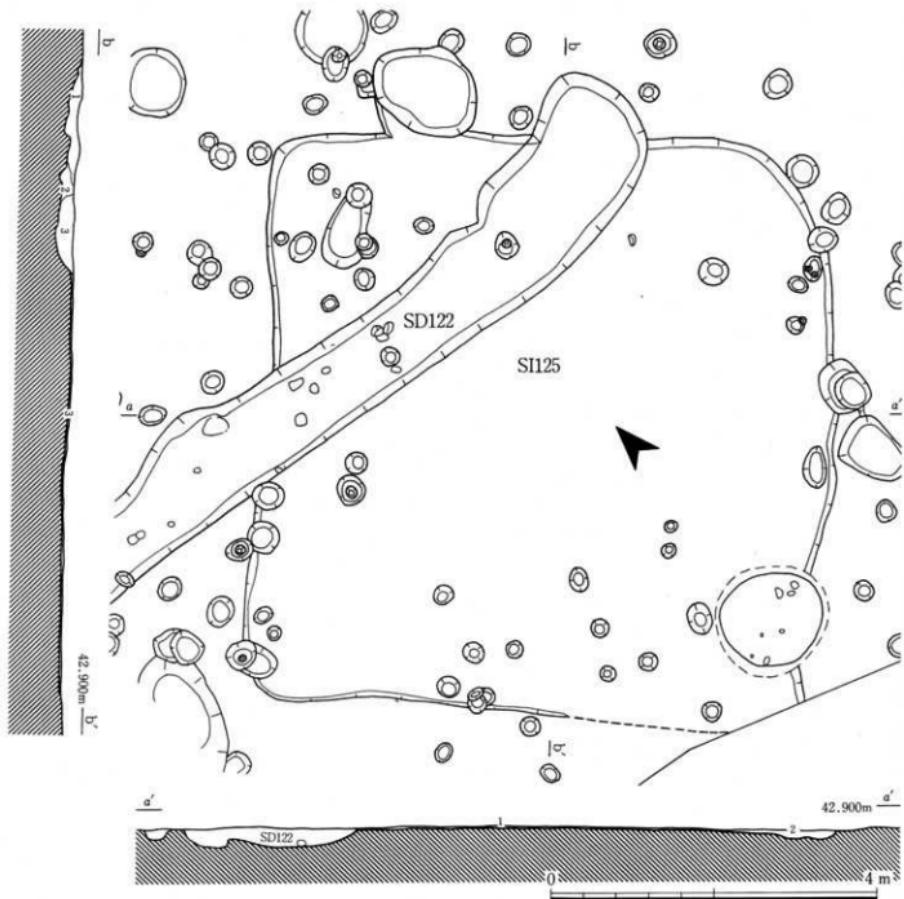
第23図 柱列跡SA253・竪穴住居跡SI120-215

跡は確認されていない。

床面は平坦で小砾が若干露呈する。埋土は単層で、黄褐色土ブロック20%、若干小砾含む黒色土である。床面上からは、8個の小柱穴を検出した。小柱穴は平面形が径19~39cmの円形で、深さは10cm前後、20cm前後に分かれ、もっとも深いもので32cmである。埋土は黒色土である。出土遺物は縄文土器片がある。

竪穴住居跡SI125 (第24図 図版2・17・20)

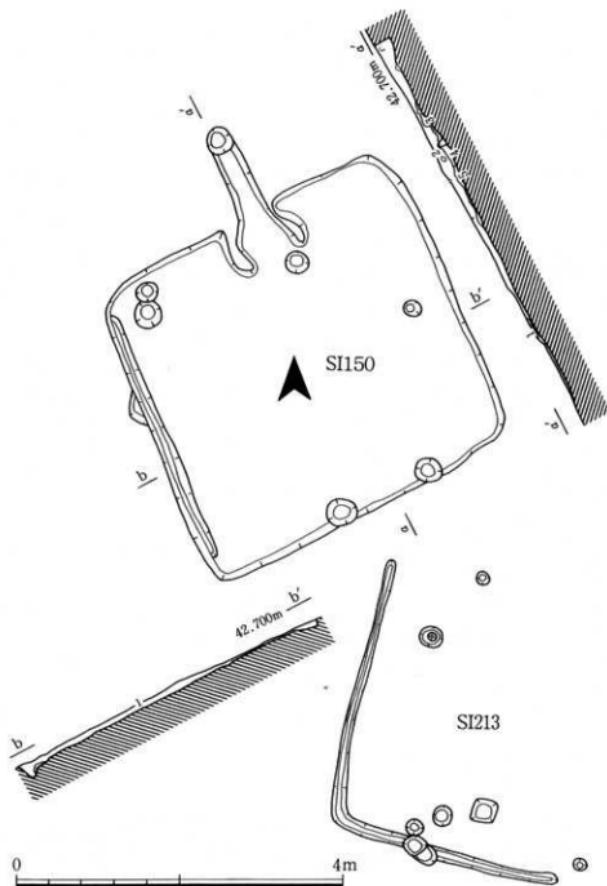
S B197の南から発見された竪穴住居跡である。平面は隅丸方形で規模は北西—南東6.7m×北東—南西7.0mある。磁北に対し北東壁でN38°40'W傾く。壁高は約11cmで四壁ともほぼ垂直に立ち上がる。SD122、SB206、SB207、SA251に切られる。



第24図 竪穴住居跡SI125

カマド、煙道は北西壁にあるが、SD122に破壊されており不明である。煙出部は残存する。煙出部は直径30cmの平面円形で、深さ5.0cmあり、埋土に焼土、炭化物を含む。

床面は平坦で、東側と北東側が貼り床される。北東側は焼土、炭化物、灰などの混合土で貼り床される。カマド位置の南東付近の2基貯蔵穴がある。いずれも平面円形で、貯蔵穴1は東西0.5m×南北0.5m、深さ0.3m、貯蔵穴2は東西0.4m×南北0.4m、深さ0.3mある。埋土はいずれも若干黄褐色土ブロック、焼土、炭化物を含む黒褐色土で、貯蔵穴1から完形の非クロロ土師器杯が出土している。住居の埋土は3層に分かれ、1層が黄褐色土粒20%含む暗褐色土、2層が若干黄褐色土ブロック含む黒褐色土、3層が黄褐色土ブロック20%含む黒褐色土である。床面上からは、26個の小柱穴を確認している。小柱穴は平面形が径15~50cmの円形で、深さは10cm前後、20cm前後、30cm前後、40cm前後に分かれる。6個の柱穴内に径10cm前後の柱痕跡がみられる。小柱穴埋土は黒褐色土である。出土



第25図 積穴住居跡SI150-213

遺物は非クロロ土器器・高杯・鉢・甕、須恵器破片、朱彩土器破片がある。

豎穴住居跡SI150 (第25・26図 図版
2・21)

調査区の東端、S A246の南西から発見された豎穴住居跡である。平面は隅丸方形で規模は東西4.1m×南北3.9mある。磁北に対し西壁でN14°10'W傾く。壁高は約13cmで垂直に立ち上がるが南壁は攪乱、削平される。住居は西辺と重複するピットを切る。

カマドは、北壁中央に付設されている。袖部は地山を削り出して基部とし、袖材として土器片、礫の剥片をたたき込んでいる。東西袖部ともに残存最大長65cm、最大幅20cmある。カマド燃焼部と煙道の境には約2cmの段差がみられ、境から長さ1.1m、

幅0.3m、深さ13cmの断面U字形の煙道部を経て、煙出部に至る。煙出部は直径20cmの平面円形で、深さ13.0cmある。燃焼部火床は火熱により赤褐色を呈し堅くしまる。埋土上部にはカマド天井部の土が崩壊して散乱し、下部は焼土、炭化物を多量に含む。

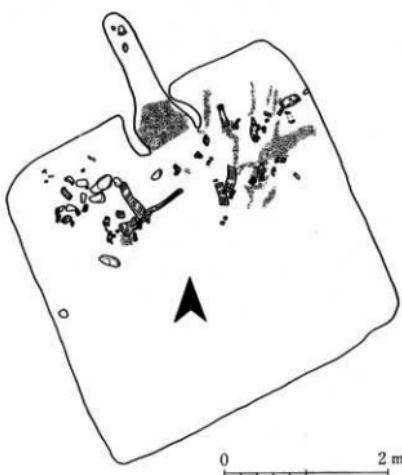
床面は平坦で、黒褐色土を叩きしめた貼り床である。床面上からは焼土、炭化材が検出されており、焼失住居と考えられる(第26図)。南側は削平のため散乱した炭化物しか検出されなかつた。西壁際には幅15cm、深さ15cmの溝がある。住居の埋土は5層に分かれ、1層が黄褐色土粒30%含む暗褐色土、2層が黄褐色土ブロック20%、炭化物10%、若干焼土ブロック含む黒褐色土、3層が黄褐色土ブロック50%、炭化物10%含む黒褐色土、4層が明赤褐色土30%、炭化物10%含む暗褐色土、5層が暗褐色土20%を含む明赤褐色土である。床面上からは、6個の小柱穴を検出した。小柱穴は平面形が径23~35cmの円形で、深さは10cm前後、20cm前後、30cm前後に分かれる。埋土は若干炭化物を含む黒褐色土である。ロクロ土器器壺破片、非ロクロ土器器・甕破片、須恵器杯破片がある。

豎穴住居跡SI160 (第27図 図版2・22)

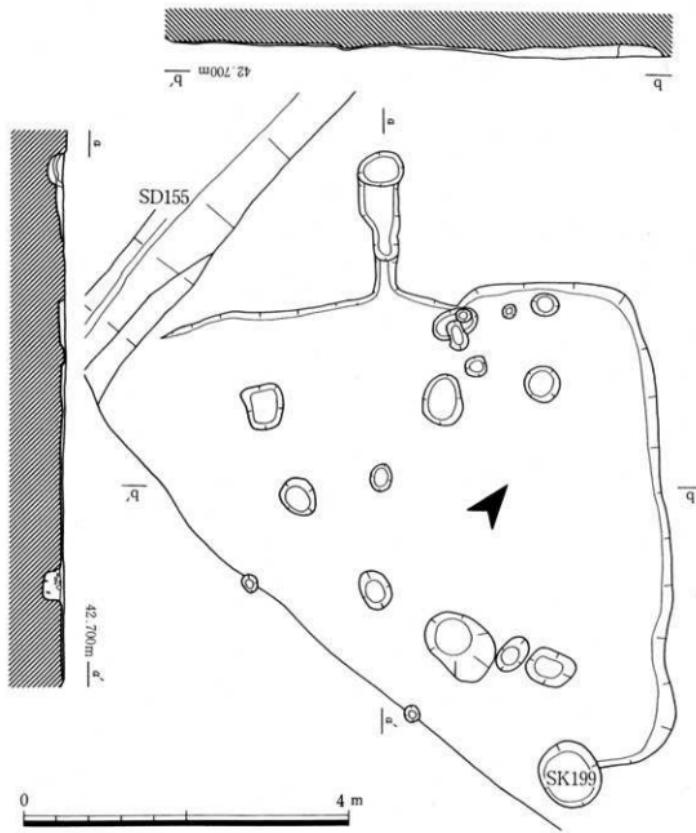
S D101とS D155の交差する地点の北東から発見された豎穴住居跡である。平面は隅丸方形で規模は北西-南東6.6mあり、住居跡の南側約1/3はS D101・155によって破壊される。磁北に対し北東壁でN31°30'W傾く。壁高は約12cmで緩やかに立ち上がるが、全体的に削平が著しい。S D101・155の他にSK199にも切られる。

カマドは、北西壁中央に付設されている。袖部は地山を削り出して基部とするが、規模は不明である。カマド燃焼部と煙道の境は明確に確認できないが、北西壁際より長さ約1.2m、幅0.4m、深さ8.0cmの断面U字形の煙道部を経て、煙出部に至る。煙出部は直径約40cmの平面円形で、深さ24.0cmある。燃焼部火床は若干火熱により赤褐色を呈している。

床面は平坦で、北東側は黒褐色土を叩きしめた貼り床である。住居の埋土は単層で、黄褐色土ブロック50%以上含む黒褐色土である。住居跡中央の若干北に貯蔵穴がある。規模は東西0.6m×南北0.5m、長さ0.2mあり、土器器甕が出土している。埋土は若干焼土、炭化物含む黒褐色土である。床



第26図 豊穴住居跡SI150焼失面検出状況



第27図 窪穴住居跡SI160

面上からは、16個の小柱穴を検出した。小柱穴の平面形は2～3の隅丸方形、不整形を除くと、径19～70cmの円形で、深さは10cm前後、20cm前後、30cm前後、40cm前後に分かれる。埋土は黄褐色土ブロック10%含む黒褐色土で、小砾を20%含むものが若干ある。出土遺物は、非ロクロ土師器杯・高杯・甕がある。

窪穴住居跡SI1213（第25図 図版2・23）

S I 150の南東から発見された窪穴住居跡である。住居跡全体の削平が著しく、北側は削平され、東側はSD101に破壊されているため規模は不明である。平面は隅丸方形で、磁北に対し西壁でN22°15' E傾く。南壁は2基のピットに破壊される。

カマドは確認されず、規模は不明であるが、住居跡北東隅に焼土と灰、炭化物などがみられることからカマド燃焼部と考えられる。

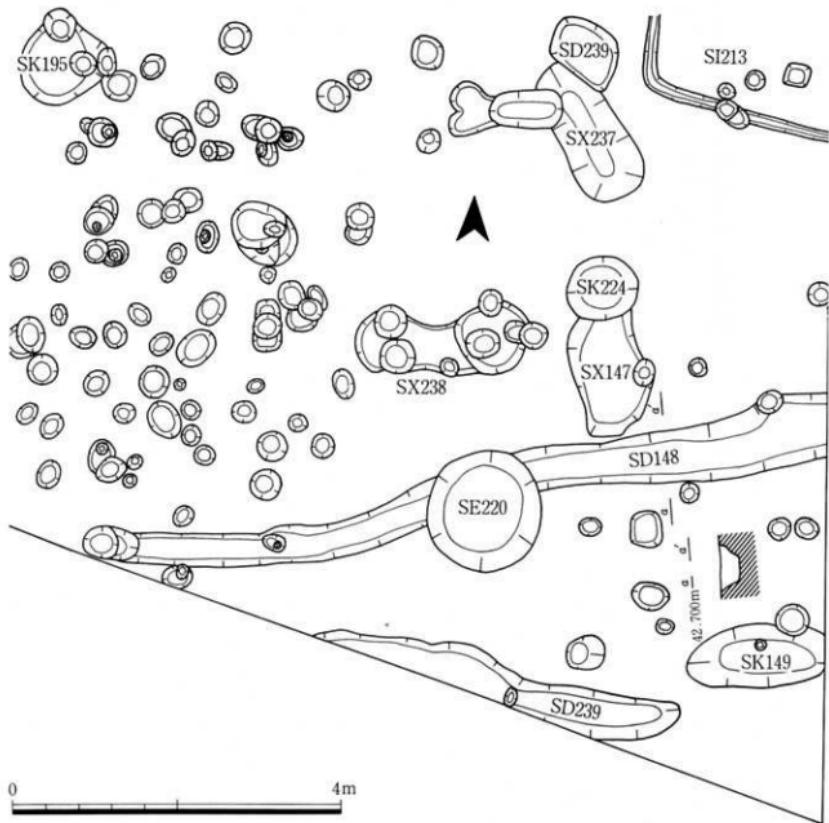
床面は平坦だが貼り床は認められない。西壁際と南壁際には幅10.0cm前後、深さ7.0cmの溝が巡る。

住居の埋土は単層で、若干黄褐色土粒含む暗褐色土である。床面上からは、6個の小柱穴を検出した。小柱穴は平面形が径17~33cmの円形で、深さは10cm前後、20cm前後、40cm前後に分かれる。深さ20cm前後の柱穴内の1つに径12cmの柱痕跡がみられる。埋土は黒褐色土である。出土遺物はロクロ土師器壺破片、須恵器杯破片がある。

竪穴住居跡SI215 (第23図 図版23・24)

S I 120の東側から発見された竪穴住居跡で、平面プランは確認できず、炉跡、ピット配置の状況から住居跡と判断した。平面は南北に長い楕円形と考えられ、住居跡南側の一部は調査区外に延びるものと考えられる。規模は南壁よりP 1まで5.9m、P 3からP 6まで4.9mある。

住居跡中央付近に炉跡がある。東西1.1m×南北1.0m、深さ0.2mの楕円形で、北壁には土器を埋め込み、中央付近には角礫が埋め込まれる。床面はやや平坦で小礫が露呈する。埋土は若干赤みがかる暗褐色土を呈す。



第28図 井戸跡SE220・溝跡SD148-239

住居跡床面は平坦で小礫が若干露呈する。小柱穴は10個検出している。これらは、ほとんどが炉跡を中心に円形に配される。小柱穴の平面形は径22~37cmの円形で、深さはほとんどが20cm前後で、2個が30cm前後ある。埋土は黒色土である。出土遺物はない。

(5) 井戸跡

井戸跡SE220 (第28図)

調査区南東隅から発見された井戸跡で、SD148を切る。平面は円形で直径1.3mあり、崩落の危険があったことから下層は未調査である。壁は垂直に立ち上がる。埋土は若干黄褐色土ブロック含む黒褐色土である。外縁には幅10cmの炭化物層がめぐる。出土遺物は石錐、煙管である。

(6) 土壙跡

土壙跡SK106 (第29図)

調査区中央北端、SD102の東側にあり、平面は円形で規模は東西0.6m×南北0.8m、深さ0.08mある。床面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。北寄りに焼土がまとまっている。埋土は単層で、若干黄褐色土ブロックと炭化物を含む黒褐色土である。出土遺物は土師器破片がある。

土壙跡SK107 (第29図)

SK106の南約8.0mにあり、平面は円形で規模は東西0.6m×南北0.7m、深さ0.1mある。床面は平坦で、壁は丁寧に掘削される。埋土は単層で、若干黄褐色土ブロックと炭化物を含む黒褐色土である。出土遺物は土師器壺破片がある。

土壙跡SK109 (第29図)

調査区西端にあり、平面は隅丸長方形で、規模は東西0.7m×南北0.6m、深さ0.08mある。床面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は単層で、若干黄褐色土ブロックと炭化物を含む黒褐色土である。

土壙跡SK121 (第29図 図版24・25)

SI215の西にあり、平面は不整形で規模は東西2.1m×南北1.4m、深さ0.2mある。床面は凹凸がみられ、若干小礫がみえる。壁は、北側は緩やかに立ち上がり、南側は垂直に立ち上がる。埋土は単層で、黄褐色土ブロック10%、若干炭化物を含む黒褐色土である。出土遺物は朱彩の弥生土器破片などがある。

土壙跡SK126 (第29図)

SI215の北東約2.0mにあり、平面は不整形で規模は東西0.9m×南北0.9m、深さ0.2mある。床面は凹凸がみられ、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は単層で、黄褐色土ブロック10%含む暗褐色土である。出土遺物はない。

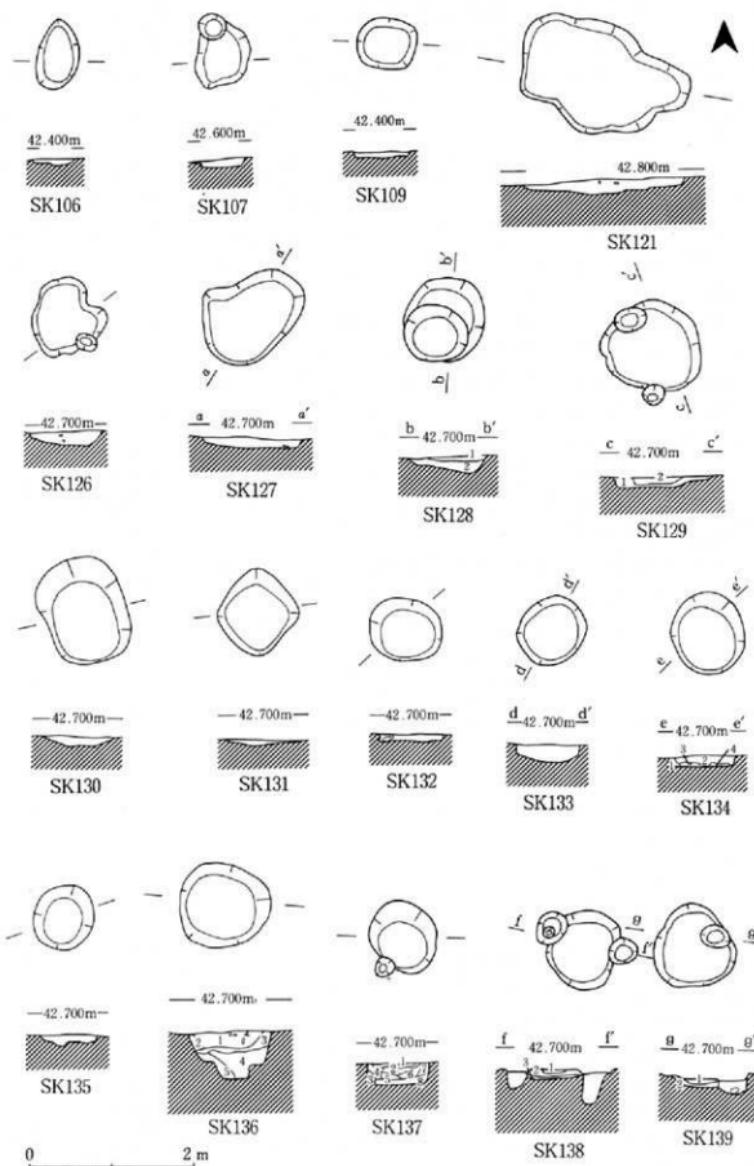
土壙跡SK127 (第29図)

SK126の北約3.5mにあり、平面は梢円形で規模は東西1.3m×南北0.9m、深さ0.2mある。東側は擾乱をうけている。床面はほぼ平坦だが若干小礫がみえ、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は単層で、黄褐色土ブロック10%含む黒褐色土である。出土遺物は縄文土器破片がある。

土壙跡SK128 (第29図)

SB205西梁行の南側に重なり、平面は梢円形で規模は東西0.9m×南北0.8m、深さ0.3mある。床面は凹凸がみられ、壁は北側が緩やかに立ち上がるが、他は垂直に立ち上がる。埋土は2層に分かれ、1層が若干黄褐色土ブロック含む黒色土、2層が若干黄褐色土ブロックと炭化物を含む黒褐色土である。出土遺物は縄文後期の貼瘤土器破片がある。

土壙跡SK129 (第29図)



第29図 土壌跡 SK106・107・109・121・126・127・128・129
130・131・132・133・134・135・136・137・138・139

S K 128の北約3.5mにあり、平面は楕円形で規模は東西1.3m×南北1.1m、深さ0.2mある。S B 197北側柱列に切られる。床面はほぼ平らで、壁は東側が緩やかに立ち上がるが、他は垂直に立ち上がる。埋土は2層に分かれ、1層が若干黄褐色土ブロック、炭化物含む黒色土、2層が黒褐色土である。出土遺物はない。

土壤跡SK130 (第29図)

S K 127の北約3.5mにあり、平面は楕円形で規模は東西1.0m×南北1.3m、深さ0.2mある。床面はほぼ平坦だが、直径0.2~0.3m、深さ0.1mの楕円形ピットが2基ある。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は単層で、黄褐色土ブロック10%含む黒褐色土である。出土遺物は縄文土器破片がある。

土壤跡SK131 (第29図)

S K 130の北東1.5mにあり、平面は楕円形で規模は東西0.9m×南北0.9m、深さ0.1mある。床面は凹凸がみられ、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は単層で、黒褐色土である。出土遺物はない。

土壤跡SK132 (第29図)

S K 131の南東1.0mにあり、平面は円形で規模は東西0.9m×南北0.8m、深さ0.1mある。床面はほぼ平坦だが小礫が一面に露出し、壁は垂直に立ち上がる。埋土は単層で、若干黄褐色土ブロック含む黒色土である。出土遺物はない。

土壤跡SK133 (第29図 図版25)

S K 139の南1.0mにあり、平面は楕円形で規模は東西0.8m×南北0.8m、深さ0.2mある。床面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がるが、西側はやや内湾気味に立ち上がる。埋土は単層で、若干黄褐色土ブロック、炭化物含む黒色土である。出土遺物はない。

土壤跡SK134 (第29図)

S K 132の南東1.0mにあり、平面は円形で規模は東西0.9m×南北1.0m、深さ0.1mある。床面はほぼ平坦だが小礫が一面に露出し、壁は垂直に立ち上がる。埋土は4層に分かれ、1層が若干黄褐色土ブロック、炭化物含む黒色土、2層が若干黄褐色土ブロック含む黒褐色土、3層が若干黄褐色土ブロック含む褐色土、4層が若干黄褐色土ブロック含む暗褐色土である。出土遺物はない。

土壤跡SK135 (第29図)

S K 134の北東1.0mにあり、平面は円形で規模は東西0.7m×南北0.8m、深さ0.2mある。床面は凹凸がみられ、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は単層で、若干黄褐色土ブロック含む黒褐色土である。出土遺物は縄文土器破片がある。

土壤跡SK136 (第29図 図版26)

S K 135の北東約3.5mにあり、平面は楕円形で規模は東西1.1m×南北1.0m、深さ0.6mある。床面はほぼ平坦だが小礫が一面に露出し、壁は垂直に立ち上がる。埋土は5層に分かれ、1層が中疊を若干、炭化物を多く含む黒褐色、2層が若干小礫含む黒褐色土、3層が若干黄褐色土ブロック含む黒褐色土、4層が黒褐色土、5層が若干黄褐色土ブロック含む黒褐色土である。出土遺物はない。

土壤跡SK137 (第29図 図版26)

S K 129の南東2.5mにあり、平面は楕円形で規模は東西0.8m×南北0.9m、深さ0.2mある。S B 197に切られる。床面はほぼ平坦で、壁はやや内湾気味に立ち上がる。埋土は8層に分かれ、1層が黄褐色土ブロック10%含む暗褐色土、2層が黄褐色土ブロック10%含む黒褐色土、3層が黄褐色土ブロック5%含む黒褐色土、4層が若干黄褐色土ブロック含む黒褐色土、5層が若干黄褐色土ブロック含む暗褐色土、6層が黒褐色土、7層が黄褐色土ブロック5%含む黒色土、8層が若干黒色土ブロック含む黄褐色土である。出土遺物は縄文土器破片がある。

土壤跡SK138 (第29図 図版27)

S K137の東約1.5mにあり、平面は梢円形で規模は東西0.8m×南北1.0m、深さ0.2mある。S B197、205に切られる。床面はやや凹凸が見られ、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は3層に分かれ、1層が黄褐色土混じりの黒褐色土、2層が1層より黒みがかる黒褐色土、3層が炭化物ブロック含む暗褐色土である。出土遺物はない。

土壤跡SK139 (第29図 図版27)

S K138の東約0.5mにあり、平面は円形で規模は東西0.9m×南北1.0m、深さ0.2mある。S B197に切られる。床面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は2層に分かれ、1層が黄褐色土ブロック10%、若干炭化物含む黒褐色土、2層が黄褐色土ブロック20%含む黒褐色土である。出土遺物は縄文土器破片がある。

土壤跡SK140 (第30図 図版28)

S K133の南東約1.5mにあり、平面は円形で規模は東西0.9m×南北0.9m、深さ0.5mある。S B197に切られる。床面は平坦で、壁はやや内湾気味に立ち上がる。埋土は5層に分かれ、1層が黄褐色土ブロック10%、若干炭化物含む暗褐色土、2層が黄褐色土ブロック20%含む黒褐色土、3層が黄褐色土ブロック含む黒褐色土、4層が灰黄褐色土、5層が若干黄褐色土ブロック含む黒色土である。出土遺物は縄文土器破片がある。

土壤跡SK141 (第30図 図版28)

S K139の東約2.5mにあり、平面は円形で規模は東西0.9m×南北0.9m、深さ0.3mある。ピットに切られる。床面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は4層に分かれ、1層が黒褐色土5%含む黄褐色土、2層が黄褐色土ブロック20%含む暗褐色土、3層が黄褐色土ブロック10%、若干炭化物含む黒褐色土、4層が黄褐色土ブロック30%含む暗褐色土である。出土遺物はない。

土壤跡SK143 (第30図 図版29)

S K140の東約3.5mにあり、平面は梢円形で規模は東西1.0m×南北1.1m、深さ0.3mある。ピットに切られる。床面はほぼ平坦で、壁はやや内湾気味に立ち上がる。埋土は7層に分かれ、1層がにぶい黄褐色土、2層が黄褐色土ブロック5%含む暗褐色土、3層が若干黄褐色土ブロック、炭化物含む黒褐色土、4層が若干黄褐色土ブロック、炭化物含む黒色土、5層が若干黄褐色土ブロック含む黒褐色土、6層が黄褐色土ブロック5%含む灰黄褐色土、7層が黄褐色土ブロック20%、若干炭化物含む黒褐色土である。出土遺物はない。

土壤跡SK145 (第30図 図版29・38)

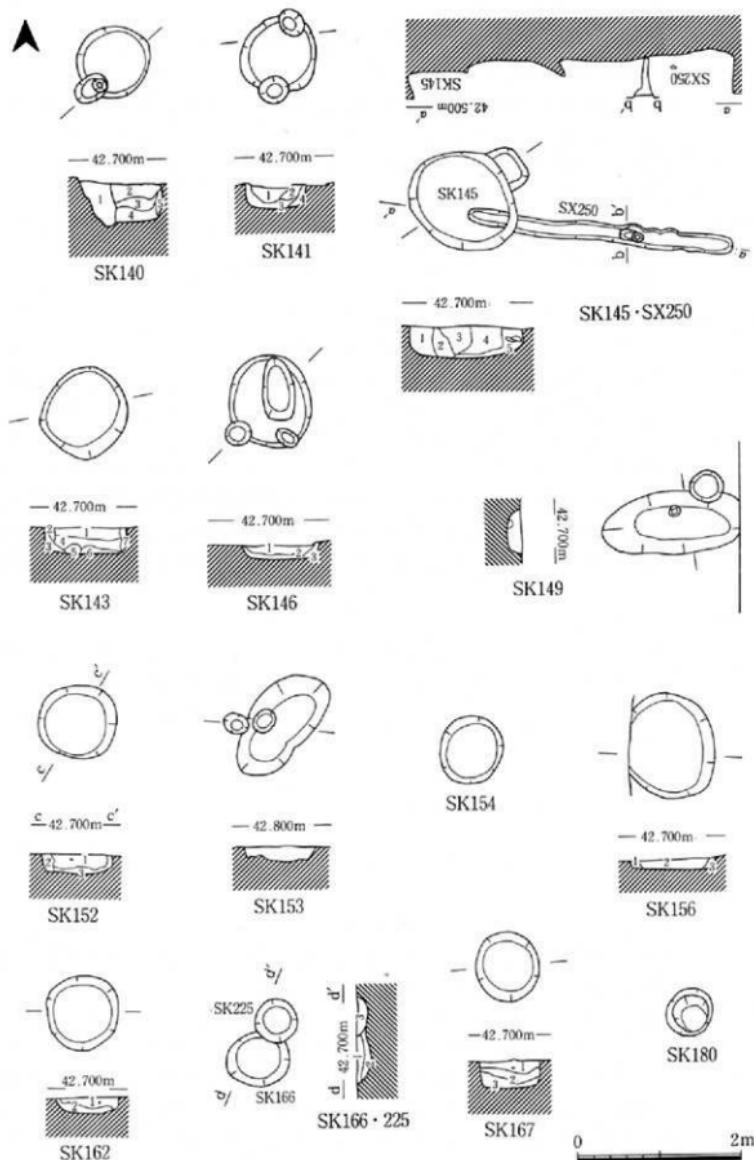
S K143の東約1.5mにあり、平面は円形で規模は東西1.3m×南北1.3m、深さ0.4mある。S B212に切られ、S X250を切る。床面はほぼ平坦で、壁は内湾気味に立ち上がる。埋土は5層に分かれ、1層が炭化物多量に含む黒色土、2層が若干黄褐色土ブロック、炭化物含む黒色土、3層が黄褐色土ブロック20%、若干炭化物含む黒褐色土、4層が黄褐色土ブロック30%含む黒色土、5層が黄褐色土ブロック20%含む黒褐色土である。出土遺物は縄文土器破片がある。

土壤跡SK146 (第30図 図版2・18・30)

S X144の東にあり、平面は梢円形で規模は東西0.9m×南北1.2m、深さ0.2mある。S B232、ピットに切られる。床面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は3層に分かれ、1層が若干の黄褐色土ブロック、多量の炭化物含む黒褐色土、2層が若干黄褐色土ブロック、炭化物含む黒褐色土、3層が褐色土である。出土遺物は土師器小鉢・壺破片がある。

土壤跡SK149 (第30図)

調査区南東隅の東壁際にあり、東端は調査区外に延びる。平面はほぼ梢円形で検出規模は東西1.6m



第30図 土壌跡SK140・141・143・145・146・149・152・153・
154・156・162・166・167・180・225・SX250

×南北0.8m、深さ0.2mある。中央をピットに切られる。床面は凹凸がみられ、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は単層で、若干の黄褐色土ブロック含む黒褐色土である。出土遺物はない。

土壤跡SK152 (第30図)

調査区東端中央にあり、平面は円形で規模は東西0.9m×南北0.9m、深さ0.3mある。床面は平坦で、壁はやや内湾気味に立ち上がる。埋土は3層に分かれ、1層が炭化物3%含む黒色土、2層がぶい黄褐色土、3層が若干黄褐色土ブロック、炭化物含む黒褐色土である。出土遺物は縄文土器破片、ロクロ土師器杯破片がある。

土壤跡SK153 (第30図)

調査区中央の北寄り、SD155の西にあり、平面は不整形で規模は東西1.4m×南北0.7m、深さ0.2mある。北西側をピットに切られる。床面は凹凸がみられ、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は単層で、若干の黄褐色土ブロック含む黒色土である。出土遺物はない。

土壤跡SK154 (第30図)

SK153の南東約2.0mにあり、平面は梢円形で規模は東西0.9m×南北0.8m、深さ0.1mある。床面はほぼ平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。埋土は3層に分かれ、1層が黒色土、2層が若干黄褐色土ブロック含む黒色土、3層が若干黄褐色土ブロック含む黒褐色土である。出土遺物はない。

土壤跡SK156 (第30図)

SK154の南東約2.0mにあり、平面は梢円形で規模は東西1.1m×南北1.3m、深さ0.2mある。SD155に切られる。床面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。埋土は3層に分かれ、1層が黒色土、2層が若干黄褐色土ブロック、炭化物含む黒褐色土、3層が暗褐色土である。出土遺物は縄文土器破片、非ロクロ土師器甕破片がある。

土壤跡SK157 (第35図 図版30)

SK156の北東約3.5mにあり、平面は梢円形で規模は東西0.9m×南北1.2m、深さ0.3mある。床面はほぼ平坦だが中央に径30cmほどの小ピットがある。壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は3層に分かれ、1層が黄褐色土ブロック50%含む黒色土、2層が黄褐色土ブロック20%含む黒色土、3層が黒褐色土である。出土遺物は縄文土器破片がある。

土壤跡SK158 (第35図 図版30)

SK157の東1.5mにあり、平面は梢円形で規模は東西0.8m×南北0.9m、深さ0.3mある。床面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がり小窓が露呈する。埋土は3層に分かれ、1層が若干黄褐色土ブロック含む暗褐色土、2層が若干炭化物含む黒褐色土、3層が若干黄褐色土ブロック含む黒色土である。出土遺物はない。

土壤跡SK161 (第35図)

SK158の東6.5mにあり、平面はほぼ円形で規模は東西0.9m×南北0.8m、深さ0.2mある。床面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がり東壁に小窓が露呈する。埋土は3層に分かれ、1層が黄褐色土ブロック20%、炭化物多量に含む黒褐色土、2層が黄褐色土ブロック5%、若干炭化物含む黒褐色土、3層が黄褐色土ブロック20%、若干炭化物含む暗褐色土である。出土遺物は非ロクロ土師器甕破片がある。

土壤跡SK162 (第30図)

SK161の南約5.0mにあり、平面はほぼ円形で規模は東西0.8m×南北0.9m、深さ0.3mある。床面はほぼ平坦だが小窓が露呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は2層に分かれ、1層が若干黄褐色土ブロック、炭化物多量に含む黒褐色土、2層が若干黄褐色土ブロック、炭化物含む黒褐色土である。

る。出土遺物はない。

土壙跡SK163 (第35図)

S K161の北東約3.5mにあり、平面はほぼ円形で規模は東西1.3m×南北1.3m、深さ0.1mある。S D159を切る。床面はほぼ平坦だが小礫が露呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は4層に分かれ、1層が黒褐色土、2層が若干中疊、炭化物含む褐色土、3層が黄褐色土粒5%含む黑色土、4層が暗褐色土である。出土遺物はない。

土壙跡SK164 (第35図)

S K163の南東約3.0mにあり、平面は梢円形で規模は東西1.4m×南北1.1m、深さ0.1mある。北側をピットに切られる。床面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。埋土は2層に分かれ、1層が黄褐色土ブロック3%含む黒褐色土、2層が黒褐色土である。出土遺物はない。

土壙跡SK166 (第30図 図版31)

S K162の南東3.0mにあり、平面は梢円形で規模は東西0.8m×南北0.6m以上、深さ0.2mある。S K225に切られる。床面は凹凸がみられ、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は2層に分かれ、1層が黄褐色土粒20%含む暗褐色土、2層が黄褐色土粒20%含む黑色土である。出土遺物はない。

土壙跡SK167 (第30図 図版31)

S K136の南南西約2.0mにあり、平面は梢円形で規模は東西0.8m×南北0.9m、深さ0.3mある。床面は平坦だが小・中疊が露呈し、壁はやや内湾気味に立ち上がる。埋土は3層に分かれ、1層が若干黄褐色土ブロック含む黒褐色土、2層が若干黄褐色土ブロック含む暗褐色土、3層が黄褐色土ブロック多量に含む黑色土である。出土遺物は土師器破片がある。

土壙跡SK168 (第35図)

S K163の北東に隣接しており、平面は隅丸方形で規模は東西1.1m×南北1.1m、深さ0.3mある。床面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。床面、壁ともに小疊が露呈する。埋土は3層に分かれ、1層が若干黄褐色土ブロック含む黒褐色土、2層が黒色土、3層が黒褐色土である。出土遺物はない。

土壙跡SK169 (第35図)

調査区北東端にあり、平面はほぼ円形で規模は東西1.2m×南北1.3m以上、深さ0.2mある。S D159に切られる。床面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。埋土は単層で、黒色土である。出土遺物は縄文土器破片がある。

土壙跡SK180 (第30図)

S B165の北東4.5mにあり、平面は円形で規模は東西0.6m×南北0.6m、深さ0.3mある。床面はほぼ平坦だが若干小疊が露呈し、壁は垂直に立ち上がる。埋土は単層で、黒色土である。出土遺物は縄文土器破片、ロクロ土師器甕破片がある。

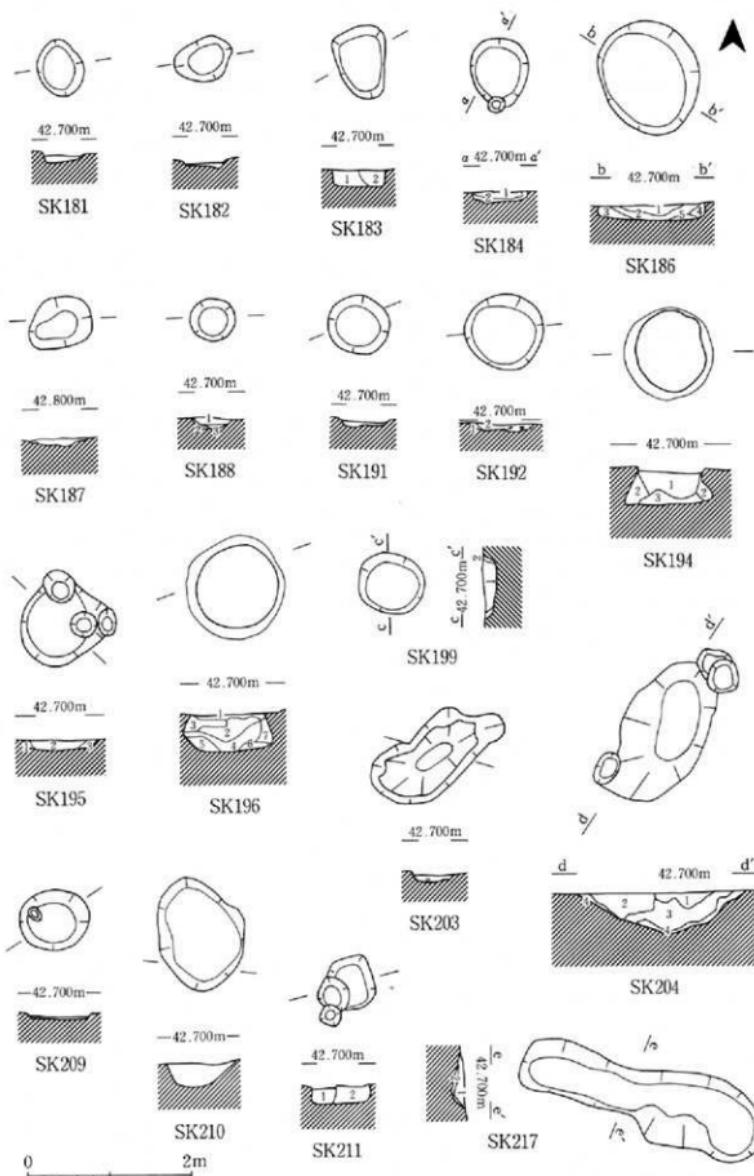
土壙跡SK181 (第31図)

S K180の東南東約5.0mにあり、平面は梢円形で規模は東西0.6m×南北0.7m、深さ0.2mある。床面は凹凸がみられ、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面、壁ともに小疊が露呈する。埋土は単層で、黄褐色土ブロック20%含む黒褐色土である。出土遺物はない。

土壙跡SK182 (第31図)

S K181の北東約4.0mにあり、平面は梢円形で規模は東西0.6m×南北0.5m、深さ0.1mある。床面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がるが、南東部は垂直に立ち上がる。埋土は単層で、黄褐色土ブロック5%含む黒褐色土である。出土遺物はない。

土壙跡SK183 (第31図 図版32)



第31図 土壌跡SK181・182・183・184・186・187・188・191・192・
194・195・196・199・203・204・209・210・211・217

S B232の西約1.5mにあり、平面は梢円形で規模は東西0.7m×南北0.9m、深さ0.2mある。床面はほぼ平坦で、壁は内湾気味に立ち上がる。埋土は2層に分かれ、1層が黄褐色土ブロック20%、若干炭化物含む黒褐色土、2層が黄褐色土ブロック3%含む黒褐色土である。出土遺物はない。

土壤跡SK184 (第31図)

S B212の東約1.5mにあり、平面は円形で規模は東西0.7m×南北0.9m、深さ0.1mある。床面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は2層に分かれ、1層が若干黄褐色土ブロック、炭化物含む黒褐色土、2層が暗褐色土である。出土遺物は縄文後期の貼瘤土器破片がある。

土壤跡SK185

S K183の南西約2.5mにあり、北側は現代井戸跡に破壊されているため平面形、規模は不明だが、深さ0.1mある。床面はほぼ平坦で、南壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分かれ、1層が若干黄褐色土ブロック含む黒褐色土、2層が褐色土である。出土遺物はない。

土壤跡SK186 (第31図)

S B212の北西約3.0mにあり、平面は梢円形で規模は東西1.2m×南北1.4m、深さ0.2mある。床面はほぼ平坦で、壁は内傾して立ち上がる。埋土は5層に分かれ、1層が黄褐色土ブロック20%、炭化物多量に含む黒褐色土、2層が黄褐色土ブロック5%、炭化物多量に含む黒褐色土、3層が黒褐色土、4層が黄褐色土ブロック5%、若干炭化物含む黒褐色土、5層が若干黄褐色土ブロック、炭化物含む暗褐色土である。出土遺物は非クロロ土師器杯・壺破片、須恵器杯破片がある。

土壤跡SK187 (第31図)

S D101とS D155の交差する地点の北西にあり、平面は円形で規模は東西0.7m×南北0.7m、深さ0.1mある。床面はほぼ平坦だが小窓が露呈し、壁は緩やかに外反しながら立ち上がる。埋土は単層で、若干黄褐色土ブロック含む黒色土である。出土遺物はない。

土壤跡SK188 (第31図)

S B187の北2.5mにあり、平面はほぼ円形で規模は東西0.5m×南北0.6m、深さ0.1mある。床面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は3層に分かれ、1層が黒色土、2層が黒褐色土、3層が黄褐色土ブロック多量に含む暗褐色土である。出土遺物は縄文土器破片がある。

土壤跡SK189 (第35図)

S K164の北東約0.5mにあり、平面は梢円形で規模は東西1.1m×南北0.9m、深さ0.1ある。東側をピットに切られる。床面はほぼ平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。埋土は単層で、黄褐色土ブロック5%含む黒褐色～暗褐色土である。出土遺物は縄文土器破片、非クロロ土師器壺破片がある。

土壤跡SK190 (第35図 図版32)

S K189の北東約1.5mにあり、平面は梢円形で規模は東西1.0m×南北1.2m、深さ0.5mある。床面は平坦で、壁は内湾しながら立ち上がり、中腹からは垂直に立ち上がる。埋土は4層に分かれ、1層が黄褐色土ブロック20%、若干炭化物含む黒褐色土、2層が若干黒褐色土含む黄褐色土、3層が黄褐色土粒10%含む暗褐色土、4層が黄褐色土粒5%、若干炭化物含む黒褐色土である。出土遺物は縄文土器破片、非クロロ土師器杯破片がある。

土壤跡SK191 (第31図)

S B165の南約1.5mにあり、平面は梢円形で規模は東西0.7m×南北0.7m、深さ0.1mある。床面は凹凸がみられ、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は単層で、黑色土である。出土遺物はない。

土壤跡SK192 (第31図 図版24)

S I215の中央にあり、平面は梢円形で規模は北東一南西0.9m×北西一南東1.0m、深さ0.1mある。

床面は凹凸がみられ若干小礫が露出し、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分かれ、1層が若干小礫含む黒色土、2層が黒褐色土である。出土遺物は縄文土器片、土師器片がある。

土壤跡SK194 (第31図 図版33)

発掘区北東端 S K 169の南西約4.0mにあり、平面は梢円形で規模は東西0.9m×南北1.0m、深さ0.5mある。床面はほぼ平坦で、壁は内傾して立ち上がり、断面フ拉斯コ状を呈する。埋土は3層に分かれ、1層が黄褐色土ブロック5%、若干炭化物、赤褐色土ブロック含む黒褐色土、2層が黄褐色土ブロック50%含む黒褐色土、3層が若干炭化物含む黒褐色土である。出土遺物は縄文後期土器片がある。

土壤跡SK195 (第31図 図版33)

S B 233の中央付近にあり、平面は不整円形で規模は東西0.9m×南北0.9m、深さ0.2mある。北側と東側はピットに切られる。床面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がるが、西壁は垂直に立ち上がる。埋土は3層に分かれ、1層が黄褐色土ブロック20%含む暗褐色土である。2層が若干黄褐色土ブロック含む黒褐色土、3層が黄褐色土ブロック5%含む暗褐色土である。出土遺物はない。

土壤跡SK196 (第31図 図版34)

S K 186の西にあり、平面は円形で規模は東西1.2m×南北1.3m、深さ0.5mある。床面はほぼ平坦で、壁は内傾して立ち上がるが西壁は断面くの字形を呈す。埋土は7層に分かれ、1層が若干黄褐色土ブロック含む黒褐色土、2層が黄褐色土ブロック10%含む黒褐色土、3層が黄褐色土ブロック10%、炭化物多量に含む褐色土、4層が炭化物含む黒褐色土、5層が黄褐色土50%以上含むにぶい黄褐色土、6層が褐色土、7層が若干黄褐色土ブロック含む黒褐色土である。出土遺物は縄文土器片がある。

土壤跡SK198 (第35図)

発掘区北寄り S K 161の北西2.5mにあり、平面は梢円形で規模は東西1.0m×南北1.0m、深さ0.1mある。床面は若干凹凸がみられ、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分かれ、1層が若干黄褐色土ブロック含む黒色土、2層が黄褐色土ブロック20%含む黒褐色土である。出土遺物はない。

土壤跡SK199 (第31図)

S D 101の北側、S I 160の東側にあり、平面は梢円形で規模は東西0.7m×南北0.8m、深さ0.2mある。S I 160を切る。床面はほぼ平坦で小礫が露呈し、壁は垂直に立ち上がる。埋土は2層に分かれ、1層が黄褐色土ブロック5%、若干炭化物含む黒褐色土、2層が若干黄褐色土ブロック含む褐色土である。出土遺物はない。

土壤跡SK203 (第31図)

調査区東端中央にあり、平面は梢円形で規模は東西1.5m×南北0.7m、深さ0.1mある。床面は凹凸がみられ、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は単層で、黄褐色土ブロック30%含む黒褐色土である。出土遺物は非クロロ土師器壺片がある。

土壤跡SK204 (第31図)

S I 125の南西にあり、平面は不整長円形で規模は北東—南西1.9m×北西—南東1.3m、深さ0.6mある。北東と西側のピットに切られる。床面は凹凸がみられ、壁は緩やかに立ち上がるが、東側は垂直に立ち上がる。埋土は4層に分かれ、1層が若干黄褐色土粒、炭化物含む黒褐色土、2層が黄褐色土ブロック、炭化物5%含む黒褐色土、3層が1層より明るい色で黄褐色土ブロック10%、若干炭化物含む黒褐色土、4層が黄褐色土ブロック50%以上含むにぶい黄褐色土である。出土遺物はない。

土壤跡SK209 (第31図)

S I 150の北約1.5mにあり、平面は梢円形で規模は東西0.8m×南北0.8m、深さ0.1mある。床面

はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は単層で、黄褐色土ブロック3%含む暗褐色土である。出土遺物は縄文土器破片がある。

土壤跡SK210（第31図）

S I 125の北東にあり、平面は円形で規模は東西1.0m×南北1.3m、深さ0.3mある。S B 197南側柱列に切られる。床面はほぼ平坦で、壁はやや内湾しながら立つが、東側は緩やかに立ち上がる。埋土は単層で、黄褐色土ブロック30%、若干炭化物含む黒褐色土である。出土遺物は縄文土器破片、土師器破片がある。

土壤跡SK211（第31図）

S K 209の北約1.0mにあり、平面は不整形で規模は東西0.6m×南北0.7m、深さ0.3mある。南西をピットに切られる。床面は凹凸がみられ、壁は内傾気味に立ち上がる。埋土は2層に分かれ、1層が黄褐色土ブロック40%含む黒褐色土、2層が黄褐色土ブロック50%以上含む暗褐色土である。出土遺物はない。

土壤跡SK217（第31図）

S K 203の南東にあり、平面は不整形で規模は東西3.1m×南北1.0m、深さ0.3mある。北側をピットに切られる。床面は凹凸がみられ、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は3層に分かれ、1層が黄褐色土粒40%含む黒褐色土、2層が黄褐色土粒50%含む暗褐色土、3層が若干黄褐色土ブロック含む暗褐色土である。出土遺物は非クロロ土師器壺破片、ロクロ土師器杯破片、須恵器杯・壺破片がある。

土壤跡SK219（第32図 図版34）

S K 221の南にあり、平面は円形で規模は東西1.2m×南北1.2m、深さ0.1mある。S K 221を切り、南側のピットに切られる。床面は凹凸がみられ、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分かれ、1層が黄褐色土ブロック3%、炭化物1%含む暗褐色土、2層が黄褐色土粒30%含む暗褐色土である。出土遺物は非クロロ土師器壺破片がある。

土壤跡SK221（第32図 図版34）

S K 152の南約2.5mにあり、平面は隅丸長方形で規模は東西1.6m×南北0.4m、深さ0.3mある。S K 219、南西側のピットに切られる。床面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。埋土は2層に分かれ、1層が黄褐色土粒30%含む暗褐色土、2層が黄褐色土ブロック5%、炭化物10%含む黒褐色土である。出土遺物は非クロロ土師器壺破片がある。

土壤跡SK224（第32図）

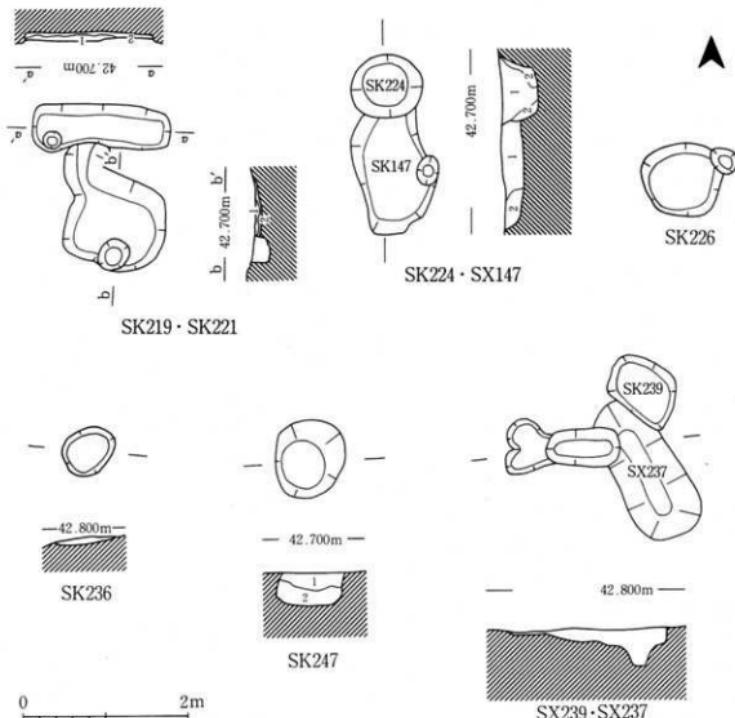
S X 147の北にあり、平面は円形で規模は東西0.8m×南北0.8m、深さ0.5mある。S X 147を切る。床面はほぼ平坦で、壁はやや内湾気味に立ち上がる。埋土は2層に分かれ、1層が黄褐色土ブロック5%、炭化物10%、若干小礫含む黒褐色土、2層が黄褐色土ブロック30%、炭化物10%、若干小礫含む黒褐色土である。出土遺物はない。

土壤跡SK225（第30図）

S D 101の北側、S K 166の北に重なり、平面は円形で規模は東西0.5m×南北0.5m、深さ0.1mある。S K 166を切る。床面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は単層で、黄褐色土ブロック5%、若干炭化物含む黒褐色土である。出土遺物はない。

土壤跡SK226（第32図）

S B 197の北東隅の柱穴に切られ、平面は円形で東西1.0m×南北0.9m、深さ0.2mある。床面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は単層で、黄褐色土ブロック5%、若干炭化物含む黒褐色土である。出土遺物はない。



第32図 土壙跡SK219-221-224-226-236-239-247-SX147-237

土壙跡SK236（第32図 図版24）

S K192の北東にあり、平面は円形で規模は東西0.7m×南北0.7m、深さ0.1mある。床面はほぼ平坦で小礫が露出する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は単層で、若干小礫含む黒色土である。出土遺物はない。

土壙跡SK239（第32図）

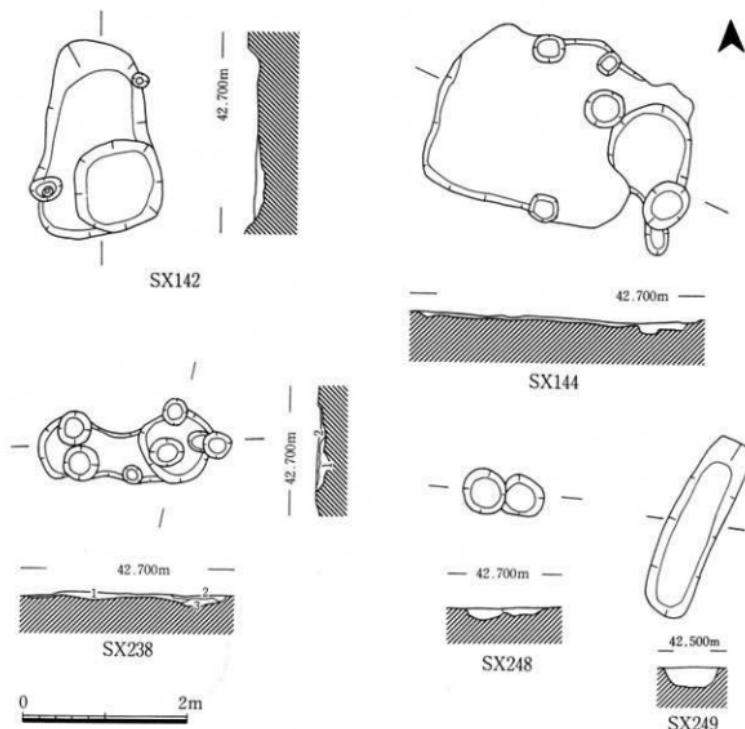
S I 213の西、S X237の北東にあり、S X237に切られる。平面は不整形で規模は東西0.8m×南北0.8m、深さ0.1mある。床面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は単層で、黄褐色土ブロック10%含む黒褐色土である。出土遺物はない。

土壙跡SK247（第32図）

S K186の北にあり、平面は円形で規模は東西0.9m×南北1.0m、深さ0.4mある。西側の木根跡に切られる。床面は平坦で、壁は断面ややフラスコ状を呈する。埋土は2層に分かれ、1層が黄褐色土粒30%含む黒褐色土、2層が黒褐色土ブロック10%含む黄褐色土である。出土遺物はない。

(7) 溝 跡

溝跡SD102（第34図 図版1・35）



第33図 その他の遺構SX142・144・238・248・249

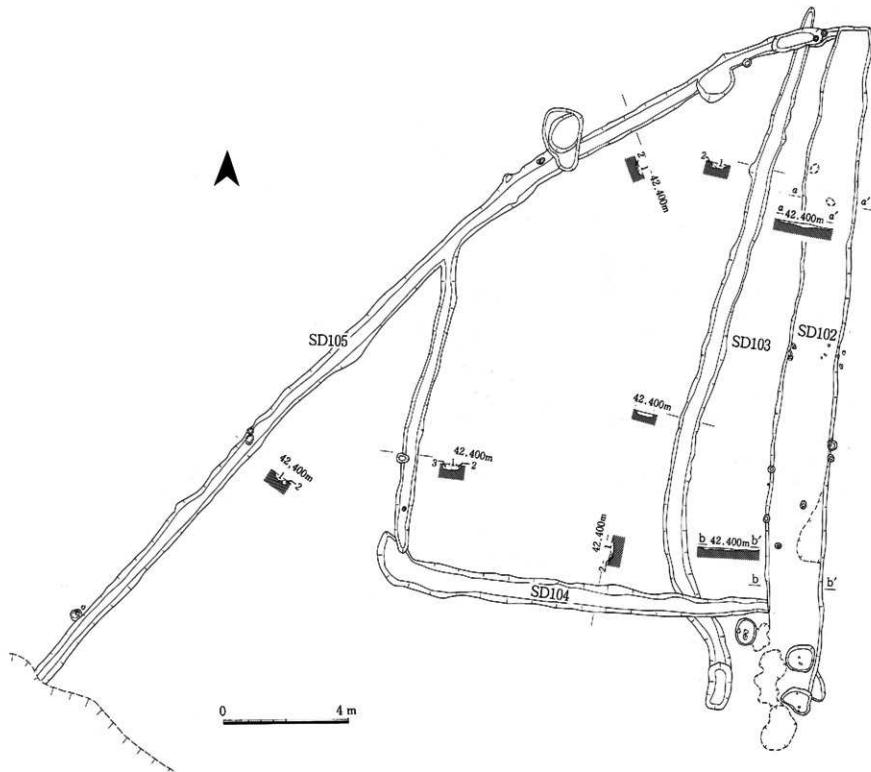
調査区中央北半の西寄りにある南北にのびる溝で、SD104、105を切る。規模は全長23.2m、幅1.7~1.8m、深さ0.1mある。溝の掘削は浅く、床面中央には幅10cm前後、深さ3cm前後の細い溝が1条、南北方向に掘り込まれている。埋土は単層で、黄褐色土ブロック20~30%含む黒褐色土である。出土遺物はない。方向は、堀跡SD155の南北方位に一致する。

溝跡SD103 (第34図 図版1・35)

SD102の西側から発見された南北にのびる溝で、SD104、105に切られる。規模は全長23.0m、幅0.6m、深さ0.2mある。壁、底部ともに丁寧に掘削され、底部はほぼ平坦で、壁は外反しながら立ち上がる。埋土は2層に分かれ、1層が若干黄褐色土ブロック、炭化物を含む暗褐色土、2層が黄褐色土粒30%、若干炭化物含むぶい黄褐色土である。出土遺物はない。

溝跡SD104 (第34図 図版1)

SD103と南端で交差する溝で、交差地点から西方に約10mのところで直角に曲がり北にのびる。SD103を切り、SD102と直交するかたちで切られる。SD105とは類似する埋土で切り合いを確認することはできなかった。規模は東西の長さ12.0m、南北の長さ10.5m、幅0.6~0.7m、深さ0.2mある。壁、底部ともに丁寧に掘削され、底部は平坦で、壁は垂直または外反しながら立ち上がる。埋



第34図 溝跡S口102-103-104-105

土は3層に分かれ、1層が小礫5%含む灰黄褐色土、2層が若干炭化物含むぶい黄褐色土、3層が黄褐色土ブロック20%含む褐色土である。出土遺物はない。

溝跡SD105 (第34図 図版1)

S D104の北西から発見された南西一北東にのびる溝で、北東寄りの一部と南西端は擾乱にあり破壊されている。S D103を切り、S D102に切られる。残存規模は全長33.5m、幅0.5m、深さ0.2mある。壁、底部ともに丁寧に掘削され、底部はほぼ平坦で、壁は東側は垂直に、西側は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分かれ、1層が若干黄褐色土ブロック、炭化物を含むぶい黄褐色土、2層が黄褐色土ブロック10%、若干炭化物含む暗褐色土である。出土遺物はない。

溝跡SD112 (第11図)

堀跡S D101に囲まれた内側の最西端にある東西にのびる溝で、規模は全長5.6m、幅0.3m、深さ0.1mある。溝の掘削は浅く、底部は平坦で、壁は外反しながら立ち上がる。埋土は単層で、若干黄褐色土ブロック含む黒褐色土である。出土遺物はない。

溝跡SD122 (第16図 図版2・16・17)

S B197の南にある東西に延びるL字形の溝で、S I 125を切る。規模は全長16.2m、幅0.7~1.4m(平均1.0m前後)、深さ0.1~0.4mある。底部は凹凸がみられ、壁はやや内湾気味に立ち上がる。埋土は単層で、若干黄褐色土ブロックを含む暗褐色土である。出土遺物は縄文土器破片、非クロロ土師器杯・壺破片、須恵器杯・壺破片、フイゴ羽口がある。

溝跡SD123 (第16図 図版2・16)

S B197の北にある東西に延びる逆L字形の溝で、S K 129を切る。規模は全長11.9m、幅0.6~0.8m、深さ0.1~0.2mある。底部は凹凸がみられ、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分かれ、1層が黄褐色土ブロック10%含む黒褐色土、2層が若干黄褐色土ブロック含む黒褐色土である。出土遺物は非クロロ土師器壺破片がある。

溝跡SD148 (第28図)

調査区南東にある溝で、溝の西端は調査区外に延びる。S E 220に切られる。検出規模は全長8.9m、幅0.3~1.0m(平均0.5m前後)、深さ0.3mある。底部はほぼ平坦で、壁はやや内湾気味に立ち上がる。埋土は単層で、若干黄褐色土ブロック含む黒褐色土である。出土遺物は非クロロ土師器壺破片がある。

溝跡SD159 (第35図 図版36)

調査区北東の段丘崖沿いにある東西にのびる溝で、東端は段丘端までのび、西端はS D155に切られる。検出規模は全長28.7m、幅0.6~0.9m、深さ0.3mある。底部は凹凸がみられ、板塀の痕跡を示すものと解される。壁はやや内湾気味に立ち上がる。埋土は3層に分かれ、1層が若干黄褐色土ブロック含む暗褐色土、2層が1層よりやや黒い暗褐色土、3層が黄褐色土ブロック20%含む褐色土である。出土遺物は非クロロ土師器壺破片がある。溝の走向は段丘崖にはば並行する。

溝跡SD239 (第28図)

調査区南東端の南壁際にある東西にのびる溝で、溝の南西端は調査区外に延びる。重複するピットに切られる。検出規模は全長4.2m、幅0.3~0.5m、深さ0.3mある。底部はほぼ平坦で断面U字形を呈し、壁はやや内湾気味に立ち上がる。埋土は単層で、若干黄褐色土ブロック含む黒褐色土である。出土遺物はない。

(8) その他の遺構

SX142 (第33図)

S K 141の東約1mにある遺構で、重複するピットに切られる。平面は隅丸長方形で、規模は東西

1.2m×南北2.4m、深さ0.2mある。床面はほぼ平坦だが北側が一段高くなっている。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は単層で、若干黄褐色土ブロック、炭化物含む黒褐色土である。出土遺物はない。

SX144 (第33図 図版2・18・36)

S B232の北側にある遺構で、重複するピットに切られる。平面は隅丸長方形で、規模は東西3.2m×南北2.2m、深さ0.1mある。床面はほぼ平坦だが東側に円形の土壤をもつ。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は単層で、黄褐色土ブロック20%含む暗褐色土である。出土遺物は縄文後期の貼瘤土器破片、非クロコ土師器壺破片、ロクロ土師器杯・壺破片、須恵器杯破片、フイゴ羽口がある。

SX147 (第32図)

S I 213の南西3.0mにある遺構で、東側のピット、北側のSK224に切られる。平面は梢円形で、規模は東西1.0m×南北1.4m以上、深さ0.3mある。床面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は2層に分かれ、1層が赤褐色土粒5%含む黒褐色土、2層が黄褐色土ブロック30%、赤褐色土粒5%含む黒褐色土である。出土遺物は非クロコ土師器杯・壺破片がある。

土器埋設遺構SX208 (図版37)

調査区の南東隅にある遺構で、土器が正位で埋設される。平面は円形で、規模は東西0.4m×南北0.5m、深さ0.2mある。床面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は単層で、若干黄褐色土ブロック含む黒色土である。出土遺物は縄文土器鉢底部破片がある。

SX237 (第32図)

S I 150の南約2.5mにある遺構で、SK239を切る。平面は不整形で、規模は東西0.8m×南北1.8m、深さ0.2mある。床面は平坦で、西側に向かって緩やかな登り斜面を呈する。壁は東側は急に立ち上がるが西は緩やかに立ち上がる。埋土は単層で、黄褐色土ブロック、炭化物10%含む黒褐色土である。出土遺物はない。

また、遺構の南東側にSX237に切られる暗赤褐色土が分布する。平面は長梢円形で、規模は東西0.9m×南北1.8m、深さ0.5mあるが、土色、土質から人為的な掘り込みをした形跡がなく、加熱による変色部の可能性がある。

SX238 (第33図 図版37)

S X237の南西約2.0mにある遺構で、北側と東側のピット4個に切られる。平面は不整形で、規模は東西2.1m×南北0.6~0.9m、深さ0.2mある。床面は東側が若干窪み、西側は平坦である。埋土は3層にわかれ、1層が焼土ブロック多量に含む暗褐色土、2層が黄褐色土ブロック30%含む黒褐色土、3層が若干焼土ブロック含む黄褐色土である。出土遺物はない。

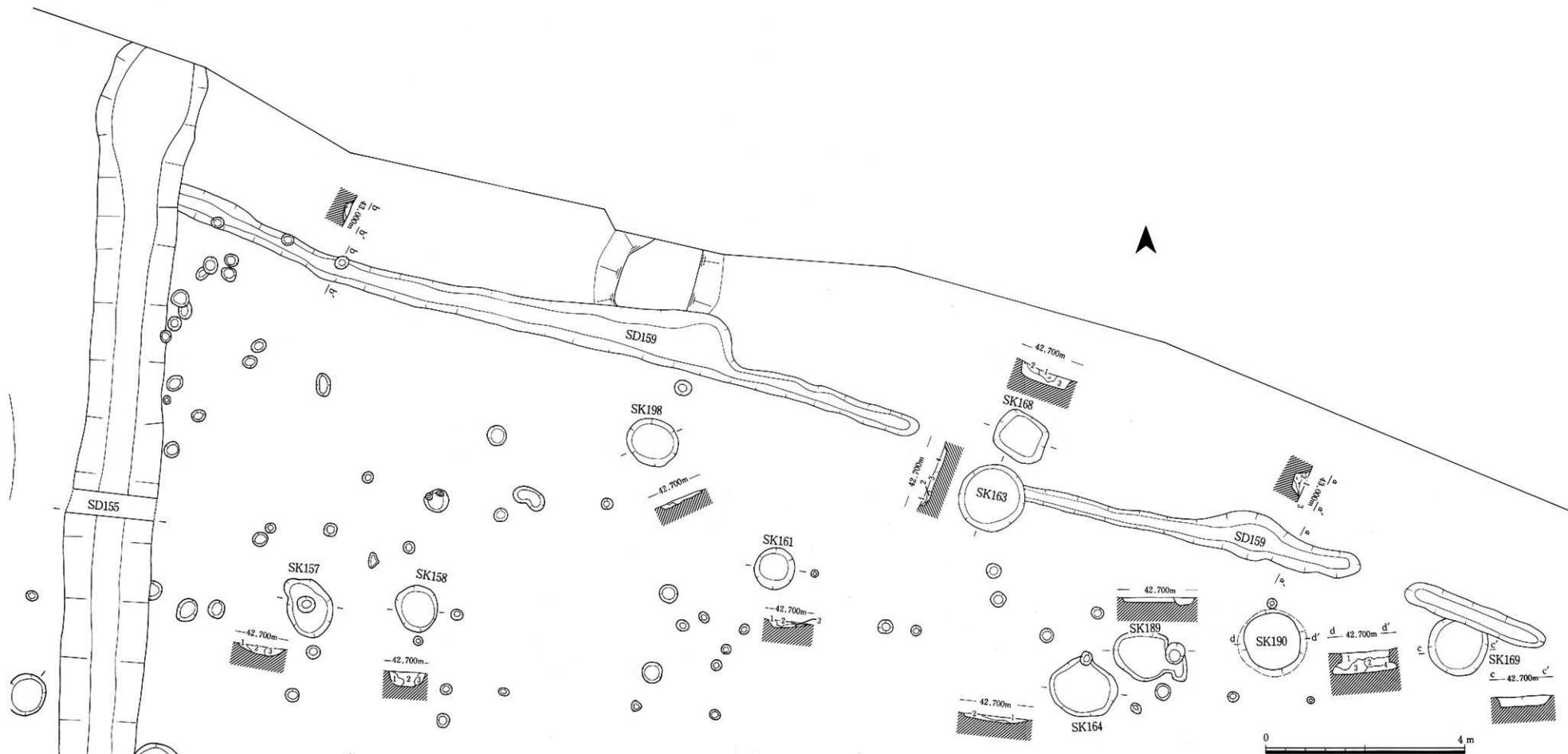
SX248 (第33図 図版38)

SK152の東1mにある遺構で、平面は円形をふたつ重ねた形である。規模は東西1.0m×南北0.5m、深さ0.2mある。床面は丁寧に掘削されほぼ平坦だが西側が深く落ち込み、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層にわかれ、1層が焼土ブロック多く含み、炭化物30%含む黒褐色土、2層が黄褐色土ブロック20%含む黒褐色土である。出土遺物は縄文土器破片、ロクロ土師器杯・壺破片がある。

SX249 (第33図)

SK186の東にある遺構で、北側の木根跡に切られる。平面は長梢円形で、規模は東西0.7m×南北2.4m、深さ0.3mある。床面は丁寧に掘削され平坦で、壁は断面U字形でやや内湾しながら立ち上がる。埋土は単層で、黄褐色土粒30~40%含む黒褐色土である。出土遺物は縄文土器破片、非クロコ土師器壺破片がある。

陥し穴状遺構SX250 (第30図 図版38)



第35図 土壌SK157-158-161-163-164-168-169-189-190-198・溝跡SD159

S K145の東に重複する遺構で、S K145、S B212に切られる。長軸方向を東西にもち、規模は東西3.3m×南北0.2m、深さ0.5mある。床面は若干凹凸がみられるが丁寧に掘削され、床面中央西寄り付近で地山部分を掘り残す。壁は断面が細長いU字形でやや内傾しながら立ち上がり、東壁は底部付近でやや外側にラフスコ状に張り出す。埋土は単層で、黄褐色土ブロック5%含む黒褐色土であるが、壁際に黄褐色土粒を多く含む。出土遺物はない。

(9) ピット群

平面円形がほとんどで直径0.1~0.4m、深さ0.1~0.6mの規模で約650個ある。埋土は黑色土と黒褐色土の2種類がある。遺物は土師器破片が数点出土している。

(10) 近世墓

1号墓 (第36図 図版39)

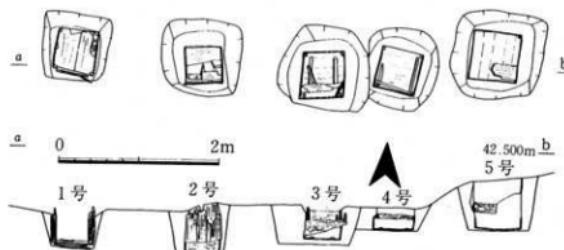
調査区中央より西寄りのS D101北岸上端付近斜面上にある。墓跡のうち最も西側にあり、S D101を切る。棺柩は木製の板で四壁と底部を囲み、天井部は欠損する。平面は正方形で、棺柩の残存規模は東西52cm×南北57cm、高さ48cm、墓壙部は東西84cm×南北82cm、深さ65cmある。棺柩は底板の四隅に一辺約4~5cmの角材を取りつけ、その角材に長さ50cm前後、幅20cm前後、厚さ1.5cmの側板を3段以上積み、釘で打ちつけ箱状にする。埋土は単層で、褐灰色~灰黃褐色土である。出土遺物は古銭、漆器椀、人骨片がある。

2号墓 (第36図 図版39・40)

1号墓の東約0.7mにあり、S D101を切る。棺柩は木製の板で四壁と底部を囲み、天井部は欠損する。平面は正方形で、棺柩の残存規模は東西47cm×南北47cm、高さ67cm、墓壙部は東西101cm×南北96cm、深さ40cmある。棺柩は底板の四方に長さ67cm以上、幅15cm前後、厚さ1.5cmの側板を縦長にして3枚横に並べ、釘で打ちつけ箱状にする。埋土は単層で、若干黄褐色土ブロック含む褐灰色~灰黃褐色土である。出土遺物は棺内から木製品、漆塗り木箱、煙管吸口、簪が、墓壙部から漆器椀がある。

3号墓 (第36図 図版39)

2号墓の東約0.5mにあり、S D101、4号墓を切る。棺柩は木製の板で四壁と底部を囲み、天井部は欠損する。平面は正方形で、棺柩の残存規模は東西55cm×南北58cm、高さ40cm、墓壙部は東西107cm×南北102cm、深さ67cmある。棺柩は底板の四隅に一辺約4~5cmの角材を取りつけ、その角材に長さ50cm前後、幅20cm前後、厚さ1.5cmの側板を2段以上積み、釘で打ちつけ箱状にする。底板内側には一辺約4~5cm、長さ30cm前後の角材2本を平行に取りつけている。埋土は単層で、若干黄褐色土ブロック含む褐灰色~灰黃褐色土である。出土遺物は古銭、人骨片がある。



第36図 近世墓1~5号

4号墓（第36図 図版39）

3号墓の東に重複し、SD101を切り、3号墓に切られる。棺柩は木製の板で四壁と底部を囲み、天井部は欠損する。平面は正方形で、棺柩の残存規模は東西52cm×南北52cm、高さ15cm、墓壙部は東西103cm×南北86cm、深さ58cmある。棺柩は底板の四隅に一辺約4~5cmの角材を取りつけ、その角材に長さ50cm前後、幅20cm前後、厚さ1.5cmの側板を1段以上積み、釘で打ちつけ箱状にする。底板内側には一辺約4~5cm、長さ30~40cm前後の角材2本を平行に取り付けている。埋土は単層で、褐灰色~灰黄褐色土である。出土遺物は古銭、漆器碗がある。

5号墓（第36図 図版39）

4号墓の東約0.2mにあり、SD101を切る。棺柩は木製の板で四壁と底部を囲み、天井部は欠損する。平面は正方形で、棺柩の残存規模は東西60cm×南北60cm、高さ14cm、墓壙部は東西114cm×南北111cm、深さ70cmある。棺柩は底板の四隅に一辺約4~5cmの角材を取りつけ、その角材に長さ60cm前後、幅20cm前後、厚さ1.5cmの側板を1段以上積み、釘で打ちつけ箱状にする。埋土は2層に分かれ、1層が黄褐色土ブロック、大小碟多く含む褐灰色~灰黄褐色土で、2層が腐食臭のする灰色土である。出土遺物はない。

IV、遺物

当遺跡から出土した遺物は中・近世、古代、縄文・弥生時代のものがある。遺物の大半は破片として出土し、完形品は非常に少ない。以下、時代及び種類ごとに主な遺物の概要を記す。

1、中・近世

(1) 中国産陶磁器

青磁4点、白磁2点、天目茶碗1点がある。

青磁（第37図 図版41-5~7）

1、2は碗で、1はSD101東辺の1層より出土し、体部外面に浅い沈線で幅の狭い蓮弁文を付す。釉調は濃緑色で、胎土は黒灰色である。2はSD101東辺の2層上面から出土し、体部外面に数条の線が巡る。釉調は緑色で、胎土は灰白色である。3は盤で、SD172の2層から出土し、表面に加熱の痕跡が認められる。釉調は緑色で、胎土は灰白色である。

白磁（第37図 図版41-1~9）

4は皿で、SD101北辺東側の1層下面より出土している。高台は削り出しによる輪高台で、軽く外側に踏ん張る。断面は逆台形状をなし、両角を削る。釉調は乳白色で、体部下位から底部、高台を除いて前面に施釉される。胎土は浅黄橙色で、推定台径3.9cmある。

5は、SD101北辺中央の1層下面より出土した、12世紀後半頃の大型の玉縁がつくⅣ類の碗である。内面に灰白色の釉がかかり、1条の沈線が輪状にはいる。胎土は淡灰色で推定台径6.2cmある。

天目茶碗（第37図 図版41-10）

西地区中央付近の段丘縁辺で出土した遺構外出土遺物である。体部破片で内外とも黒色の釉がかかる。胎土は黒灰色である。

(2) 国産陶磁器

陶器（第37図 図版41-8~11・12）

6はSD101北辺中央付近の2層上面より出土した古瀬戸の瓶子破片で、内外に緑の釉がかかる。

胎土は灰白色である。遺構外からは美濃（41-12）、相馬大堀產（41-11）の破片がある。

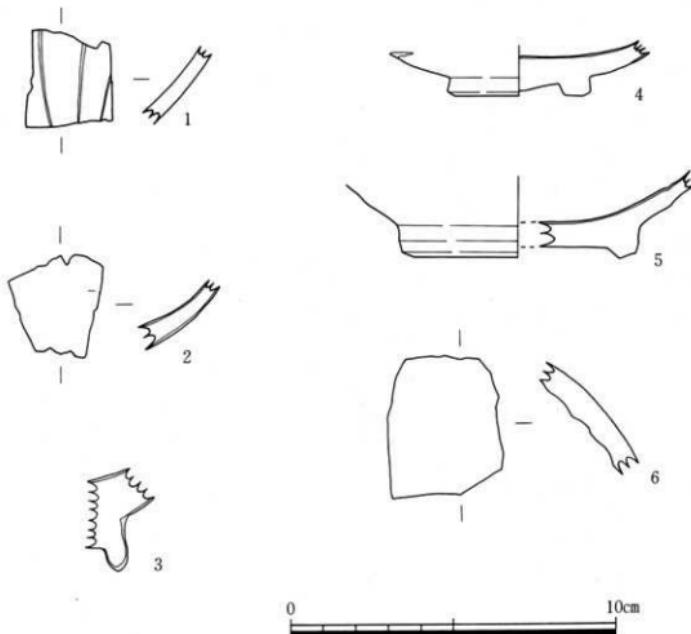
磁器（図版41-2～4・13）

S D101東辺1層から出土した肥前産の染付碗（41-2）、肥前產と考えられる小鉢（41-4）が、S D101北辺より出土した古伊万里と考えられる小杯（41-3）が、遺構外からは徳利破片（41-13）がある。

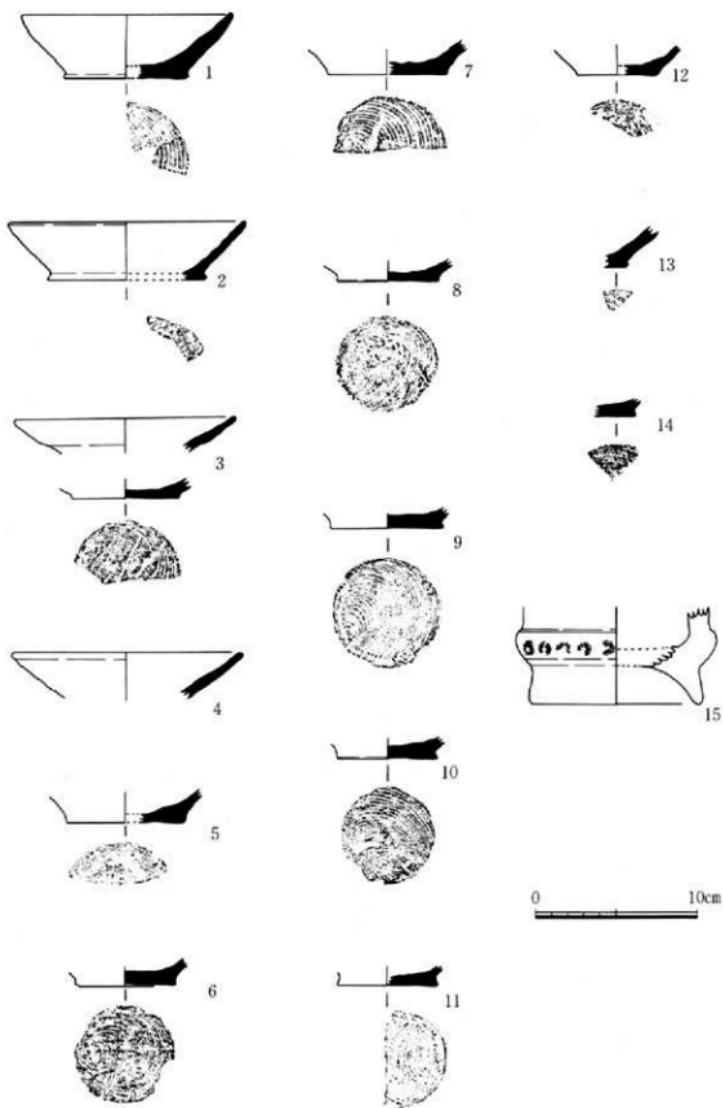
（3）土師器及び瓦質土器（第38図 図版42-1～6）

15の香炉以外、すべて器種は杯である。いずれも胎土は白色微粒の混じる微砂質で、5以外は内外焼された黒灰色を呈する。器面の特徴として筋目状のロクロ調整痕が内外にみられ、底部は器壁を厚くつくった平高台状になる。杯の底部切離し技法はいずれも回転糸切り無調整である。1・2・4・5・6・7・13・14はS D101の3層から、3・8・10・11は2層から、9・15が1層から、12は遺構外から出土している。

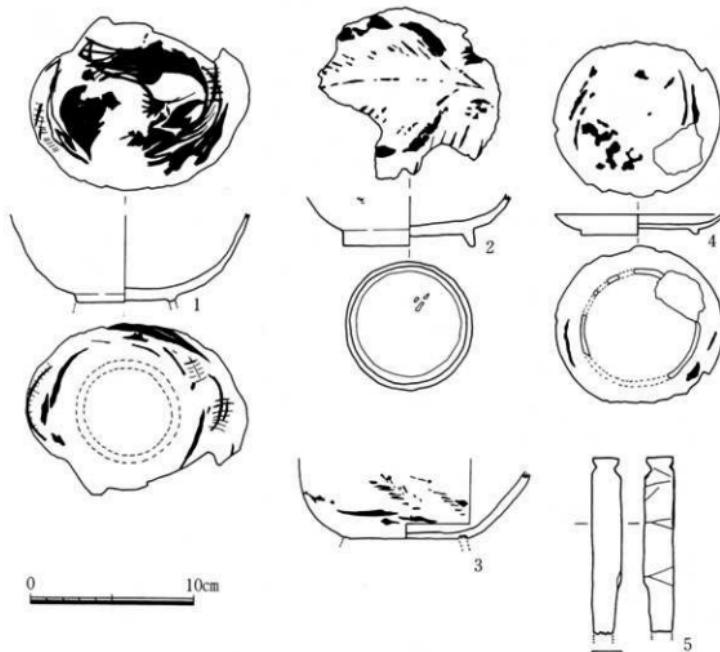
1は互いに約30m離れた地点から出土した破片が接合したもので、推定口径13.0cm、推定底径7.5cm、器高3.9cmあり、断面色調は灰白色である。2は推定口径14.4cm、推定底径9.6cm、器高3.6cmあり、断面色調はにぶい橙色である。3は推定口径13.4cm、推定底径6.6cmあり、同一固体だが接合しない。断面色調はにぶい橙色である。4は推定口径13.8cmあり、断面色調はにぶい橙色である。5は器面・



第37図 仙人西遺跡出土陶磁器実測図



第38図 仙人西遺跡出土土師器・瓦質土器実測図



第39図 仙人西遺跡出土漆器・木製品実測図

断面の色調が浅黄橙色で、磨滅気味である。推定底径7.2cmある。6は推定底径6.0cmあり、断面色調は灰白色である。7は推定底径7.4cmあり、断面色調は灰白色である。8は底径6.2cmあり、断面色調は灰白色である。9は底径6.8cmあり、断面色調は灰白色である。10は底径6.0cmあり、外面及び断面色調はにぶい橙色である。11は底径6.1cmあり、断面色調はにぶい橙色である。12は底径5.0cmあり、断面色調はにぶい橙色である。13は断面色調が灰白色、14は器面の色調が浅黄橙色で、磨滅気味である。

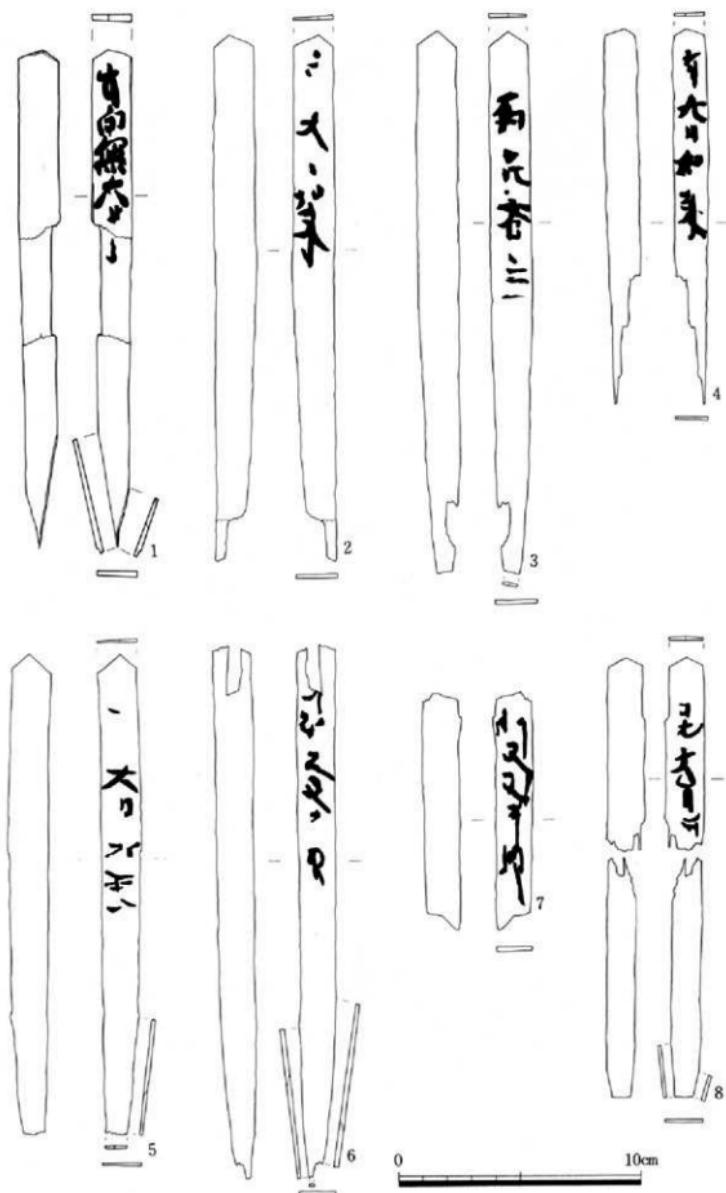
15は推定台径10.4cmあり、内面が黒灰色、外面が浅黄橙色である。胎土は粗いが夾雜物は杯と類似する。胸張部に花文を刻印し、花文の直下に1条の沈線が巡る。断面色調はにぶい橙色である。

(4) 漆 器 (第39図 カラー図版3 図版43-1・2)

S D101、172の3層から破片を含め、多量に出土している。そのうち図示できたのは4点ある。1～3は椀で、4は小皿である。3が内面を朱漆で塗る以外は、3の外面及び1・2・4は黒地漆の上に朱漆で文様を描く。

1は葉の文様を描き、内面は葉の文様の中に刻線を入れる。2は高台径8.1cmあり、内外とも文様があるが、外面はほとんど剥落している。底部にロクロ爪跡が残る。4は口径10.2cm、高台径7.1cm、器高1.2cmある。

(5) 木製品 (第39・40 図版43-46)



第40図 仙人西遺跡出土篋婆実測図

S D101及びS D172から多量の木製品が出土している。遺物の種類は笠塔婆、木簡状木製品、棒状木製品、杭、板状木製品、柄杓、曲物及び曲物底板、草履、下駄がある。主な遺物の概要は一覧表に記している(第1表)。

第39図5は荷札状の木製品で、片面に刻線が入る。端部の側面成形にキリカキ(三角形)及びキリオトシ(台形)技法を用いる。

第40図は笠塔婆で8点出土し、2~7は一括で出土した。「大日如来」と記されるものが多く、梵字を連続するものもある。

また、近世の2号墓から両端に穿孔した板状木製品(図版46-10)、3号墓から柄鏡(図版46-11)

第1表 木製品一覧表

出土遺構	層位	種類	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	備考	插図番号	図版番号
SD101	3層	木簡状木製品	10.8	1.8	0.3	端部側面に切り込みが入る	39-5	43-3
SD101	3層	板状木製品	17.7	1.9	0.5	両端に加工痕		43-4
SD101	3層	板状木製品	14.8	2.6	0.4	片側端部折損		43-5
SD101	3層	板状木製品	16.0	4.2	0.8			43-6
SD172	3層	板状木製品	23.1	11.0	0.6	4ヶ所に穿孔		44-1
SD101	3層	板状木製品	19.8	9.3	0.3			44-2
SD172	3層	板状木製品	9.0	6.2	0.5	数条の切り込みが入る		44-3
SD101	3層	下駄	20.4	10.1	4.0			44-4
SD101	2層	下駄	19.5	10.0	2.5	前部欠損		44-5
SD101	3層	曲物底板	9.3		0.5			45-1
SD101	3層	曲物底板	10.5		0.6			45-2
SD172	3層	曲物底板	10.8		1.1	一部欠損		45-3
SD101	3層	棒状木製品	26.6		1.0	片側端部が炭化		45-4
SD101	3層	棒状木製品	22.2		4.2	両端が丸くなる		45-5
SD151	3層	杭	22.8		2.7			45-6
SD101	2層	杭	47.0		6.4	先端に加工痕		45-7
SD101	3層	杭	35.0		2.9			45-8
SD101	2層	杭	31.8		3.2	先端に加工痕		45-9
SD101	3層	杭	30.0		3.3			45-10
SD101	3層	杭	19.1		3.0	先端部が炭化		45-11
SD101	2層	笠塔婆	20.4	1.7	0.3	「(梵字)南無大[]」	40-1	
SD101	2層	笠塔婆	21.6	1.7	0.2	「□大日如来」	40-2	46-1
SD101	2層	笠塔婆	22.3	1.7	0.2	「□南无大日□來」	40-3	46-2
SD101	2層	笠塔婆	15.5	1.4	0.2	「(梵字)大日如来」	40-4	46-3
SD101	2層	笠塔婆	19.8	1.7	0.2	「□大日如来」	40-5	46-4
SD101	2層	笠塔婆	21.9	1.5	0.2	梵字の連続	40-6	46-5
SD101	2層	笠塔婆	9.8	1.6	0.2	梵字の連続	40-7	46-6
SD101	3層	笠塔婆	7.9, 9.7	1.6	0.2	「□南无大日[]」	40-8	46-7
2号墓		板状木製品	12.0	2.6	0.7	両端に穿孔		46-10
3号墓		柄鏡	8.8		1.0			46-11

が出土している。

(6) 金属製品 (第41~44図 図版46~50)

中国銭76枚と近世銭27枚がある。

S D101の底から、さしの状態で出土した中国銭の内訳は明代19枚、北宋代51枚、金代1枚、南宋代2枚、唐代2枚、不明1枚である。鋳造年代が最も新しい銭は永楽通寶で7枚ある(第3表)。

近世銭は大半が近世墓内から出土したものである。内訳は寛永通寶が24枚、仙臺通寶2枚、不明1枚である。墓内出土のものはすべて新寛永だが、造構外出土のものに古寛永が3点みられる(第4表)。

また、近世の2号墓から金箔塗の簪、煙管吸口が出土している(第2表)。

第2表 金属製品一覧表

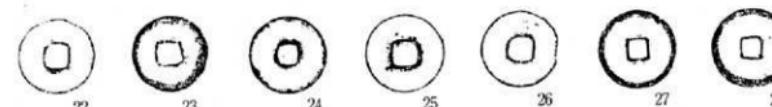
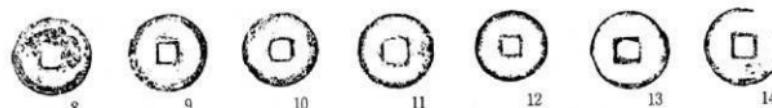
出土遺構	層位	種類	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	備考	插図番号	図版番号
2号墓		簪	17.7	0.9	0.2	金箔		46-8
3号墓		煙管吸口	6.3		1.8	金箔		46-9

2、古代 (第45図 図版51)

土師器、須恵器ともに破片が多く図示できるものは少ない。図示できるものは12点ある(第5表)。

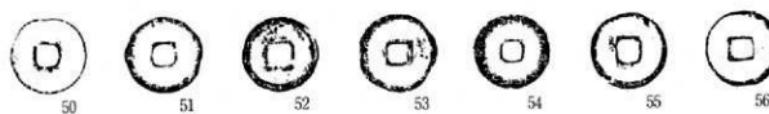
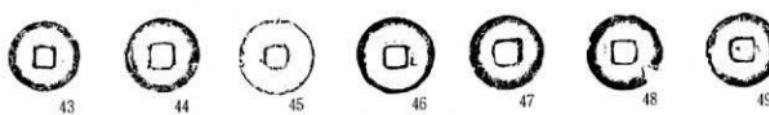
第5表 土師器・須恵器一覧表

出土遺構	層位	種類	器種	口径cm	底径cm	器高cm	調 整		備考	插図番号	図版番号
							内	外			
SI125ピット	埋 土	土師器	杯	(10.4)	(6.6)	3.3	体部下半ヘラナア、底部手持ちヘラ削り	内黒	45-1	51-1	
SI125貯藏穴	埋 土	土師器	杯	13.0	6.8	4.2	体部下半ヘラ磨き、底部手持ちヘラ削り	内黒	45-2	51-2	
SI125	床 面	土師器	高杯			6.4	外面ハケ目、台部内面ナデのちヘラ磨き	内黒	45-3	51-3	
SI125	埋 土	土師器	鉢	(17.0)	(8.9)	8.0	口縁部ヘラ磨き、体部ハケ目のちヘラ削り、底部手持ちヘラ削り	内黒	45-4	51-4	
SI125貯藏穴	埋 土	土師器	壺	(20.8)			口縁部横ナデ、体部内外面ハケ目		45-5		
SK146	埋 土	土師器	鉢	(13.8)	(3.4)	9.0	内外面ヘラ削り		45-6	51-5	
SI150	埋 土	須恵器	杯			(7.0)	底部回転糸切りのち回転ヘラ削り		45-7		
SI150	埋 土	土師器	壺	(23.4)			ロクロ		45-8		
SI150ピット	埋 土	土師器	壺	(21.4)			ロクロ		45-9		
SI160ピット	埋 土	土師器	杯	(13.4)			体部下半ヘラ削り	内黒	45-10	51-6	
SI160ピット	埋 土	土師器	高杯			(8.4)	台部内外面ハケ目		45-11	51-7	
SI160貯藏穴	床 面	土師器	壺	17.2	8.2	18.2	口縁部横ナデのちハケ目、体部内外面ハケ目、底部手持ちヘラ削り	底部に擦痕あり	45-12	51-8	



0 5 cm

第41図 仙人西遺跡出土中国錢拓影図



0 5 cm

第42図 仙人西遺跡出土中国錢拓影図



0 5 cm

第43図 仙人西遺跡出土中国錢拓影図



0 5 cm

第44図 仙人西遺跡出土古錢拓影図

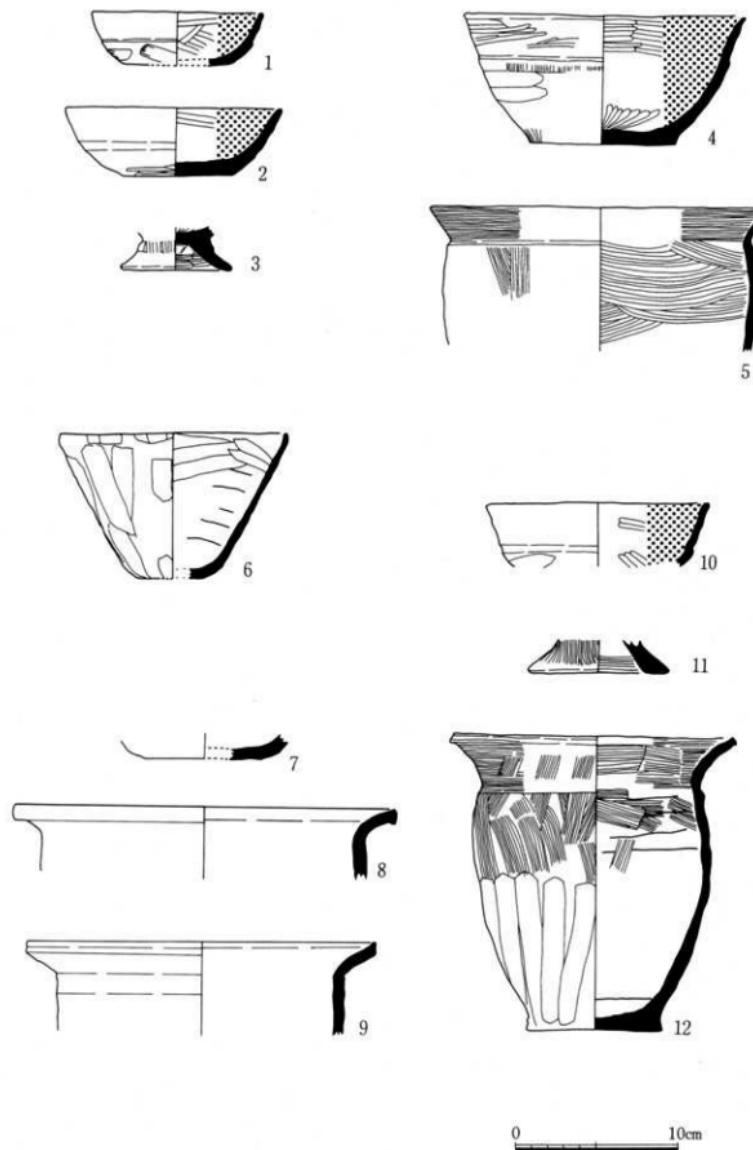
第3表 古錢一覽表(1)

No	錢文		国名	初鑄年	法量			備考 (図版47~49)
	面	背			外径cm	内径cm	厚さmm	
1	熙寧元寶		北宋	1068	2.36	1.91	1.2	3.20 真書
2	天聖元寶		北宋	1023	2.49	2.03	1.1	3.59 真書
3	元豐通寶		北宋	1078	2.26	1.93	1.1	2.54 行書
4	元豐通寶		北宋	1078	2.37	1.85	1.3	2.70 篆書
5	元豐通寶		北宋	1078	2.44	1.78	1.2	3.51 行書
6	皇宋通寶		北宋	1037	2.37	1.96	1.1	2.90 真書
7	永樂通寶		明	1408	2.46	2.10	1.3	3.98 真書
8	皇宋通寶		北宋	1037	2.52	1.97	1.2	4.24 真書
9	永樂通寶		明	1408	2.48	2.09	1.3	3.67 真書
10	熙寧元寶		北宋	1068	2.41	1.96	1.6	4.49 真書
11	皇宋通寶		北宋	1037	2.43	1.99	1.2	3.04 真書
12	洪武通寶		明	1368	2.29	1.85	1.6	3.57 無背・マ頭單点通
13	大觀通寶		北宋	1107	2.49	2.12	1.4	3.88 行書
14	正隆元寶		金	1157	2.50	2.15	1.5	2.94 背一錢
15	永樂通寶		明	1408	2.52	2.07	1.3	4.83 篆書
16	元符通寶		北宋	1098	2.40	1.96	1.2	3.55 行書
17	洪武通寶		明	1368	2.26	1.77	1.6	3.64 背一錢
18	熙寧元寶		北宋	1068	2.40	1.85	1.3	3.64 篆書
19	皇宋通寶		北宋	1037	2.43	1.76	1.1	3.57 真書
20	淳熙元寶		南宋	1174	2.40	1.86	1.1	2.62 真書・背十三
21	洪武通寶		明	1368	2.30	1.86	1.4	3.21 無背・マ頭單点通
22	熙寧元寶		北宋	1068	2.40	2.02	1.2	3.05 篆書
23	皇宋通寶		北宋	1037	2.43	1.95	1.3	3.18 篆書
24	至道元寶		北宋	995	2.45	1.85	1.0	3.40 草書
25	皇宋通寶		北宋	1037	2.46	1.99	1.1	3.53 篆書
26	永樂通寶		明	1408	2.48	2.12	1.2	2.96 無背・マ頭單点通
27	洪武通寶		明	1368	2.35	2.04	1.2	2.87 無背・マ頭單点通
28	永樂通寶		明	1408	2.52	2.08	1.3	3.78 無背・マ頭重点通
29	洪武通寶		明	1368	2.46	2.06	1.2	3.40 無背・マ頭單点通
30	洪武通寶		明	1368	2.23	1.90	1.4	3.20 無背・マ頭單点通
31	咸平元寶		北宋	998	2.50	1.87	1.1	3.47 真書
32	皇宋通寶		北宋	1037	2.45	2.01	1.1	3.29 篆書
33	至和元寶		北宋	1054	2.44	1.89	1.1	2.72 篆書
34	開元通寶		唐	621	2.42	1.95	1.1	2.29 真書
35	永樂通寶		明	1408	2.49	2.07	1.2	3.47 篆書
36	祥符元寶		北宋	1009	2.46	1.80	1.0	3.12 篆書
37	洪武通寶		明	1368	2.25	1.78	1.4	3.36 無背・マ頭單点通
38	太平通寶		北宋	976	2.41	1.92	1.2	3.25 無背・マ頭單点通
39	景德元寶		北宋	1004	2.46	2.01	1.0	2.64 真書
40	皇宋通寶		北宋	1037	2.40	1.85	1.0	3.17 篆書
41	元祐通寶		北宋	1086	2.47	1.80	1.0	3.19 行書
42	紹聖元寶		北宋	1094	2.38	1.75	1.3	3.67 篆書
43	洪武通寶		明	1368	2.28	1.84	1.3	3.06 無背・マ頭單点通
44	紹聖元寶 (不明)		北宋	1094	2.41	1.95	1.4	3.47 篆書
45	永樂通寶		明	1408	2.37	1.77	1.3	3.66 篆書
46	皇宋通寶		北宋	1037	2.39	1.88	1.0	2.87 篆書
47	淳熙元寶		南宋	1174	2.41	1.85	1.0	2.44 真書・背月星
48	紹聖元寶		北宋	1094	2.37	1.87	1.3	2.81 真書
49	皇宋通寶		北宋	1037	2.43	1.99	1.1	3.24 真書
50	景德元寶		北宋	1004	2.49	2.05	1.2	3.38 真書
51	熙寧元寶		北宋	1068	2.40	2.02	1.4	3.78 真書
52	政和通寶		北宋	1111	2.52	2.07	1.4	4.24 篆書
53								

No	錢文		国名	初鑄年	法量				備考 (図版47~49)
	面	背			外径cm	内径cm	厚さmm	重さg	
54	祥符元寶		北宋	1009	2.46	1.95	1.1	3.08	
55	政和通寶		北宋	1111	2.46	2.10	1.1	2.76	分楷
56	政和通寶		北宋	1111	4.45	2.11	1.4	3.58	分楷
57	淳熙元寶		北宋	1068	2.45	1.98	1.1	3.27	篆書
58	開元通寶		唐	621	2.40	2.10	1.2	3.22	
59	元豐通寶		北宋	1078	2.45	1.88	1.3	3.83	篆書
60	元祐通寶		北宋	1086	2.40	1.95	1.3	3.79	篆書
61	洪武通寶		明	1368	2.31	1.97	2.1	4.20	無背・コ頭單点通
62	皇宋通寶		北宋	1038	2.50	2.03	1.1	3.35	篆書
63	宣和通寶		北宋	1119	2.37	2.04	1.2	2.70	篆書
64	元豐通寶		北宋	1078	2.46	1.93	1.2	2.99	篆書
65	景祐元寶		北宋	1034	2.51	1.90	1.0	2.51	真書
66	元祐通寶		北宋	1086	2.36	1.82	1.3	3.10	行書
67	洪武通寶		明	1368	2.28	1.90	1.9	4.34	無背・マ頭單点通
68	元祐通寶		北宋	1086	2.47	1.70	1.1	3.46	篆書
69	洪武通寶		明	1368	2.32	1.85	1.6	3.17	無背・マ頭單点通
70	洪武通寶		明	1368	2.03	1.06	2.3	4.01	背一錢・コ頭單点通
71	天聖元寶		北宋	1023	2.47	2.05	1.3	3.47	篆書
72	元豐通寶		北宋	1078	2.37	1.75	1.2	3.23	行書
73	熙寧元寶		北宋	1068	2.42	1.86	1.1	3.23	真書
74	元豐通寶		北宋	1078	2.48	1.87	1.2	4.04	行書
75	元豐通寶		北宋	1078	2.45	1.81	1.2	3.67	行書
76	景祐元寶		北宋	1034	2.50	1.90	1.0	3.19	篆書

第4表 古銭一覧表(2)

No	錢文		外径cm	内径cm	厚さmm	重さg	出土遺構	備考 (第44図・図版50)	
	面	背							
77	寛永通寶		2.47	1.92	1.5	3.68	3号墓	新寛永	
78	寛永通寶		2.53	1.97	1.5	3.41	3号墓	新寛永	
79	寛永通寶		2.24	1.76	1.1	2.55	3号墓	新寛永	
80	寛永通寶		2.35	1.89	1.1	2.95	3号墓	新寛永	
81	寛永通寶		2.31	1.89	1.5	(1.00)	3号墓	新寛永、4/5残存	
82	寛永通寶		2.35	1.89	1.0	2.40	3号墓	新寛永	
83	寛永通寶		2.28	1.87	1.2	2.53	3号墓	新寛永	
84	寛永通寶		2.30	1.82	1.2	2.54	3号墓	新寛永	
85	寛永通寶		2.35	1.81	1.0	2.53	3号墓	新寛永	
86	寛永通寶		2.31	1.74	1.4	2.17	3号墓	新寛永	
87	寛永通寶		2.29	1.90	1.1	2.70		新寛永	
88	寛永通寶		2.31	1.83	1.1	2.30		新寛永	
89	寛永通寶		2.41	2.00	1.0	2.21		古寛永	
90	寛永通寶		2.30	1.81	1.0	2.41		新寛永	
91	寛永通寶		2.27	1.88	1.8	1.69		新寛永	
92	寛永通寶				1.5	(0.32)		新寛永、1/4残存	
93	寛永通寶		2.50	1.96	1.1	2.81	3号墓	新寛永	
94	寛永通寶		2.34	1.88	1.2	2.75	3号墓	新寛永	
95	寛永通寶		2.32	1.90	1.0	2.34	3号墓	新寛永	
96	寛永通寶		2.32	1.85	1.1	2.59	3号墓	新寛永	
97	寛永通寶		2.43	1.95	(2.3)	(3.91)		古寛永(不明)枚、2枚が重なっている	
98	寛永通寶		2.53	1.98	1.3	2.77		新寛永2期	
99	寛永通寶		2.30	1.84	1.3	1.40		新寛永	
100	寛永通寶		2.28	1.88	1.1	1.37		古寛永	
101	(不明)		2.20	1.89	1.7	1.69		鉄錢	
102	(不明)				1.5	(0.81)		鉄錢、1/3残存	



第45図 SII25・SK146・SII150・SII160出土遺物実測図

3、縄文・弥生時代 (第46・47図 図版52~55)

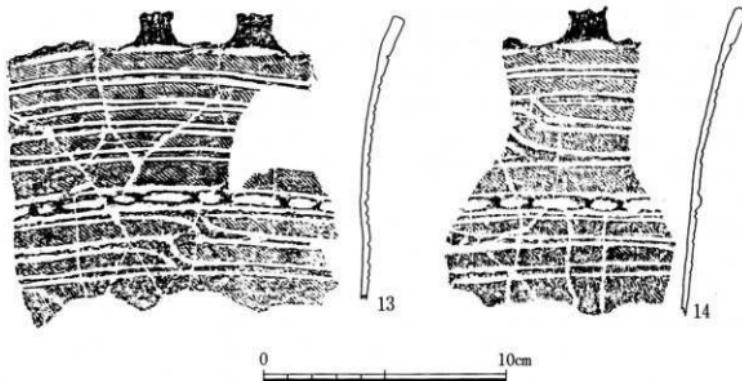
破片が多く、図示できるものは少ない。第46図1~6は土壌跡SK121、7~10は不明遺構SX144、11は土壌跡SK184、12は土壌跡SK194、第47図13・14は竪穴住居跡SI215から出土している。

このうち1~5は弥生土器の破片である。装飾文様は、平行沈線文と波状文で、文様中に縄文が加えられたり、一部がていねいに磨かれる磨消縄文手法がみられる。1は壺の肩部から体部の破片で、外面は朱塗り、肩部内面は刷毛目状に横位に調整される。2は無文帶の口縁部破片である。3の外面にも朱が塗られる。東北中部の三王Ⅲ層式土器、東北北部の二枚橋式土器に相当する一群である。

6~11は縄文後期後葉の破片で、全体的に瘤状小突起が貼付される「瘤付土器」が多いのが特徴である。9・10は体部に沈線で斜格子目文が描かれる。12~14は口縁部に突起をもつ深鉢で、13・14は胴部に入組文系文様を施す同一個体である。瘤付土器と呼ばれる土器型式としては、東北中部では金剛寺式土器、東北北部では十腰内4・5群土器がある。



第46図 SK121・SX144・SK184・SK194出土遺物実測図



第47図 SI 215出土遺物実測図

V、まとめ

仙人西遺跡の平成7・8年度の2カ年にわたる発掘調査で発見した遺構には、堀跡2条、掘立柱建物跡9棟、柱列跡4条、堅穴住居跡6棟、井戸跡3基、土壙跡77基、溝跡13条、近世墓5基、その他の中遺構9、柱穴群多数がある。ここでは、はじめに発見遺構の形態や構造、出土遺物等から、各遺構群のグループ化とその帰属年代に検討を加え、次に析出されたグループのなかから、掘立柱建物群と同時代に属する遺構群について改めて検討を行う。

1、遺構と遺物

(1) 堀 跡

堀跡 S D101（東辺部は S D172）は段丘崖から約20mセットバックした平坦面に、一辺（北辺長）62.1mの規模で方形状に掘削される堀跡で、護岸施設は認められない。ほかに東辺長43m以上、西辺長8.5m以上の堀の一部を検出しており、現地形観察と合わせると形態は方形を呈すると判断できる。堀の断面は両岸が急峻なV字型の薬研堀ないし箱薬研状を呈する北辺部に対して、東・西辺とも仕切り遺構より南は浅くなり堀底の広い箱堀となる。東西の堀の中に構えられた仕切り遺構は、各隅から南6~7mのところにあり、平面的には東西対称の位置にあるといえる。堀跡内外周に土塁及びその痕跡等は認められなかった。これは、堀の中の埋土堆積状況がほぼ均一的であることからも首肯でき、また、堀岸に設けられたS A246の存在からも堀内部にはなかったといえる。

堀内からは埋土2・3層を中心に土師器、陶磁器、漆器椀、さし錢、笹塔婆などの木製品が出土している。土師器は破片が多いが、器種は香炉1点を除くとほかは杯である。口径、底径を推定できる資料に基づくと、口径では13.0~13.4cmと13.8~14.4cmの2種に、底径では6.2cm以下~5.0cmと6.6cm以上~9.6cmの2種に分かれる。胎土は微砂質で、内外燃された黒灰色を呈するものが多い。ロクロ調整で、底部は厚い器壁の糸切り無調整で平高台状につくる。陶磁器には中国産と国産がある。前者には青磁・白磁、後者には陶器・磁器がある。青磁は外表面に貫入が認められる碗体部片と盤高台部破片であり、削り出し高台の白磁皿とともに15世紀代のものである。なお、堀の埋土中からほかに

白磁碗1点が出土しているが、これは12世紀後半代の大型の玉縁が付くIV類碗である。また同層中からは15世紀代の国産陶器の古瀬戸瓶子破片が共存し、中国陶磁器の年代観と一致する。ほかに埋土上層の1層中からは磁器である肥前産の染付碗、小鉢、古伊万里小杯などが出土しているが、すべて17世紀以降に属し、上層の埋没過程で混入したものと考えられる。堀底からは、さしの状態で76枚の中国錢が出土している。唐代の開元通宝（初鑄年621年）から明代の永樂通宝（初鑄年1,408年）まで24種類の錢文がある。

以上、堀跡と実年代を推定できる資料を取り上げて來たが、最古の白磁IV類碗は、伝世された可能性がある。土師器の形態、法量からみた年代は15世紀代とする他の陶磁器類の年代観とも矛盾しない。堀の掘削後、ほどなくして中国錢をさしの状態で埋納し、以後、生活や宗教に関わる文物を順次廃棄していったと判断される。

堀跡SD155は、SD101の北辺中央付近から北に23m直線的に伸びながら段丘崖を貫き旧北上川に開口する堀で、堀底は平坦な箱堀となる。SD101との先後関係は不明だが、SD155堀が先に埋没している。またSD155は段丘崖に平行する堀跡SD159を破壊して掘削されている。堀の走向はSD101が北辺部南岸で磁北に対しE $5^{\circ} 20' S$ （座標軸E $2^{\circ} 00' N$ ）、SD155が東岸で磁北に対しN $10^{\circ} 50' E$ （座標軸N $3^{\circ} 30' E$ ）それぞれ偏する。

（2）掘立柱建物跡

堀跡SD101に方形に区画された内部から9棟の掘立柱建物跡が発見されている。堀に画される南半部は発掘区外に延びるために、全体像は不明である。建物相互の重複関係、主軸方位、柱間寸法、掘り方の掘削方法及び埋土の特徴から2グループに分かれる。

Iグループは、東西棟のSB205、206を南北に並列させ、その東側に東西棟SB233、SB234を配する。SB233とSB234はほぼ同一位置で重複する。他の遺構群との関係から、Iグループは方形堀と直接的には関わらないと判断される。

IIグループは、東西棟SB197を中心、西に方二間堂SB165、東前方に南北棟SB232、東西棟SB235を配する。東前方の2棟は建物の一部が重複する。なお、個々のデータについては第6表に座標軸に方位を換算したものとあわせて掲げてある。

（3）柱列跡

堀に方形に区画された内部から4条発見された。すべて掘立柱建物の分類のIIグループに属する。柱列跡SA246は堀跡SD101東辺部仕切り遺構の両岸に沿うかたちで、南北方向にある階段施設に連する遺構である。個々のデータは方位を座標軸に換算したものとあわせて第7表に掲げてある。

（4）竪穴住居跡

6棟すべて、西区段丘上から発見されたもので、出土土器と住居の形態から、a) SI120、SI215、b) SI125、SI160、c) SI150、SI213の3グループに分かれる。

a) グループは縄文時代後期後葉に属する「瘤付土器」に象徴される一群。住居はSI120の平面形は円形プランを呈し、SI215は削平が著しいが、炉跡、小柱穴の配置状況から住居と判断した。b) グループは、奈良時代の土器様式を伴出する一群で、SI125は北西壁にカマドを有する6.7×7.0mの隅丸方形、SI160は同じく北西壁中央にカマドのある6.6m方形と推定される住居である。出土土器は土師器の甕、鉢、高杯、杯があり、器種組成及び成形手法と形式から奈良時代後半に年代の中心がある。c) グループは、平安時代の土器様式を伴出する一群で、SI150は北壁中央にカマドのある4.1×3.9mの隅丸方形、SI213は住居跡全体が削平され、規模は不明だが、西壁と南壁際に周溝の一部が残る。いずれからもロクロ土師器甕、須恵器杯の破片が出土しており、ことに住居跡SI150

出土の須恵器杯底部は、糸切り後回転ヘラ削り調整が施され、平安前期の特徴をとどめるものである。

(5) 井戸跡

3基発見されているが、古代と近・現代に属するものに分かれる。古代の井戸跡は東区発見のS E 173の1基のみで、平面形は径2.3m前後の円形で、深さ1.4mある。井戸埋土3層と4層の間に厚さ6~7cmの灰白色火山灰が堆積しており、おおむね9世紀代末頃には埋没がはじまつたものと考えられる。

第6表 仙人西遺跡掘立柱建物跡規模一覧表

建物No	総長(m)		寸法(尺)		航行方位(磁北) 航行(間)×梁行(間)	航行方位(座標軸) 航行(間)×梁行(単位尺/m)	航行方位(座標軸) 航行(間)	建物方向	備考
	航行(間)	梁行(間)	航行	梁行					
SB205	8.82	3.30	29.0	11.0	E 13°45'S 5	E 6°25'S N 13°50'E	N 6°30'E	東西棟	南土廂、SB197に切られる
		1	30.4	30.0					
SB234	6.45	3.80	21.5	12.5	E 11°20'S 3	E 4°00'S N 15°05'E	N 7°45'E	東西棟	西1間に間仕切り、SB232に切られる
		2	30.0	30.4					
SB233	6.04	3.98	20.0	13.0	E 10°30'S 3	E 3°10'S N 8°25'E	N 1°05'E	東西棟	SB232に切られる
		1	30.2	30.6					
SB197	9.90	3.13	33.0	10.5	E 9°45'S 5	E 2°25'S N 9°00'E	N 1°40'E	東西棟	南北に土廂(縁)、SB205を切る
		1	30.0	30.4					
SB165	2.17	2.01	7.0	6.5	N 8°30'E 2	N 1°10'E E 7°55'S	E 0°35'S	方形	総柱建物
		2	31.0	30.9					
SB232	5.93	3.14	19.5	10.5	N 3°20'E 3	N 4°00'W E 6°30'S	E 0°50'N	南北棟	東廂、SB233・234を切る
		1	30.4	30.3					
SB235	5.89	3.80	19.5	12.5	E 6°00'S 3	E 1°40'N N 7°45'E	N 0°25'E	東西棟	
		1	30.2	30.4					
SB212		2.33		7.5	N 21°50'E (3)	N 14°30'E E 27°15'S	E 19°55'S	南北棟	
		1	30.4	31.0					
SB206	5.41	3.80	18.0	12.5	E 16°05'S 3	E 8°45'S N 18°10'E	N 10°50'E	東西棟	
		1	30.0	30.4					

第7表 仙人西遺跡柱列規模一覧表

柱列No	総長(m)		方位(磁北) 間	方位(座標軸)	柱列方向	備考
	SA246	8.08				
SA251	6.22		E 9°20'S 3	E 2°00'S	東西方向	SB206と重複
	9.86					
SA252	(9)		E 9°50'S (5)	E 2°30'S	東西方向	
	(5)					
SA253	(5)		N 9°20'E	N 2°00'E	南北方向	
	(5)					

(6) 土壙跡

発掘区全体から77基の土壙がみつかっている。形態的には、円形、楕円形、隅丸方形（長方形）と形状が一定しない不整形（不整円形、不整長方形）がある。もっとも多いのが発見遺構の約半数を占める楕円形で、円形がこれに次ぐ。不整形と隅丸方形タイプは合わせても10数例にすぎない。規模は径1m弱前後がもっと多く、他に1mを超える例が11基、2mを超える例では2基のみとなる。深さはおむね20cm～30cmと比較的浅い例が多い。もっとも深いのはSK136の60cmである。土壙からの出土遺物には、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器があり、これらは約半数の35基の土壙から出土している。このうち縄文土器のみを出土するもの16基、土師器、須恵器のみを出土するもの11基、これらが混在するもの7基である。ちなみに、堀跡埋土中から出土した陶器、陶磁器類は土壙内から出土しなかった。

SK121はやや規模の大きい不整形の土壙で、ここから外面朱彩の弥生前期の壺とともに甕などの破片が数点まとめて出土している。平行沈線文や波状文が特徴的な一群である。縄文後期後葉を中心とする土器は、SK184、SK194から出土している。また、西区段丘状にあるSK190・194・196は径1.0～1.3m、深さ0.5mと規模がほぼ同じなフ拉斯コ型土壙で、細片だがいずれからも縄文土器が出土している。

以上より、土壙群は縄文時代、弥生時代、奈良時代、平安時代に属するグループに分けられる。ただし、中世以降の土壙群を包含するかどうかは伴出遺物からみると、否定的にならざるを得ない。

(7) 溝跡

遺構は都合13条検出している。東区の3条は、掘削はていねいだが時期は不詳である。西区は10条の溝跡がある。このうちSD102・103・104・105の4条は西区西半部に重複して存在するが、時期は不詳である。掘削の幅もさまざま、深さ0.1～0.2mと浅いグループである。全長5.6m、幅0.3m、深さ0.1mのSD112及び幅0.3～0.5m、深さ0.3m、全長4.2m以上あるSD239溝も同様に時期は不詳である。SD148はSD239と似た規模の溝で、埋土中から奈良時代土器様式の土師器甕破片が出土している。

SD122・123溝は、建物跡SB205・197の北・南・西側をカギ型に囲む素掘りの溝跡で、建物の南側から西に逆L字型に折れるのがSD122、北側から西にL字型に折れるのがSD123である。SD122は奈良時代後半の住居SI125を破壊して掘削されている。配置関係や方位から前述の掘立柱建物群と対になると解される。

溝跡SD159は、西区北東寄り段丘崖縁辺にはば並行して東西方向に延びる素掘りの溝である。東は段丘東端まで延び、西端は堀跡SD155に破壊される。全長28.7m、幅0.6～0.9m、深さ0.3mあり、溝底は規則的な凹凸があり、板塀の痕跡を示すと判断した。方形堀SD101が掘削される以前の施設である。

(8) 近世墓

西区中央より西寄りの堀跡SD101北岸斜面を破壊して掘削された5基の土葬墓である。すべてに棺柩を収める。墓壙掘り方はほぼ隅丸方形で、一辺84×82cmの1号墓から1辺114×111cmの5号墓まである。3号墓と4号墓は重複し、3号墓が新しい。棺柩はいずれも天井部を欠損するが、木製の板で四壁と底部を囲んで箱状にしたいわゆる堅棺である。棺柩の大きさは、タテ×ヨコ方形で47～60cm四方である。出土遺物のほとんどは、棺内に納められたもので、古銭、人骨片、漆塗りの椀や木箱、煙管吸口、簪などがある。古銭は寛永通寶と仙臺通寶と推定されるもので、前者は新寛永3期の銭である。仙台通寶の通用期間の限定性を考慮すると、近世墓がつくられた時期は、18世紀も終末に近い。

頃と考えられる。

(9) その他の遺構

土壌状の性格不明の遺構群と土器埋設遺構 S X208、陥し穴状遺構 S X205などがある。このうち S X208からは縄文土器鉢底部破片が出土している。

2、掘立柱建物の成立と展開 (第48図)

仙人西遺跡の発見遺構のうち、掘立柱建物とこれらと組合わさる遺構群は、重複関係、主軸方位、柱間寸法、掘り方及び埋土の特徴、出土遺物等から 2 つのグループに大別でき、それはそのまま造営時期の差に置き換えられる。

(1) 1 期

すべて東西棟掘立柱建物で、S B205、S B206、S B234、S B233の 4 棟から構成され、北側段丘崖には東西方向の縁辺に沿うように壠跡 S D159がある。遺構の重複関係から 2 小期がある。建物構成は、溝跡 S D122 と S D123 に囲繞された S B205 を中核に、前面に S B206 を、東側に S B233、S B234 を配する。主殿と推定される S B205 の身舎南側には土廟が付く。また東側の 2 棟は重複し、建物方位等から S B233 が後出的である。先行する S B234 の西 1 間には間仕切りがある。

(1-a 期) 南土廟をもつ S B205 を主殿に、S B206 を前殿に、西間仕切りをもつ S B234 を東殿として 3 棟から構成される。

(1-b 期) 主殿 S B205、前殿 S B206 はそのままに、東殿 S B233 が新たに成立し、S B206 と S B233 は東西方向に直列したかたちとなり、ほぼ建物方位をそろえた東西棟 3 棟の構成となる。

1 期の建物群と段丘崖の塀との間は広い空間構成をとる。

(2) 2 期

方形居館の成立と展開期である。段丘崖から約 20m セットバックしたかたちで、一辺 62.1m の壠跡 S D101 が方形状に掘削され、さらに S D101 北辺中央付近から全長 23m の壠跡 S D155 が 1 期の壠跡 S D159 を破壊しながら北の段丘崖へまっすぐ延びる。2 期の建物グループは、この壠跡 S D101 に囲まれた中にある。

2 期のグループは東西棟 S B197、S B235、南北棟 S B232、総柱建物 S B165 の 4 棟の掘立柱建物から構成され、これに柱列跡 S A251、S A252、S A253 と階段状遺構 S A246 が伴う。遺構の重複関係から 2 小期がある。建物配置と構成は、溝に囲繞された S B197 を中核に、東側に S B232、S B235 を配するなど 1 期を基本的に踏襲する。ただし、1 期にあった前殿は廃され、同一場所に新たに目隠し塀的な柱列 S A251 が東西方向に配置される。空間をいくつかに画する施設として柱列が現れるのがこの段階の特徴である。主殿と推定される S B197 身舎の南北 2 面には桁行 4 間の土廟が付く。東側 2 棟は重複し、建物方位等から S B232 が後出的である。S B232 の身舎東側には梁行 1 間の廟が付く。また S B197 の西方 15m には小堂的な方 2 間総柱の S B165 が S B197 と北側柱筋を揃えて造営される。

(2-a 期) 南北に土廟をもつ S B197 を主殿に、東西棟 S B235 を東殿に、総柱建物 S B165 を方二間堂として 3 棟から構成される。主殿の前面には柱列 S A251 が東西方向に、これと直交するかたちで西側には柱列 S A253 が南北方向に設けられる。また壠 S D101 の東仕切り遺構の西岸付近には階段状遺構 S A246 がつくられる。1 期にくらべて柱間寸法等にややばらつきが認められるが、建物方位や柱筋の揃え方をみると、この時期が居館としてもっとも整備された段階といえる。

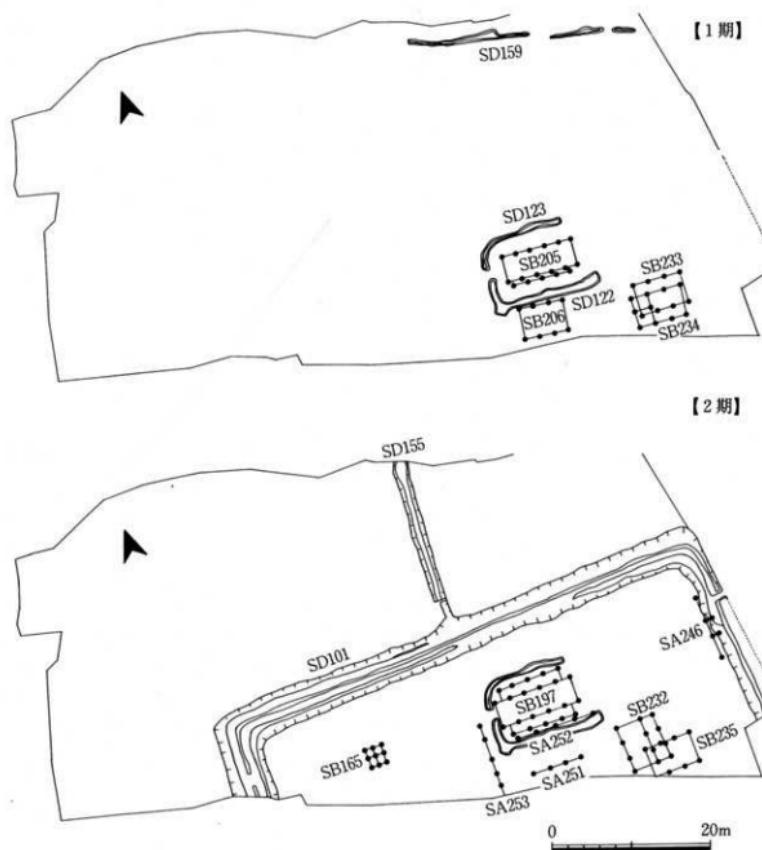
(2-b 期) 主殿 S B197 と方二間堂 S B165 はそのままに、新たに成立した東廟をもつ S B232

を東殿として3棟から構成される。前小期の柱列等には変化がないと推定されるが、新たに主殿SB197の南土席前面に柱列SA252が東西方向に近接して付設される。その接近性に若干違和感を覚えるが、あるいは南孫廟の施設としてSB197に取り付く可能性もある。

2期の堀跡のうち、SD155は早く埋没しており、SD101の方が堀深いなどにより、おそらくまで開口していたと推定できる。この前提に立てば、2-b期以前にSD155は埋没してその機能を失い、一方、SD101に付随する施設SA246は2-b期にまで存続したと考えられる。

3、仙人西遺跡発見の方形居館をめぐる二、三の問題

(1) 遺構期区分と変遷



第48図 仙人西遺跡居館遺構変遷図

はじめに方形居館の成立する2期について考え、次に1期の成立について検討する。方形に囲繞する堀埋土中から15世紀代を中心とする陶器・陶器・土師器が出土している。これらはいずれも16世紀代には降らないものである。さしの状態の中国鏡の埋納は15世紀前半代に、以後、中葉にかけて居館の生活が展開していったものと考えられる。2-b期は降っても15世紀後半代には、機能を停止したと考えられる。以上から、1期の成立は15世紀前半代を含めたそれより前となるが、その上限は不明である。ただし、14世紀に遡る遺物は1期の遺構はもとより、他の遺構群からも発見されていないので、その可能性は薄いと思う。

発掘によって、仙人西遺跡は15世紀前半代に、北上川旧河道に北面する水沢段丘縁辺部に成立・展開した居館跡であることが判明した。

1期は居館（住宅・屋敷と同義に使う）の成立期で、この段階の外縁との区画施設は、北面する自然地形の段丘崖と、この縁辺に並行して溝を掘り、板塀とする施設だけで、堀は伴わない。また、周囲の区画施設は北面する板塀だけで、発掘した範囲では西側の空間地からは何も検出されず、建物配置は主殿を中心に集合性が認められるものの、全体的には開放的印象を受ける。また内部を区画する柱列もみられない。

2期は堀を伴い、外縁と区画される方形居館の成立期である。また内部は1期にみられなかった柱列による堀や大垣などで区画される。しかし堀に付随して土塁や柵列は構築されなかった。ただしすでに述べたように、建物配置や付属棟、空間構成上からも、この時期が居館としてもっとも整備される段階である。1期から2期に移行する過程で、この居館の主が小規模な屋敷構えから方形館造営者に成長していたことを窺わせる。主殿などの建物配置は基本的に1期を踏襲するが、1期の集合型はくずれ、主殿を中心に柱列で区画して前庭部的空间を創出し、その左右に付属棟を配するなど堀の内部における宅地割りに計画性が窺われる、整然とした配置構成となる。

（2）遺跡の性格について

建築の構造を見ると、梁行1間に共通するように1・2期ともに大きな変化はなく、比較的単純、シンプルな構造である。それは建物配置においても同様で、主殿・東殿は同一場所で建て替えられている。ただし、主殿の1期土塙は、2期には南・北2面となり、塙の出も広がる。これは主殿の建物としての格が上昇していることの現われであり、それは、外縁と区画する堀の掘削に対応した現象と解される。

堀は方形プランで北辺は堀底の狭まる薬研堀状だが、東西両辺北寄りの仕切り遺構より南側は堀底が広い箱堀となり、浅くなる。仕切り遺構の土手状の構造及びその存在から、居館を囲繞する堀に用水機能を求めるることは困難である。ただし、北辺堀の下半部の礫層はグライ化しており、それは、もっとも深い北辺堀からの排水施設が認められず、雨水などで溜った水は排出されず、帶水状態にあつたことを示す。また堀に沿って居館を囲繞するような土塁や柵列も構築されておらず、2期における方形居館が軍事的意味での防御や遮断施設としての機能を堀にもたせたと考えることはきわめて困難である。むしろ、堀から得る筆者の印象は、掘削の計画性、左右対称性、仕切り遺構を境とする明確な堀底の段差、仕切り遺構自体の化粧性（装飾性）などから、堀そのものの視覚的効果を意図して造作されたものと考える。¹⁴⁾ここに居館形成における外縁との隔絶性演出のための堀の掘削の意義を認め得る。つまり、2期の居館では上述の見地から「堀」が重要な役割を果たしていることを指摘できる。

14) 大平聰「堀の系譜」(佐藤信・五味文彦編『城と館を掘る・読む—古代から中世へ—』山川出版社、1994年) P.P. 57-89. でも同様の指摘がある。

隔絶性の象徴としての堀の出現と、中心殿舎の整備が2期の特徴である。また、物理的防御施設を備えないということも、本遺跡の特徴の一つである。その意味では、居館の開放的性格は1・2期を通じて認められるが、2期に現われる隔絶性という堀にこめられた精神的意義は大きかったと考えられる。

ところで、1期にみられる建物配置は、当地方にも類例がみられ、在地有力者層（上層あるいは有力農民、さらには富裕層といわれる階層と同義に使う）の居宅と考えられる。おそらく1期の段階は、当地方の各地域で周辺田畠を中心に經營の主体者として生産活動をはじめた階層の台頭があったと考えられる。¹⁵⁾

2期になるとさらに仙人西遺跡のように、在地社会で成長を遂げ、方形居館を構える階層と、おそらくは従前の階層にとどまるグループ、さらには没落し他の階層に吸収されるグループなどに分化していくと推定される。2期の方形居館を構える階層をここでは土豪層（在地に勢力を張る有力者の総称で、「在地有力者層」よりは上位の概念）と呼ぶ。後述のように、地域の封建的支配下にあって、これら土豪層が自らの武士団を組織していたかどうかは、若干疑問のあるところである。むしろ、性格的には1期以来の有力農民層としての要素の方が強いと考えられる。そのことは居館を經營するに際しての防衛・遮断施設の欠落に端的に現われていると解される。

（3）歴史的性格に関する考察—城館ネットワーク論—

中世の当方は、奥州藤原氏滅亡後、鎌倉幕府の直轄支配地となり、御家人葛西氏の所領ともなった。葛西氏は平泉に居館を構え、氏の有力家人の柏山氏を金ヶ崎町大林城（柏山館）に、江刺氏を江刺市岩谷堂に地頭などとして配し、胆沢・江刺郡支配の拠点とした。柏山氏は胆沢地方にあって在地領主化し、譜代老臣である三田・大内・蜂谷氏などを小領主として前沢や水沢に配し、地域の分割支配を図った。¹⁶⁾

中世前期後半から中世後期になると、かつての鎌倉御家人の在地領主化が明確になり、また恩賞としての土地の領知化が進行し、小領主層の分割支配が一層細分化されてきた。15～16世紀には完全に在地領主化した柏山氏は、このような歴史的状況の中で、在地支配機構を再編しながら、胆沢地方を領国化し、一代権勢を築いた。

ほとんど独立丘陵に近い西根段丘に立地する柏山氏の居館は大林城（柏山館）と呼ばれ、西郭の松本館、東南郭の生城寺館、主郭で北郭の三郭からなる総称とされるが、1970年から95年までの都合5次にわたる発掘調査によって、主郭から東に延びる低丘陵山地地区にも遺構の存在が確認され、室野秀文氏の分類による主要郭3～4郭以上で構成される大規模な多郭構造に相当する拠点城館である。¹⁷⁾¹⁸⁾

15) 水沢市跡呂井中陣場遺跡は北面する水沢段丘崖から南へセットバックした平坦面にあり、仙人西遺跡とまったく似た立地を示す。遺構は掘立柱建物で中央部の2間×3間の東西棟を中心にして、前面に東西方向の柱列を、東側に北に1間の間仕切りのある2間×3間の南北棟を、西側に西に1間の間仕切りのある2間×3間の東西棟を配するもので、その構造と構成がよく似ている（伊藤博幸・佐久間賢はか「水沢市神明町跡呂井中陣場遺跡現地説明会資料」水沢市教育委員会、1979年）。

また平成8年度に実施された水沢市林前I遺跡は、水沢段丘沖積面高地上にあり、ここから、15世紀代の1基の井戸を含む、東西棟（1×3間）、南北棟（2×3間）の掘立柱建物跡3棟が検出されている（水沢市埋蔵文化財調査センター調査）。

16) 以下、当地方の中世の概観は伊藤博幸「五、胆江地区概観」（草間俊一・司東真雄・本堂寿一編『岩手県中世城館分布調査報告書』岩手県教育委員会、1986年）P.P. 153～172. に據る。

17) 室野秀文「中世の城館と近世初頭の城—北奥をを中心に—」（第17回岩手考古学会研究大会発表資料）岩手考古学会、1996年）P.P. 1～18.

18) 中村英俊・小山内透ほか「松本館跡発掘調査報告書—一般県道水沢水沢線改良事業に係る発掘調査—」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第256集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、1996年）P.P. 1～245.

詳細は報告書に譲るが松本館の大規模な版築工事による土塁の構築、館山地区における主要建物数棟と付属建物、井戸とを一単位とする数ブロックの宅地割りの存在など、土木工事の労働量を考えただけでも、他を凌駕する施設である。15世紀に整備され、16世紀前半に完成したと推定される。

仙人西遺跡の北西方にある白井坂I・II遺跡は水沢段丘縁辺部を利用した平坦部に立地する居館跡で、堀と土塁で区画された小規模な5つの郭からなる。内部からは土塁のほかに、柵列跡、門跡、掘立柱建物跡が発見されており、15世紀前半～16世紀代に営まれたことが判明している。郭の数からいえば多郭構造であるが、規模など全体的特徴からは前掲室野氏の分類の準拠点城館に相当する。

ここでは拠点城館及び準拠点城館を構える階層を、在地領主層と呼び、土豪層の居館と区別したい。また城館を構えることのできた在地領主層でも、準拠点城館の方がより、地域社会に密着した小領主的階層だったと考えられる。このことから、中世後期には当方において、在地領主層－在地小領主層－土豪層－在地有力者層の各階層が城館（居館・屋敷）ネットワークを形成しながら秩序付けられていたと考えることができる。ネットワークはある意味では領域内の階級的連合による百姓支配の形成であったともいえるが、ネットワークの形成過程では、土豪層と在地有力者層の階層が不安定であったことも確かである。ちなみに土豪層に比定される仙人西遺跡の方形居館主は16世紀にはここに存在しない。

土豪層のその後の軌跡は、社会的・政治的变化に対応して、より上位の階層に吸収されるか、あるいは武士化せず本質的要素である農民としての力量を發揮して、土着して在地有力農民となることなどが考えられるが、当方では方形居館の系譜は方形の水濠をめぐらす「豪族屋敷」に引き継がれるという見通しをもっており、土豪層の一部は、豪農に転換した者もいたと推定している。¹⁹⁾

以上、城館ネットワーク論を述べてきたが、まだまだ論及しなければならない課題が多い。例えば基本的な問題である、当方で方形居館がどのような系譜のもとに成立するのか、あるいは土豪層－方形居館主－の階級的横のつながり、さらには城館ネットワークの成立していく時期、等々である。これらについては稿を改めて考えてみたい。

19) 川村 均・杉沢昭太郎はか「白井坂I・II遺跡発掘調査報告書－水沢東バイパス建設事業関連遺跡発掘調査－」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第248集（（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、1996年）PP. 1～448.

20) 方形の水濠に囲繞される近世初期の豪農あるいは豪族屋敷の遺構については、さしあたっては伊藤博幸・池田明朗「十日市屋敷跡」（佐々木千鶴子・伊藤・池田はか「水沢遺跡群範囲確認調査－平成7年度発掘調査概報－」水沢市教育委員会、1996年）PP. 12～41. 参照のこと。

21) 方形居館の問題については、横口定志氏の論文を参照のこと。なお、横口氏には資料提供で大変お世話になった。記して謝意を表する。

「絵巻物に見る居館」（『生活と文化』2号、1986年）PP. 26～39.

「中世居館の再検討」（『東京考古』5、1987年）PP. 133～160.

「中世方形館を巡る諸問題」（『歴史評論』454号、1988年）PP. 46～57.

「中世東国居館とその周辺」（『日本史研究』330号、1990年）PP. 70～97.

図 版



図版1 遺跡全景（北側上空から・白線部分が平成8年度調査予定地）



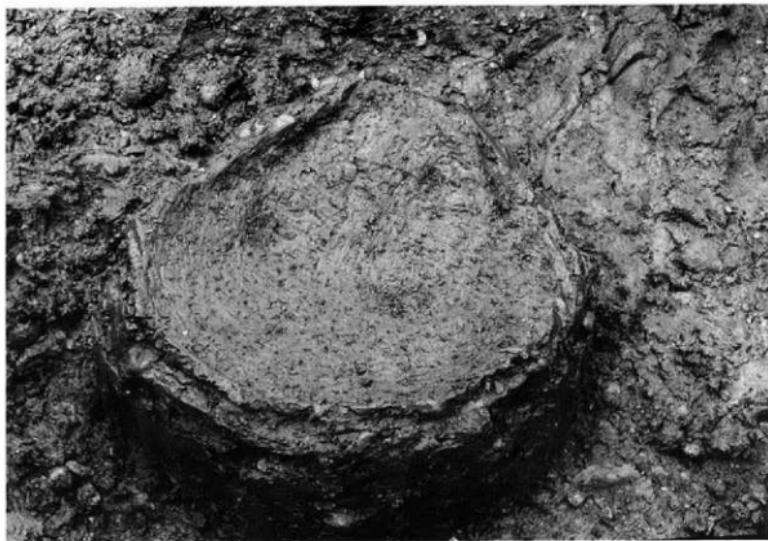
图版 2 焦作区西地区東半部全景 (空中写真)



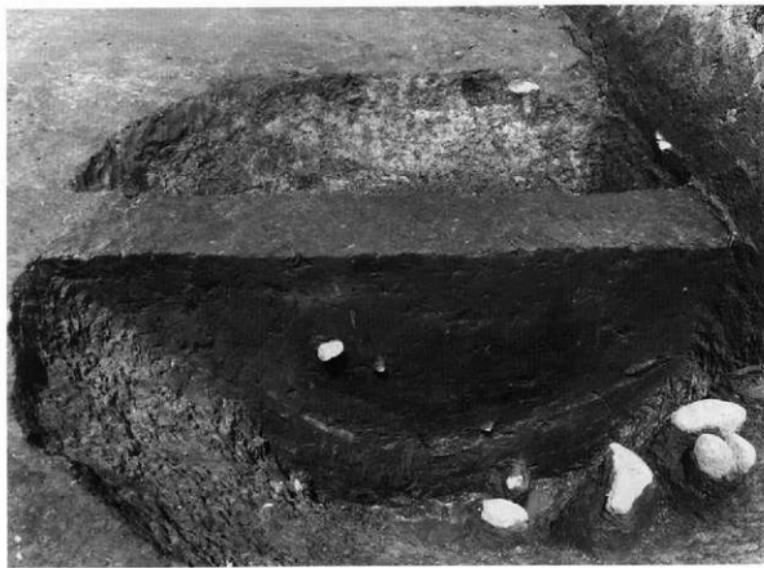
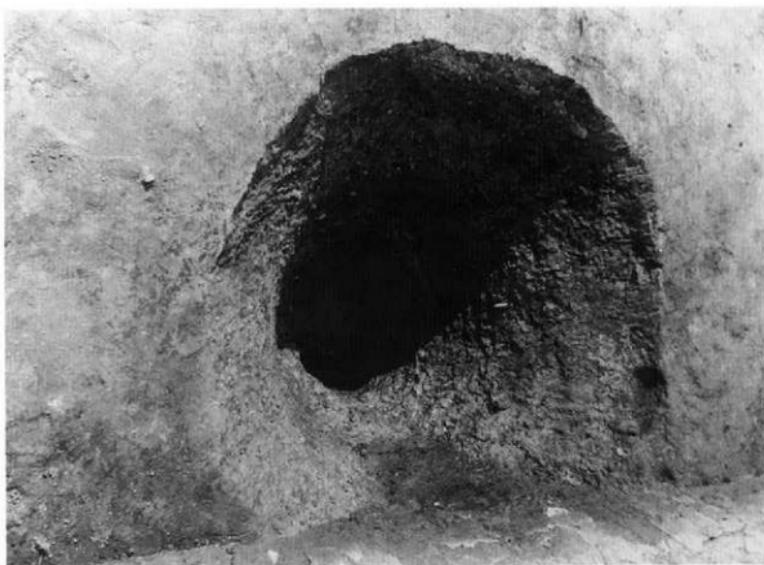
図版3 発掘区西地区全景（南東から）



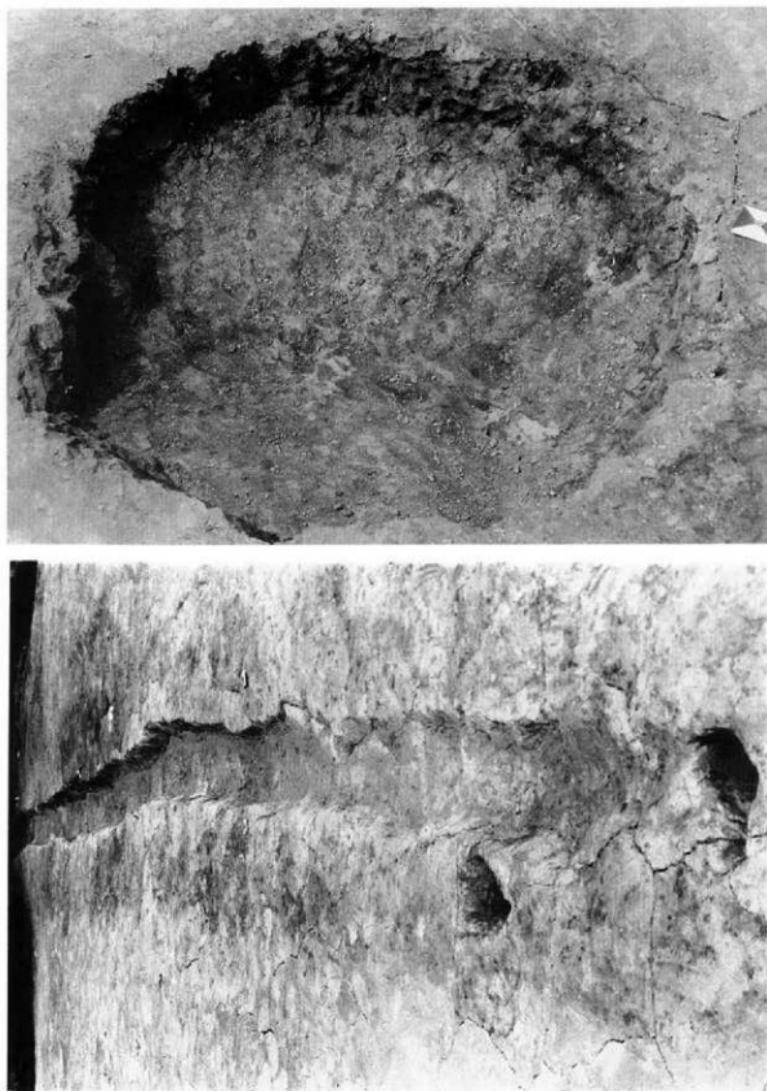
図版4 上 東地区溝跡SD172完掘状況（南東から）
下 同 埋土断面状況 （南から）



図版5 上 東地区溝跡SD172丸コ状織物出土状況
下 同 漆器出土状況



図版6 上 東地区井戸跡SE173
下 同 埋土断面状況(南面)



圖版7 上 東地区土壤跡SK201
下 東地区溝跡SD175



図版8 上 西地区堀跡SD101と東辺仕切り遺構（北東から）
下 同 と検出遺構全景
（東から）



図版9 上 堀跡SD101北辺部 (東から)
下 同 北辺部中央埋土断面状況 (同上)



図版10 上 堀跡SD101北西隅付近全景 (北西から)
下 同 北西隅近景 (同上)



図版11 上 堀跡SD101西辺部埋土断面と仕切り遺構（南西から）
下 同 北東隅全景
（北東から）



図版12 上 堀跡SD101北東隅埋土断面（南から）
下 同 東辺部東仕切り遺構（北から）



図版13 上 堀跡SD101東辺部 (南から)
下 同 東辺部埋土断面と階段状遺構 (北から)



圖版14 上 墓跡SD101出土草履
下 同 出土柄杓



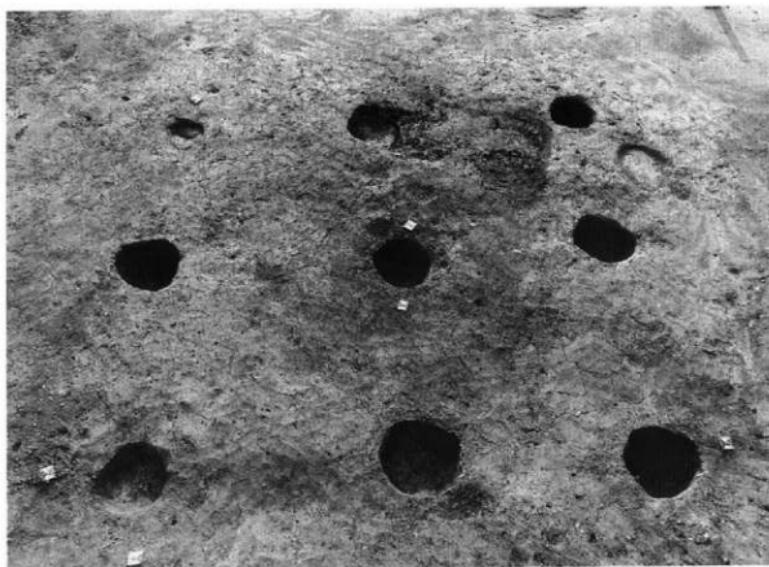
圖版15 上 墓跡SD101出土古錢
下 同 近景



图版16 上 西地区堀跡SD115埋土断面 (西面)
下 建物跡SB197・205・溝跡SD122・123 (西から)



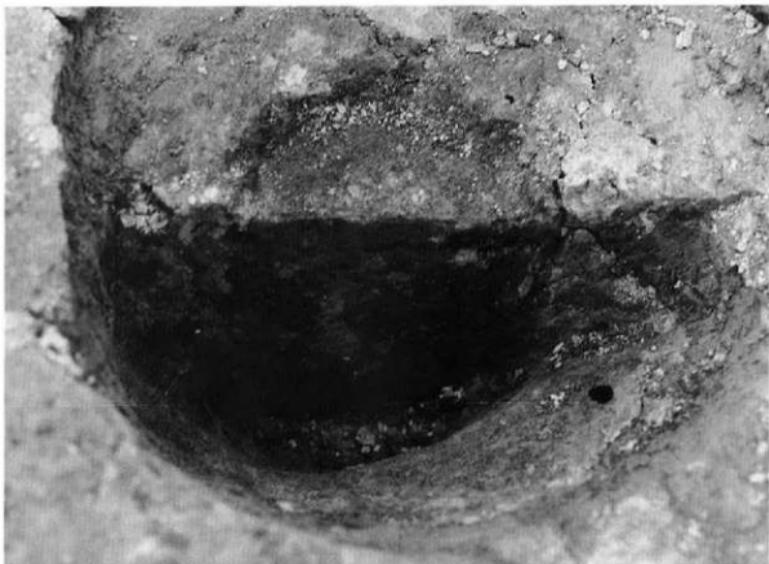
図版17 上 建物跡SB206・溝跡D122・竪穴住居跡S1125・柱列跡SA251-252 (西から)
下 建物跡SB165全景 (西から)



図版18 上 建物跡SB165

(東面)

下 建物跡SB233・234・SX144・土壤跡SK146 (北から)



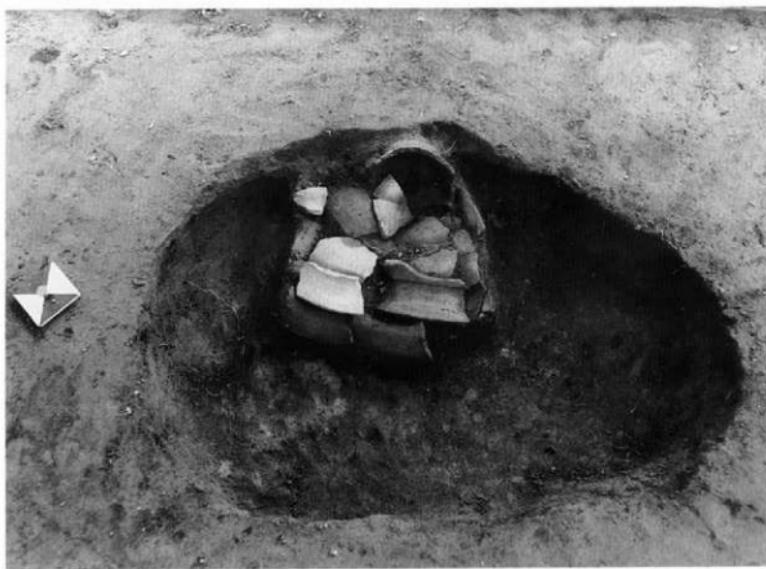
図版19 上 建物跡SB232柱掘り方（P 7）立割り状況（南面）
下 建物跡SB233柱掘り方（P 5）立割り状況（北面）



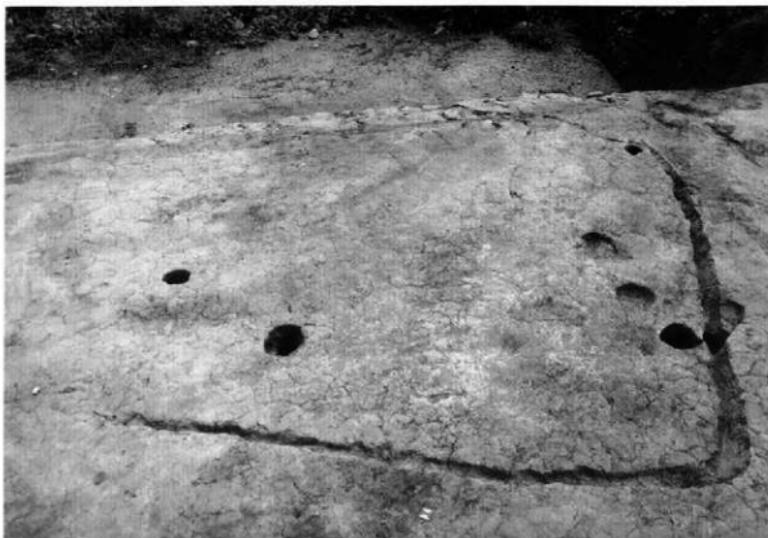
図版20 上 竪穴住居跡S I 120 (北から)
下 竪穴住居跡S I 125貯藏穴



図版21 上 竪穴住居跡 S I 150検出状況 (南東から)
下 同 完掘状況 (同上)



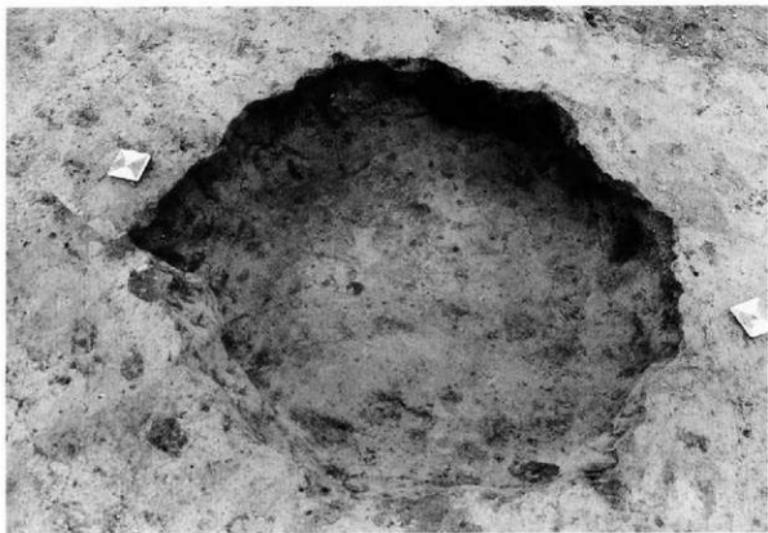
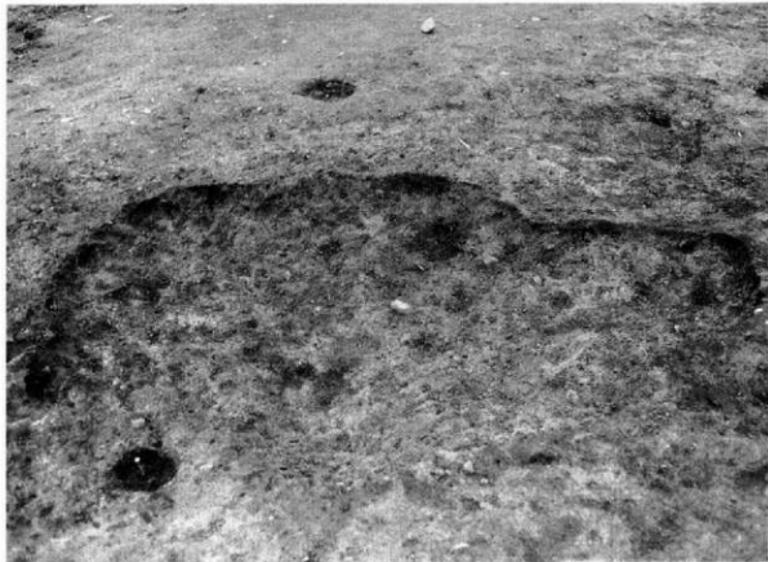
図版22 上 積穴住居跡S I 180 (南東から)
下 同 貯藏穴 (南から)



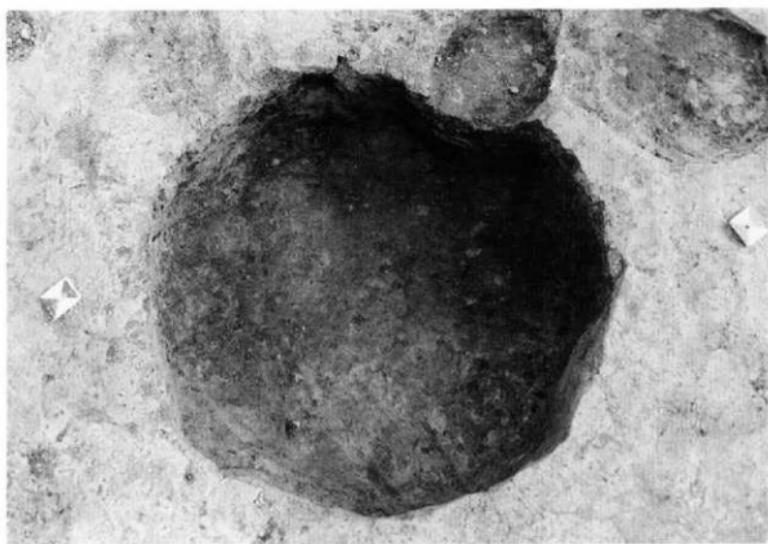
図版23 上 穂穴住居跡S 1213（西から）
下 穂穴住居跡S 1215（北から）



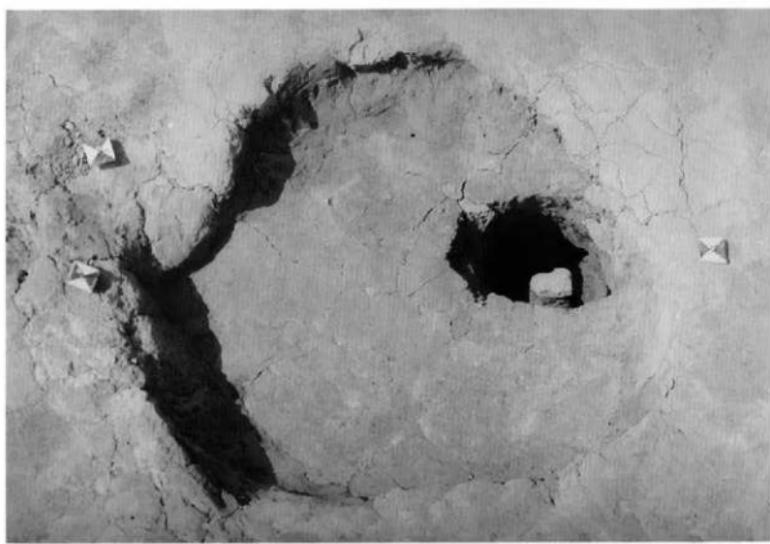
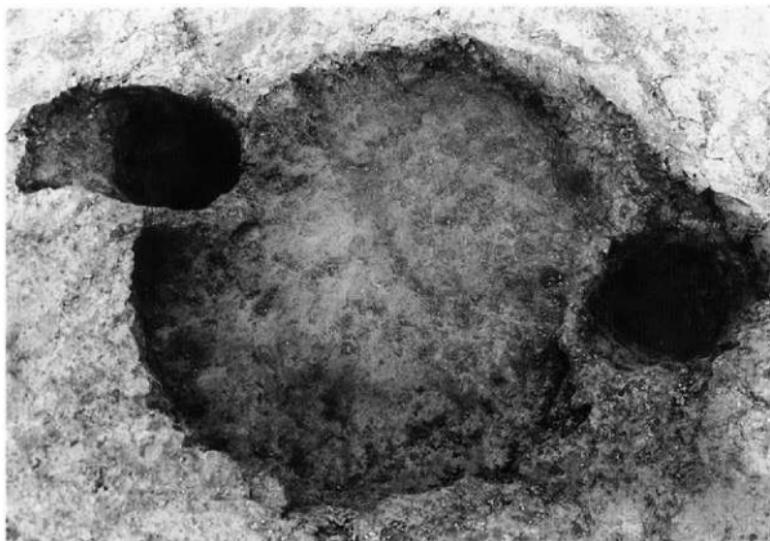
図版24 上 穹穴住居跡S I 215と土壤跡SK121-192-236（北から）
下 穹穴住居跡S I 215炉跡



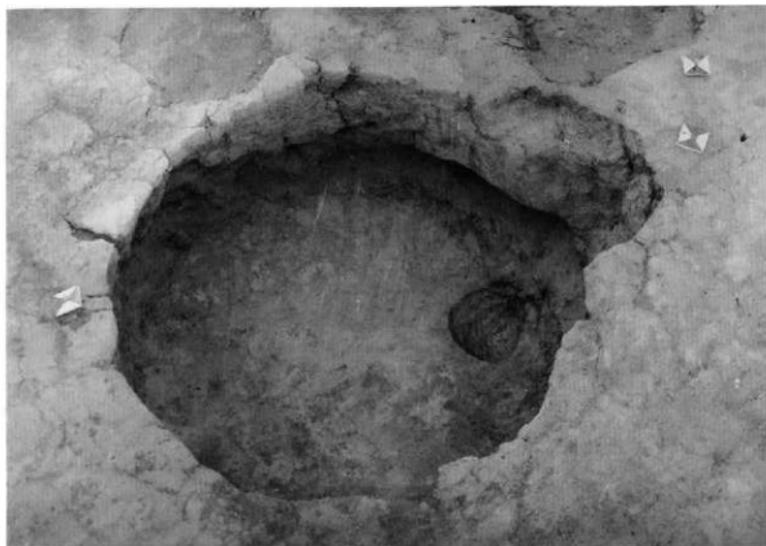
図版25 上 土壌跡SK121（南から）
下 土壌跡SK133（北西から）



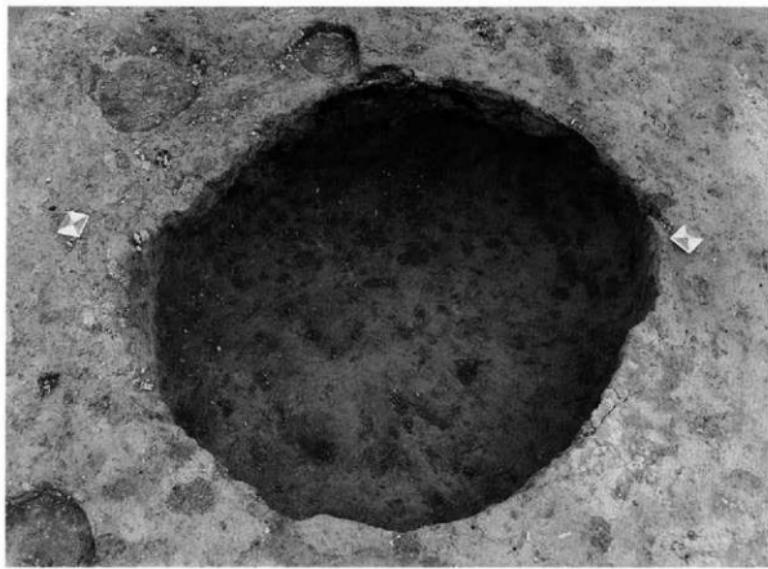
図版26 上 土壌跡SK136 (南から)
下 土壌跡SK137 (北から)



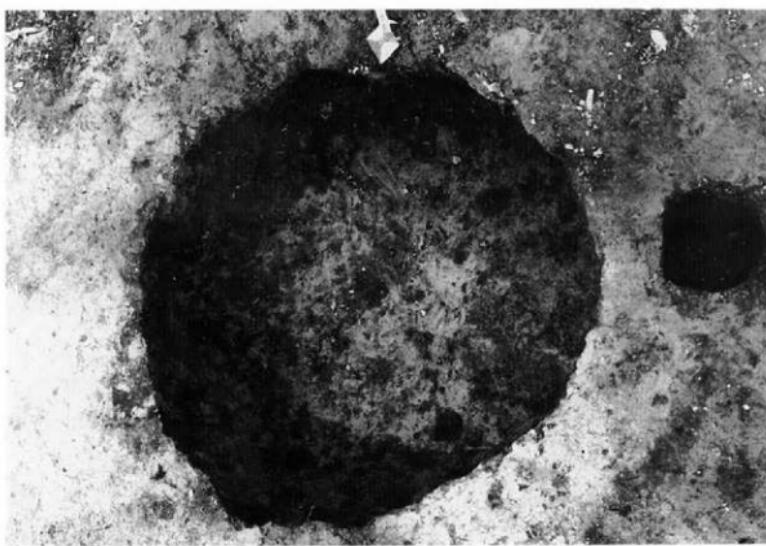
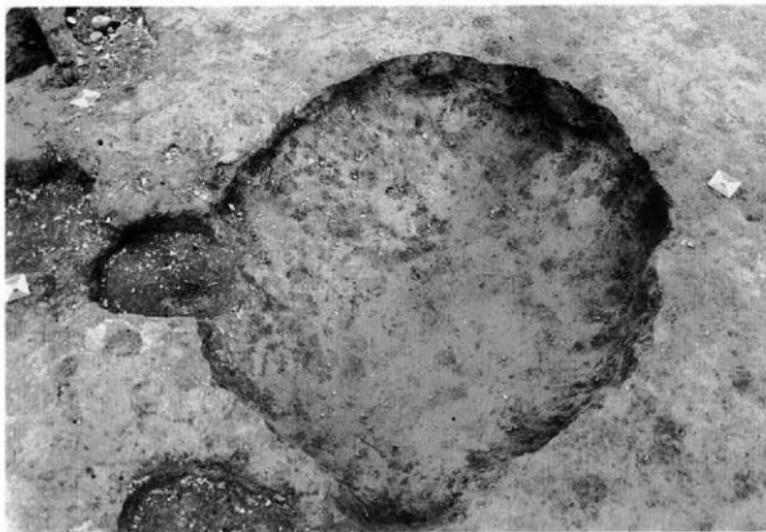
図版27 上 土壌跡SK138（南から）
下 土壌跡SK139（同上）



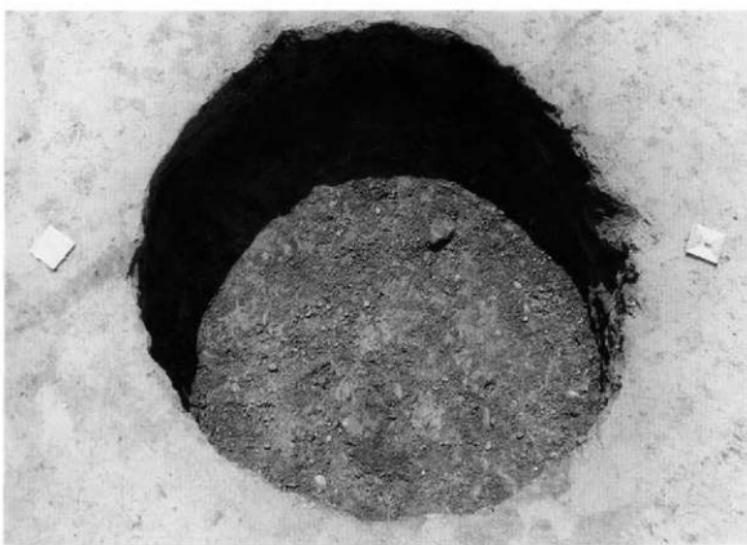
図版28 上 土壌跡SK140（北から）
下 土壌跡SK141（東から）



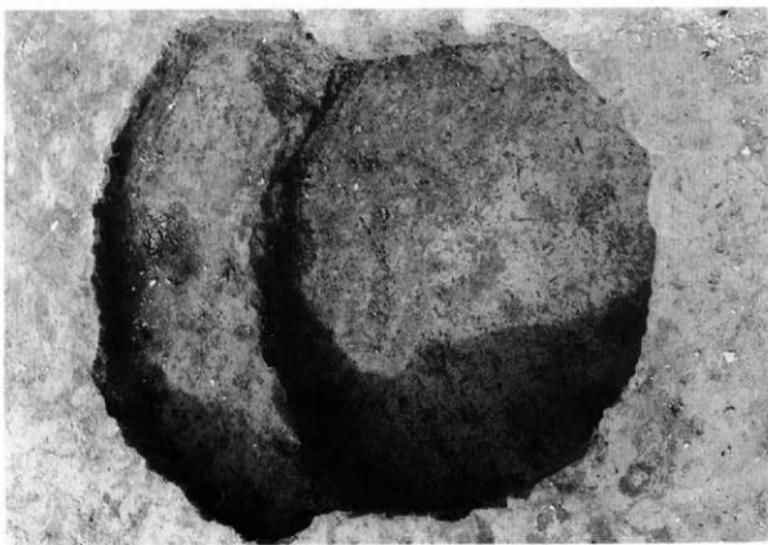
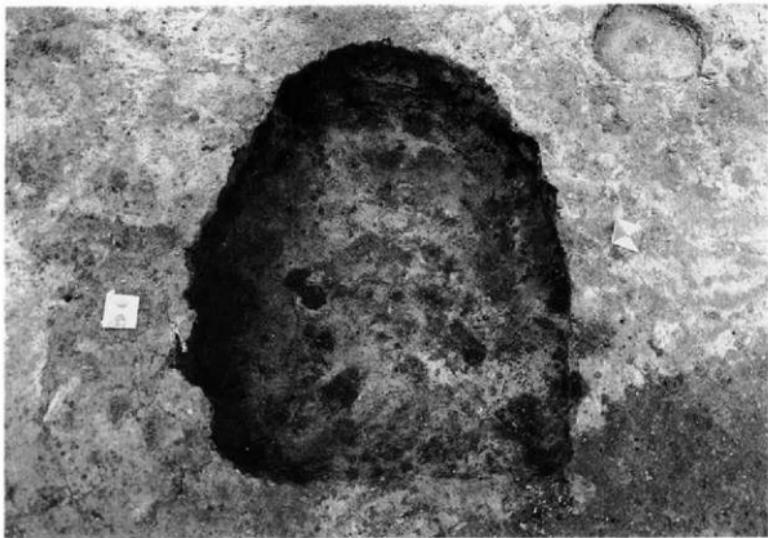
図版29 上 土壌跡SK143（南から）
下 土壌跡SK145（同上）



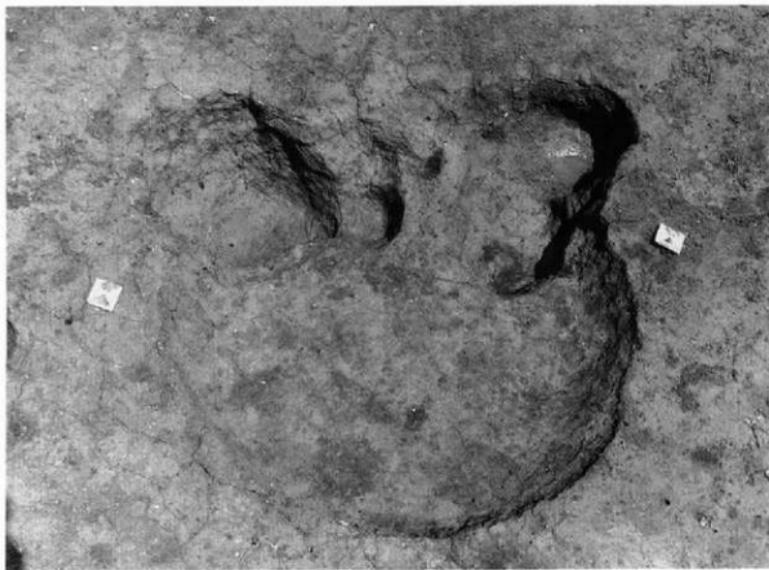
図版30 上 土壌跡SK146（南から）
下 土壌跡SK158（同上）



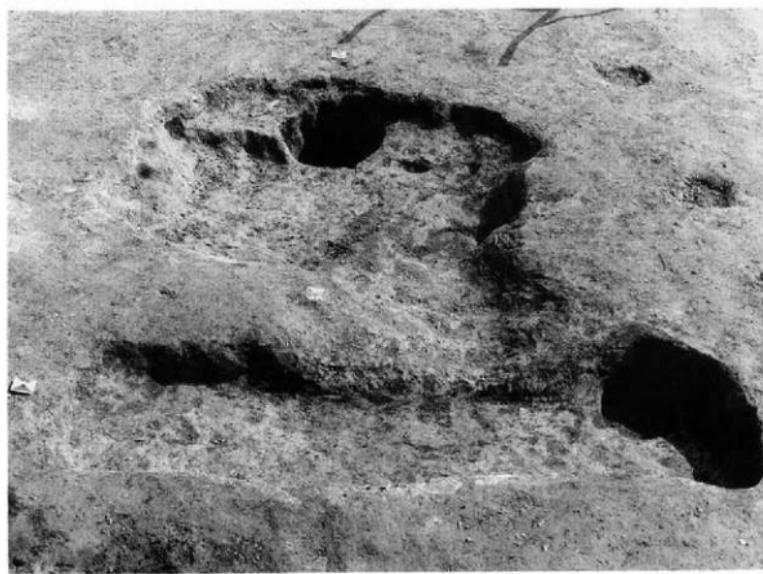
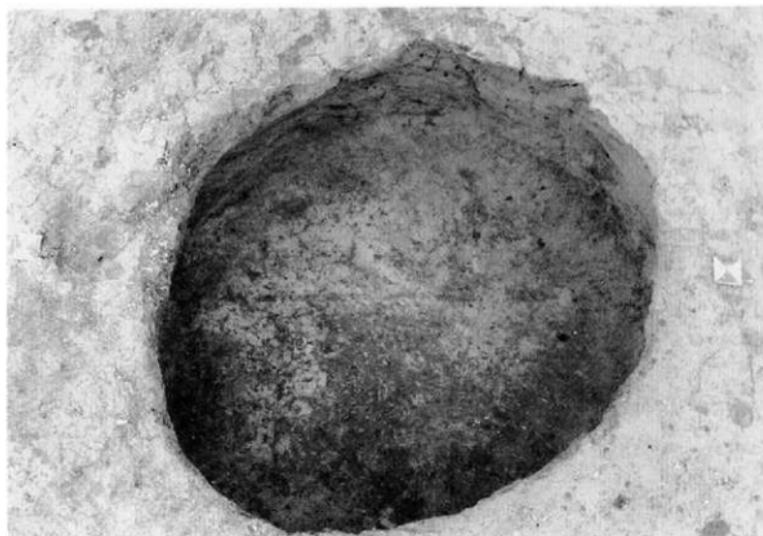
図版31 上 土壌跡SK166（東から）
下 土壌跡SK167（北から）



図版32 上 土壌跡SK183（北から）
下 土壌跡SK190（南から）



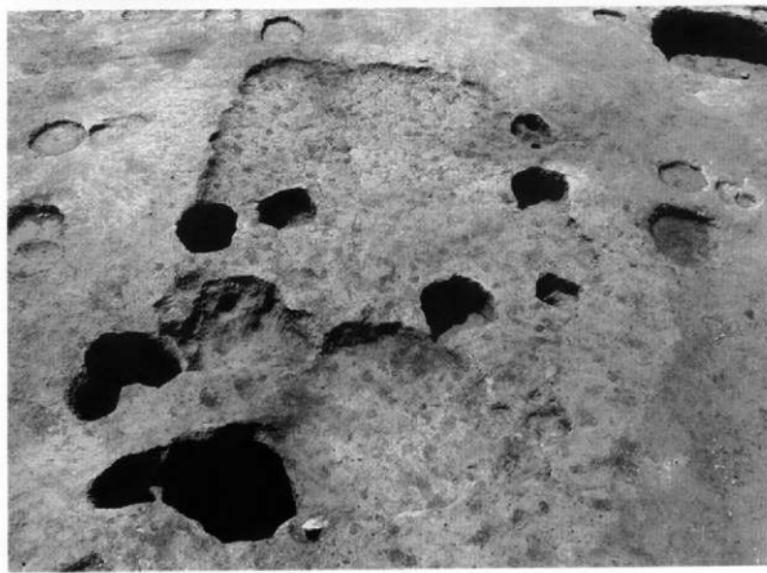
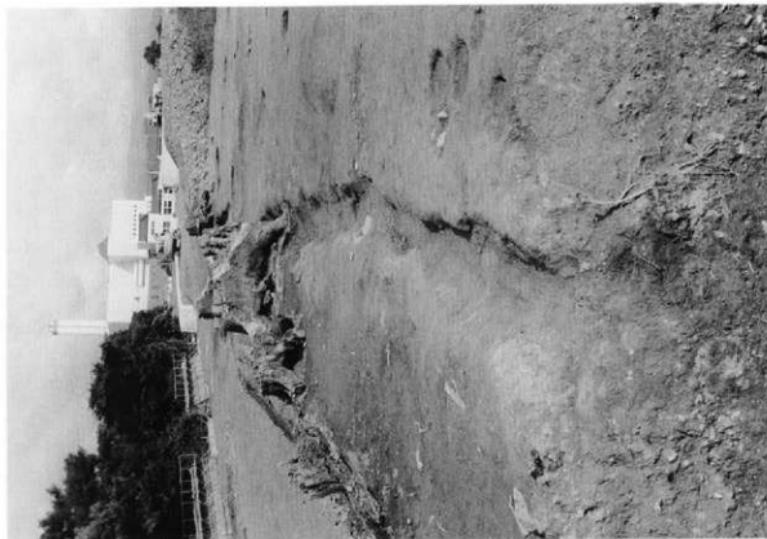
図版33 上 土壌跡SK194（南から）
下 土壌跡SK195（西から）



図版34 上 土壌跡SK196 (北から)
下 土壌跡SK221 (手前) とSK219 (上方) (北から)



図版35 上 溝跡SD102 (南から)
下 溝跡SD102・103 (北から)



図版36 上 溝跡SD159 (西から)

下 小窓穴SX144 (東から)



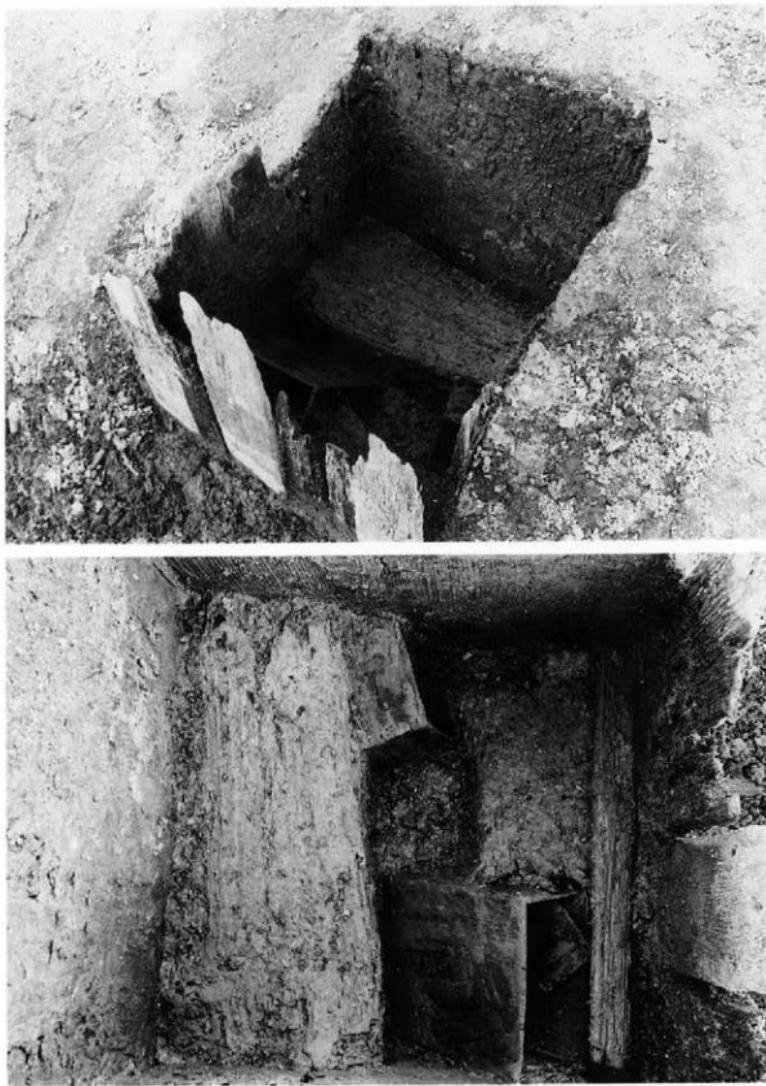
図版37 上 SX238 (西から)
下 土器埋設遺構SX208 (北から)



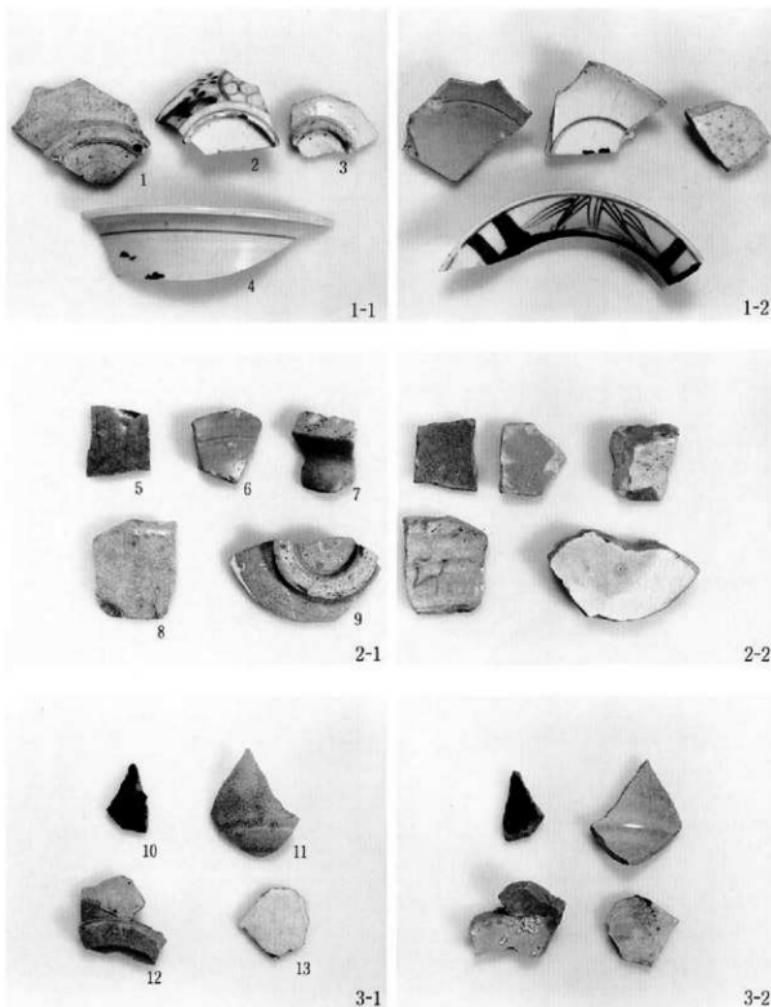
図版38 上 SX248 (西から)
下 陥し穴状遺構SX250と土壤跡SK145 (東から)



図版39 上 近世墓（1～5号墓）遠景（南東から）
下 同 完掘状況
（南から）

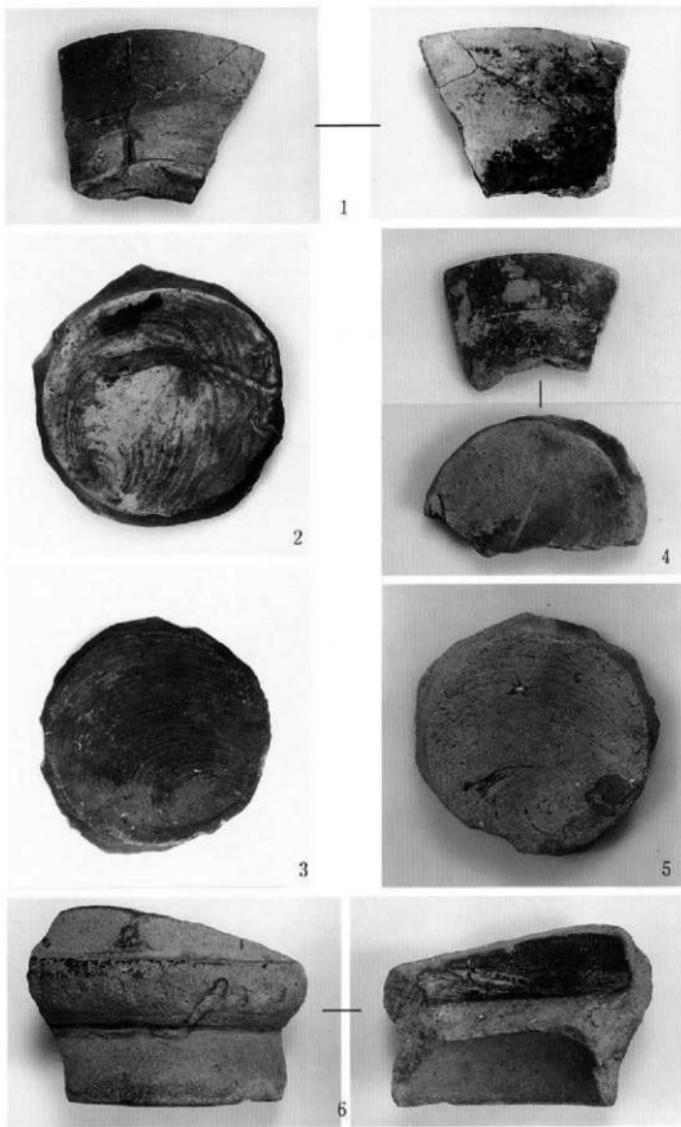


図版40 上 近世墓（2号墓棺柩）（南東から）
下 同 棺内 （西から）



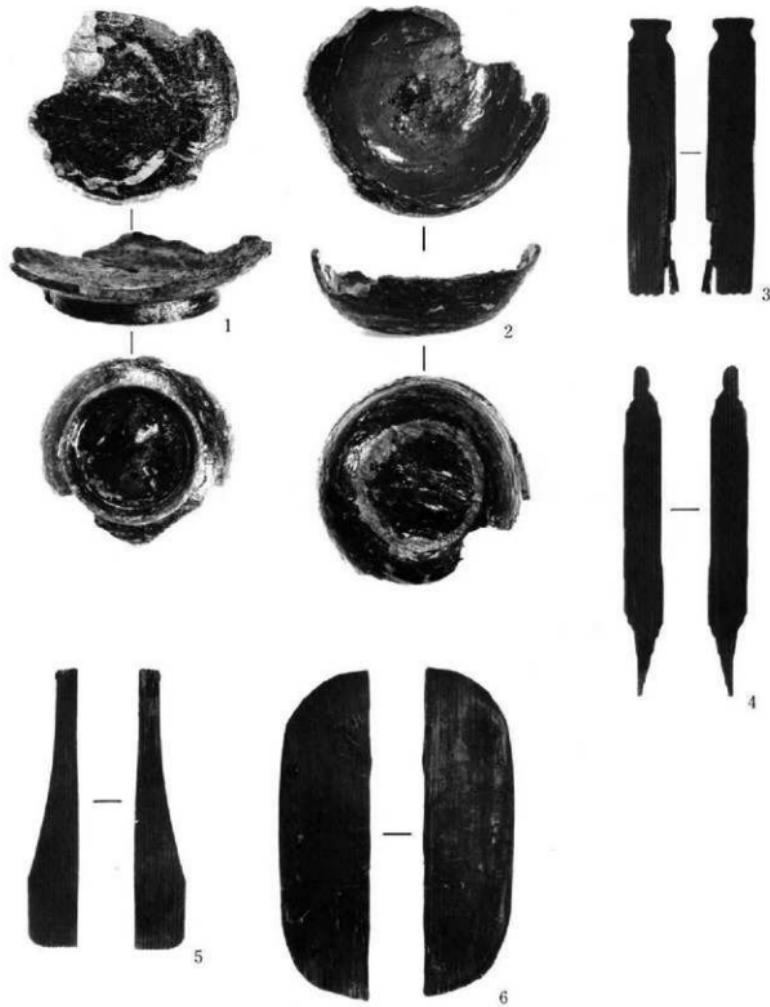
图版41 仙人西遗址出土陶器

- | | | |
|----------------|----------------|------------------|
| 1、SD101（第37图5） | 5、SD101（第37图1） | 9、SD101（第37图4） |
| 2、SD101（柒付碗） | 6、SD101（第37图2） | 10、遣模外出造遗物（天目茶碗） |
| 3、SD101（古伊万里坏） | 7、SD101（第37图3） | 11、同上（相馬大堀） |
| 4、SD101（小鉢） | 8、SD101（第37图6） | 12、同上（美濃） |
| | | 13、同上（德利） |



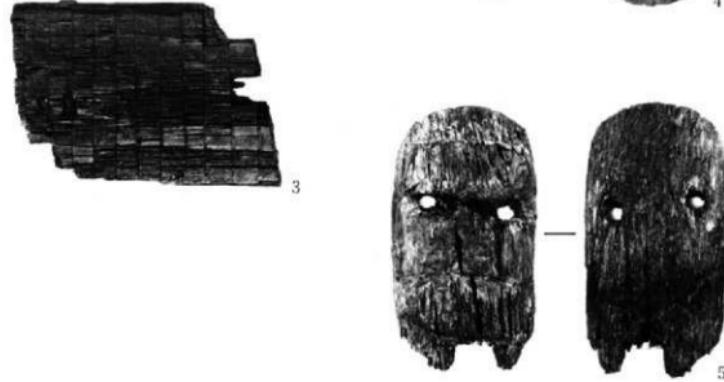
圖版42 仙人西遺跡出土土器・瓦質土器

- | | | |
|---------|---------|----------|
| 1、第38圖2 | 3、第38圖9 | 5、第38圖10 |
| 2、第38圖8 | 4、第38圖3 | 6、第38圖15 |



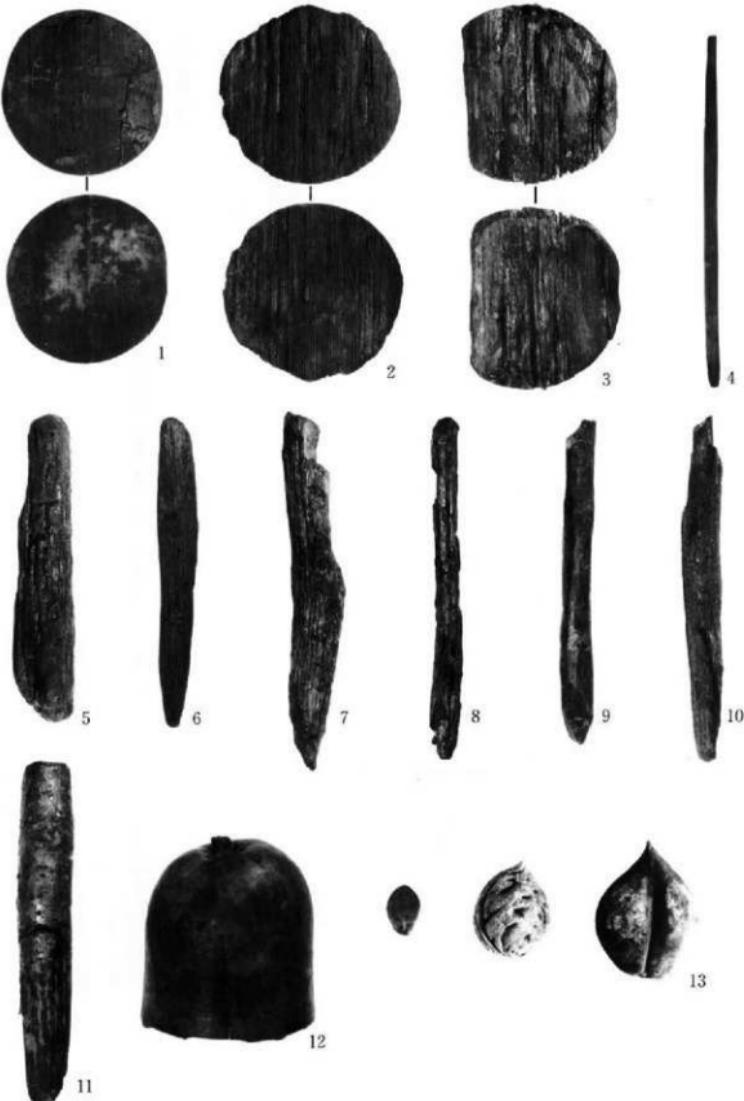
圖版43 仙人西遺跡出土漆器・木製品

- | | | |
|---------|---------|---------|
| 1、第39圖2 | 3、第39圖5 | 5、板狀木製品 |
| 2、第39圖1 | 4、板狀木製品 | 6、板狀木製品 |



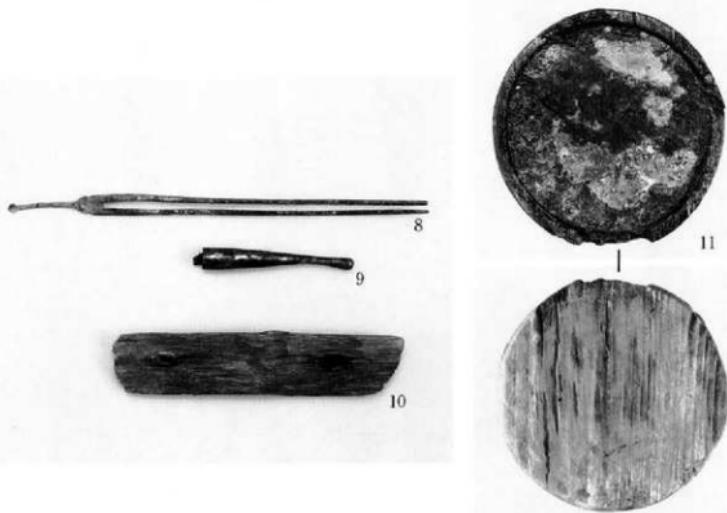
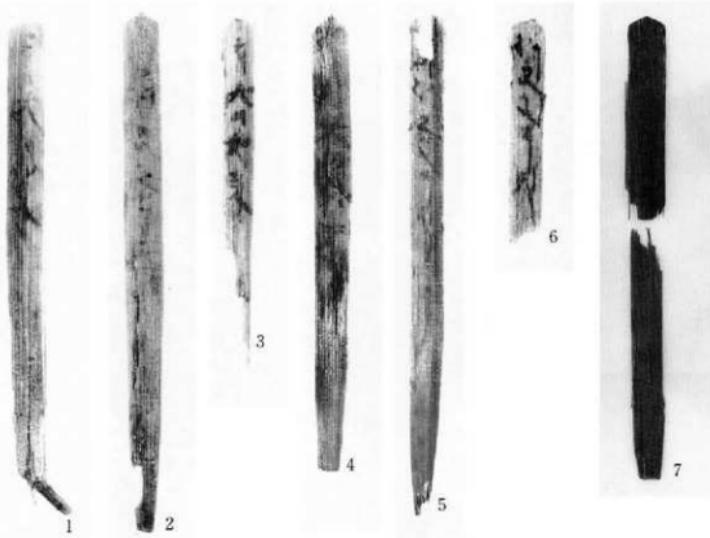
圖版44 仙人西遺跡出土木製品

S D101-2·4·5 S D172-1·3



图版45 仙人西遺跡出土木製品

S D101-1·2·4·5·7~13 S D172-3 S D151-6



図版46 仙人西遺跡出土木製品・金属製品

- | | | | |
|---------|---------|---------|--------------|
| 1、第40図2 | 3、第40図4 | 5、第40図6 | 7、第40図8 |
| 2、第40図3 | 4、第40図5 | 6、第40図7 | 8~11、近世2・3号墓 |



図版47 仙人西遺跡出土中国銭（番号は第3表に対応）



29 30 31 32 33 34 35



36 37 38 39 40 41 42



43 44 45 46 47 48 49



50 51 52 53 54 55 56

図版48 仙人西遺跡出土中国銭（番号は第3表に対応）



図版49 仙人西遺跡出土中国銭（番号は第3表に対応）



77 78 79 80 81 82 83



84 85 86 87 88 89 90

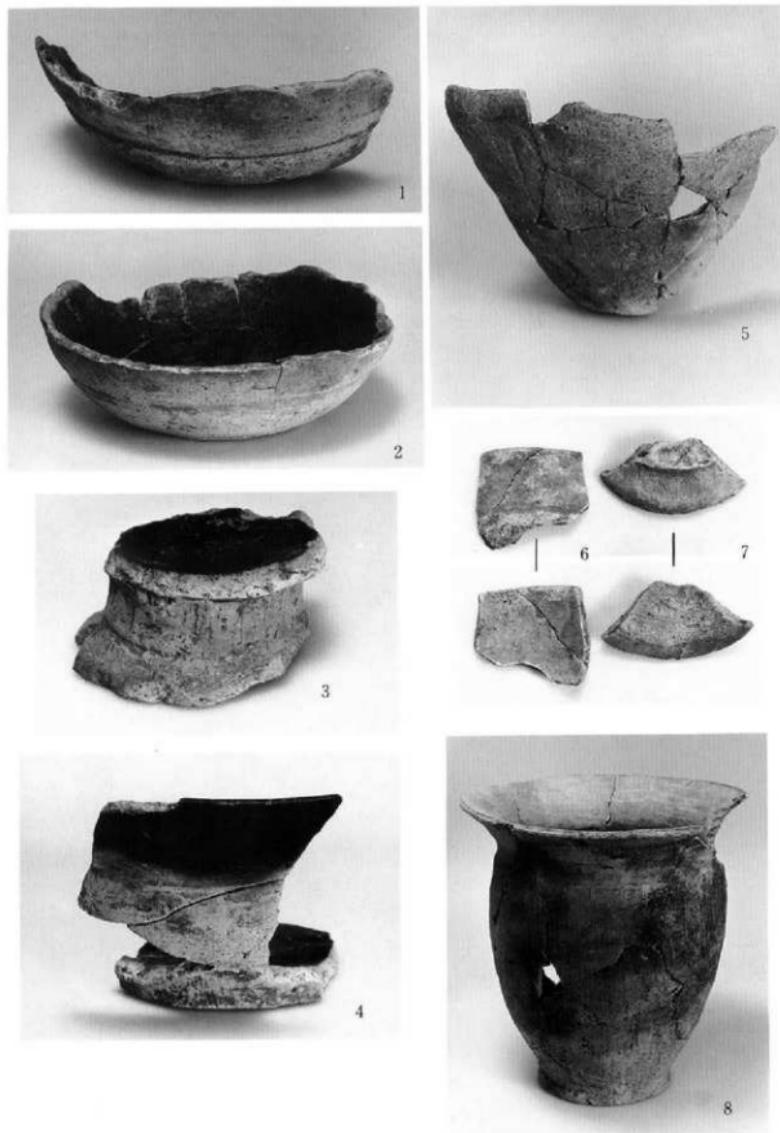


91 92 93 94 95 96 97



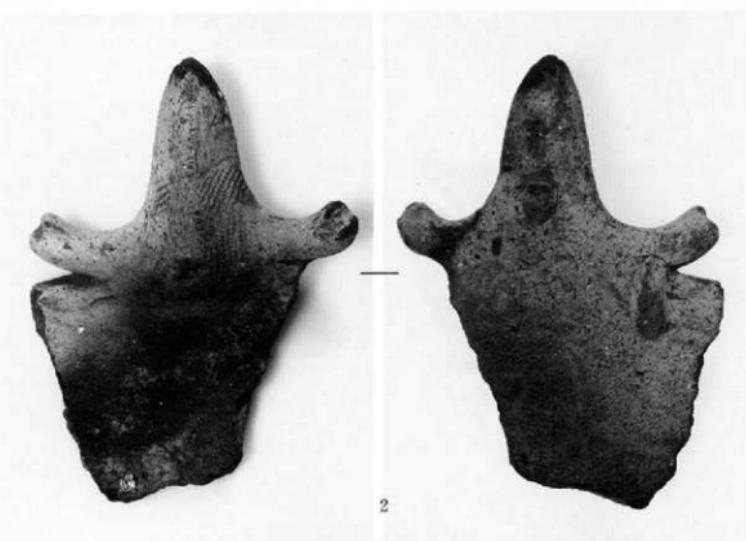
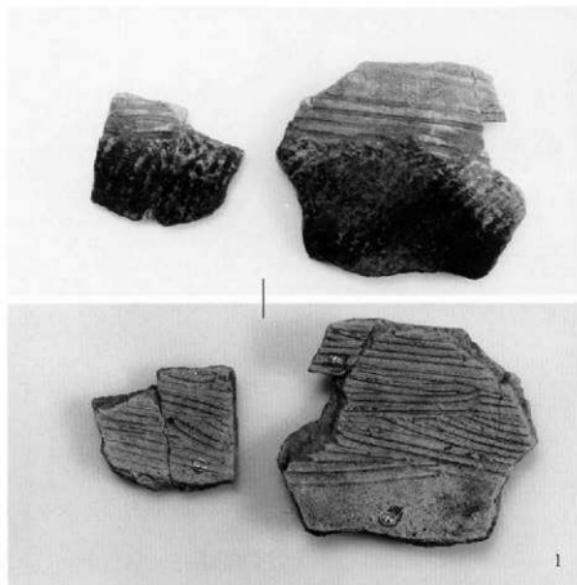
98 99 100 101 102

図版50 仙人西遺跡出土古銭 (番号は第4表に対応)

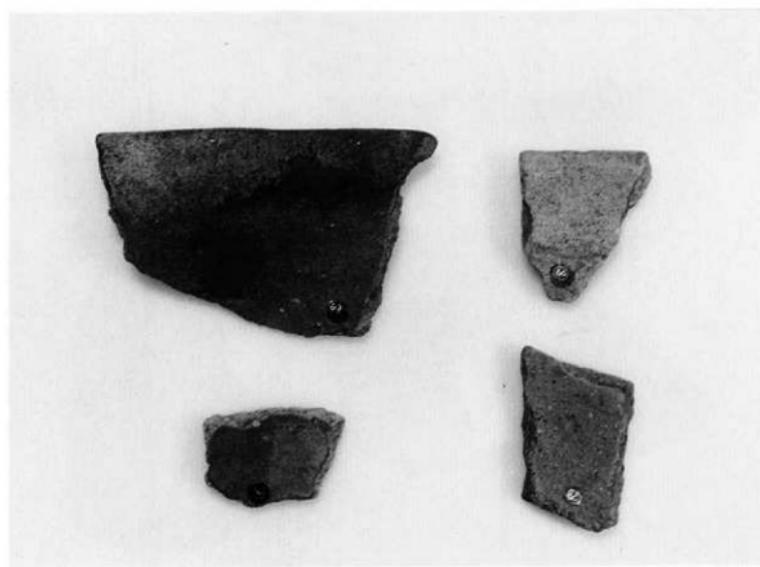
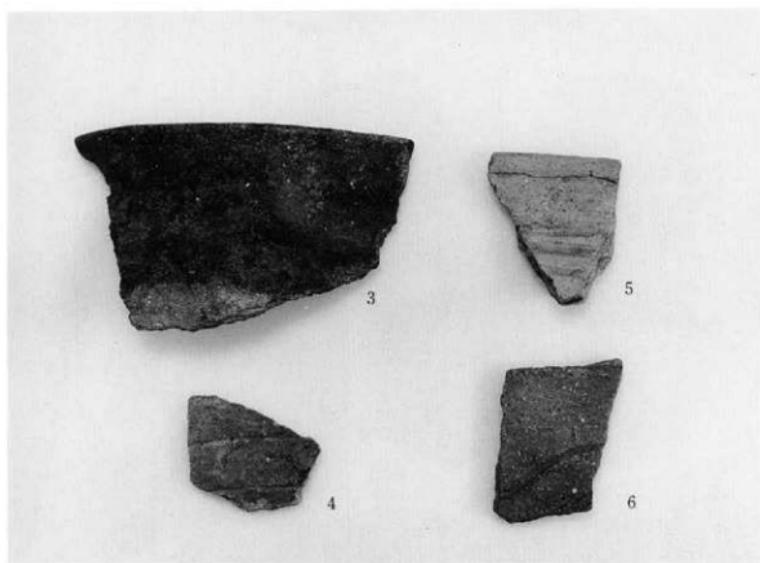


图版51 仙人西遗址出土土器

1~4、第45图1~4 5、第45图6 6~8、第45图10~12

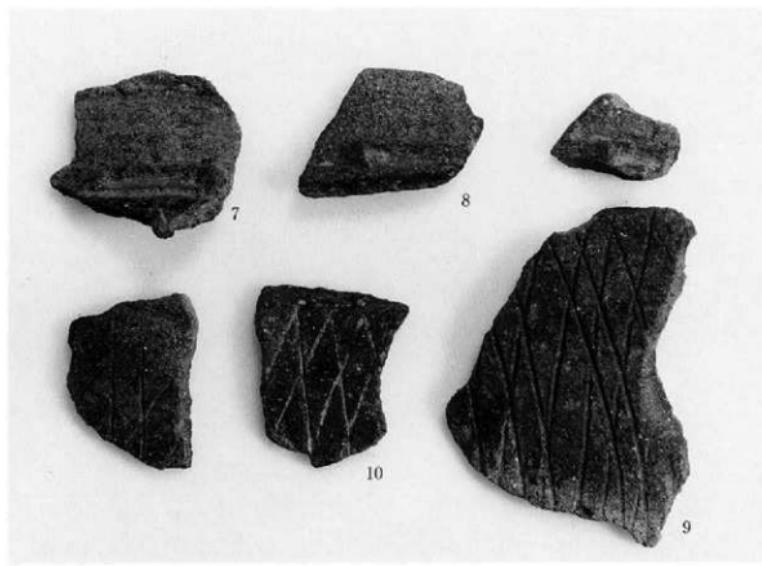


图版52 仙人西遺跡出土縄文・弥生土器 (1、第46図1 2、第46図12)



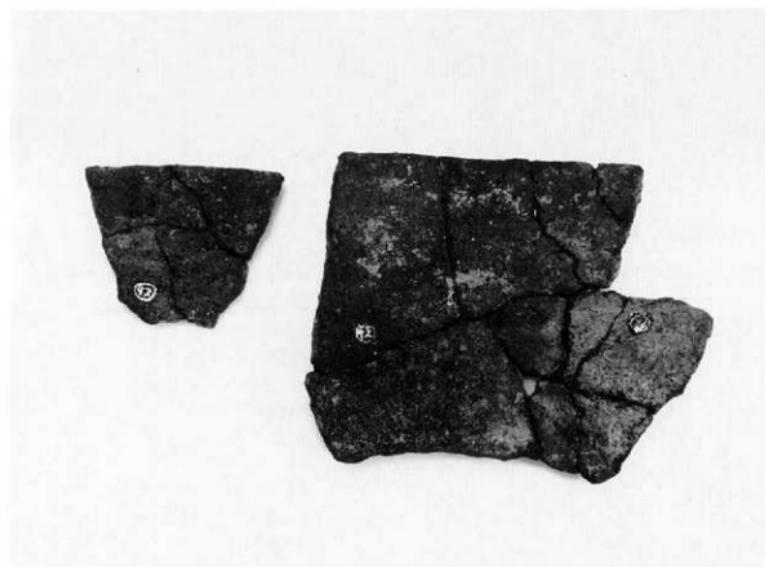
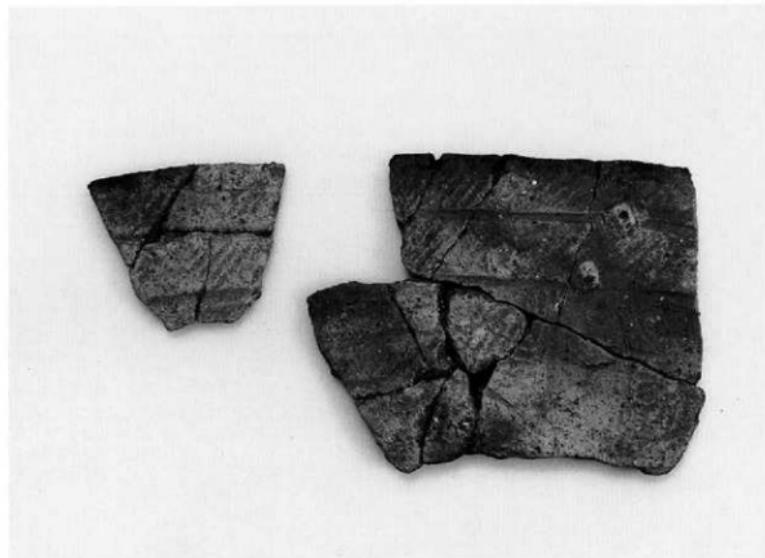
图版53 仙人西遗址SK121出土弥生土器

3、第46图2 4、第46图4 5、第46图5 6、第46图3



図版54 仙人西遺跡SX144出土縄文土器

7、第46図7 8、第46図8 9、第46図9 10、第46図10



圖版55 仙人西遺跡SK184出土繩文土器 (第46圖11)

水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書 第8集

仙人西遺跡

平成9年3月31日 発行

編集 水沢市埋蔵文化財調査センター

発行 胆沢城跡研究会

〒023 水沢市佐倉河字九歳田96-1

電話 0197-22-4400

FAX 0197-22-4600

印 刷

リンベル 鈴木印刷(株) 水沢営業所

〒023 岩手県水沢市東大通り2丁目3-3

TEL・FAX 0197-22-5629